

Fig.97 E区造構配図 (1/100)

2. 弥生時代の遺構と遺物

E区の弥生時代遺構は貯蔵穴のみであるが、古墳時代や中世の遺構覆土から弥生土器が多数出土しており、後世に破壊された遺構があったと考えられる。貯蔵穴は3基が調査区の北隅で切り合っているが、検出時には一続きの落ち込みとなっており、掘り下げる段階で3基の切り合いであることが判明した。SK-5093、SK-5007、SK-5092の順に新しく、西から東へ順次設けているが、いずれも前段階の貯蔵穴を避けるように掘られており、最低でも2基は同時並存していたものと考えられる。

貯蔵穴SK-5007 (Fig.98, PL.15)

3基の中央に位置する。主要部分は調査区内で確認でき、遺構確認の段階から貯蔵穴であることが予想できた。SK-5093を避けるようにして設けられている。プランは東西に長い楕円形で、長径1.8m前後、短径1.4m。円筒状に掘り込み、底面まで1.0mを測る。底面は平坦である。土層断面図の③層は壁面崩壊による堆積土とみられ、その後は窪みとして放置され腐植土が堆積したとみられる。④層を水洗し炭化米を得たので科学分析を行った（付論参照）。

SK-5007出土遺物 (Fig.99)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物はいずれも弥生土器である。

1～3は甕の底部である。1は接地面が張り出し、断面台形の平底となる。外面ナデ以外は器面削落して調整不明。橙褐色～褐色で、径2mm前後の砂粒を多く含み、焼成良好。2は平底で粗雑。内外ナデ、外底はヘラ状工具でナデ調整。橙～暗橙色で、径2～3mmの砂粒を少量含み、焼成不良。内面に炭化物が付く。3は低い脚が付き、接地面は切り落としてナデ、外面を指頭整形し、内底をヘラ状工具でナデ調整する。淡橙色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。内面に炭化物が付く。

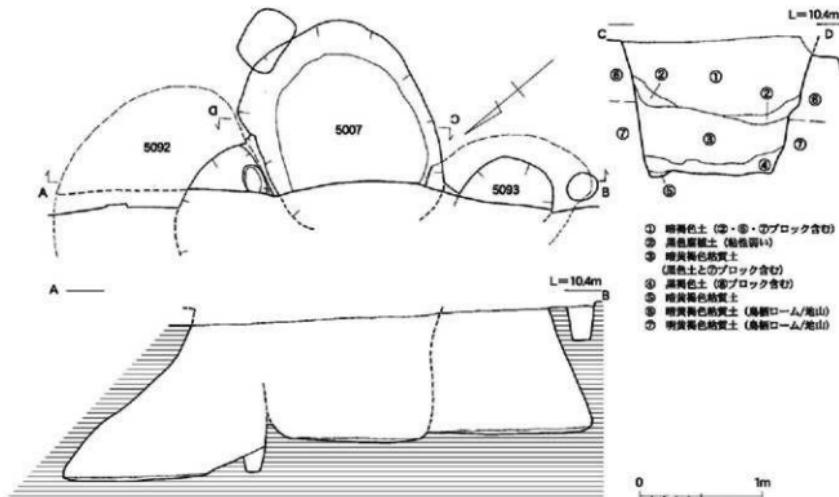


Fig.98 貯蔵穴SK-5007・5092・5093実測図 (1/40)

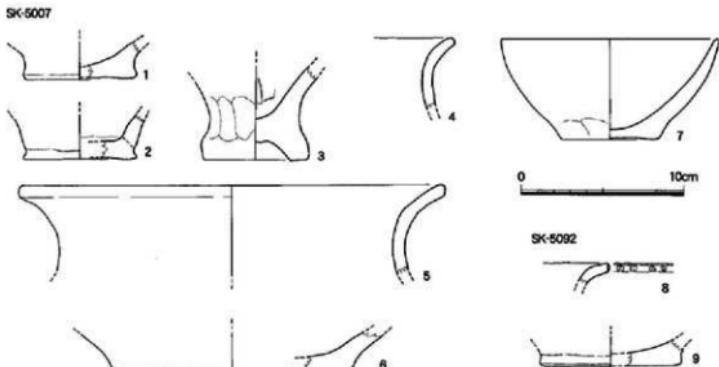


Fig.99 SK-5007・5092出土遺物実測図 (1/3)

4は壺の口縁部小片で、外反して開く。内面にナデ調整を認めるが、他は器面が剥落し調整不明である。淡橙～褐色で、石英などの砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成は一部不良。5も壺の口縁部で、外反する。器面が完全に剥落するが、内面に面取、外面に段の痕跡が残る。径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良。6は壺の底部で、器面剥落するが内面ナデ調整か。にぶい橙～淡褐色で、径1～2mmの砂粒を多量に含み、焼成不良。

7は鉢で、やや肉厚である。内外ナデ調整。淡橙色で、粗砂粒混じりの微砂粒を多量に含み、焼成良好。口径13.2cm、器高6.2cm。

弥生時代前中期～中期初頭頃の造構とみられる。

貯藏穴SK-5092 (Fig.98, PL.15)

SK-5007の北東に接し、3基のうちで最も新しい。主要部分は調査区外にあり、プランは不明である。SK-5007との間に僅かながらも壁を残し、底面は反対側へ大きく膨らんでおり、隣の貯藏穴を強く意識している。現状で上部径0.8m、底面径1.7m、深さ1.2mで3基の内では最も深い。

SK-5092出土遺物 (Fig.99)

弥生土器が少量出土した。

8は壺の口縁部で、如意形をなし強く外反する。口唇にヘラで刻目を施す。小片のため傾きは不確実である。横ナデ調整か。橙褐色を呈し、径2mm以下の砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。9は壺の底部で、平底。内面ナデ、外面は器面剥落する。暗橙～黒褐色で、径2mm前後の砂粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱を受けたものとみられる。

造構の切り合いからSK-5007より新しい。弥生時代中期に下ろうか。

貯藏穴SK-5093 (Fig.98, PL.15)

SK-5007の南西に位置する。3基のうちで最も古い。1/2以上が調査区外にあるが、プランは円形で、径0.8m程度か。断面形はフラスコ状に下に広がり、深さ1.0m。底面径1.3mで、底面の一部はSK-5007と重なりあう。

土器小片と黒曜石が少量出土したが、図化できるものはない。切り合いからSK-5007よりも古いたと考えられる。弥生時代前期の造構であろう。

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 方形周清墓

方形周溝墓は2基を確認したが、うち1基はC区検出のSD-3006から続くもので、C・D区合わせて計3基を確認したことになる。沖積地を見下ろす段丘端部に群集して造営されたと考えられる。

方形周溝墓SD-5001 (Fig.100, Pl.14·15)

調査区の北半部を占める。方形周溝墓の南東コーナー部分であろう。西側と北側は調査区外へ伸びる。北側は攢乱坑に破壊されているが、南北長は内法で8m以上となろう。周溝の最大幅は2.0mで、コーナー部で狭まり幅1.6mとなる。図示した等高線は20cm間隔で、最も深い部分で検出面から65cm、コーナー部はこれより30cmほど浅く、西側と北側へ向かって段状に深くなる。溝の横断面形は逆台形で、深いところではU字形になるが、いずれにおいても周溝内側の傾斜が緩く、外側が急である。覆土は黒色粘質土で、自然埋没の堆積状況を示しており、特に内側から盛土が流入したような痕跡はない。上層から須恵器小片が出土し、古墳時代後期まで窪みとして残っていたと考えられる。

SD-5001出土遺物 (Fig.101)

弥生土器、古式土師器、須恵器、石器（磨石・黒曜石）がコンテナ1/2箱、菅玉が1点出土した。

10~23は弥生土器である。10は壺の口縁部で、端部に断面三角突帯を貼り付け、ヘラで突帯の1/3程度の深さに刻目を入れる。接合しない頸部の小片が別途あり、屈曲部に刻目突帯を貼付する2条突帯甕と考えられる。刻目は突帯の下半を中心に、右から左手前へ引いて施す。外面は目殻条痕を一部ナデ消し、内面は横刷毛目をナデ消す。黒褐~暗橙色を呈し、胎土に石英等の径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良。11は甕の口縁部で、端部は断面三角形に肥厚する。外面横ナテ、内面ナテ調整。

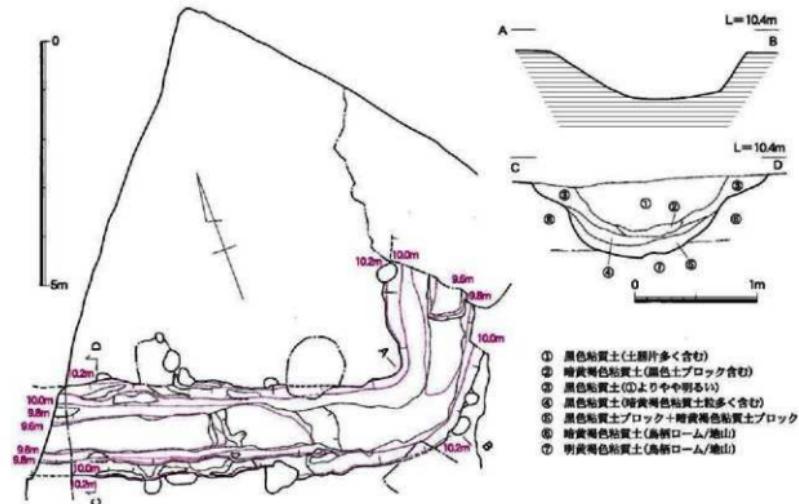


Fig.100 方形周溝墓SD-5001実測図 (1/100・1/40)

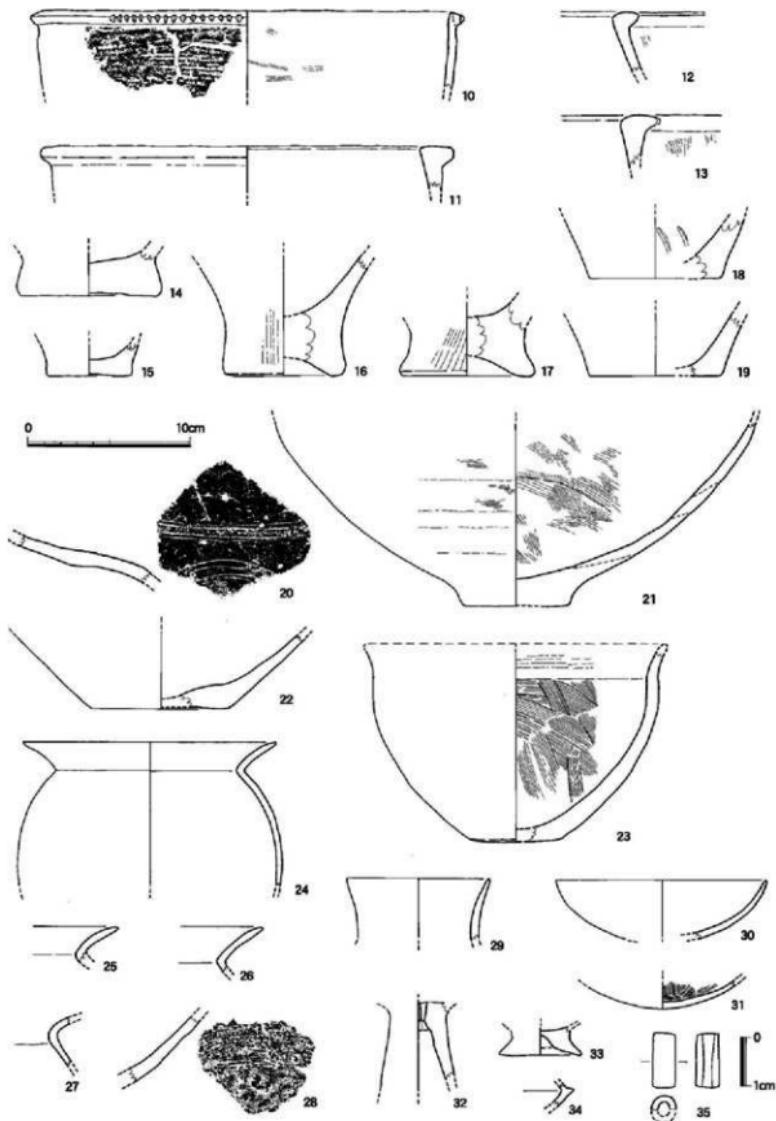


Fig.101 SD-5001出土遺物実測図 (35は1/1、他は1/3)

淡褐～淡黄褐色で、径1mm以下の細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好で口縁上面に黒斑がある。12は甕の口縁部で、断面三角形に肥厚する。外面綵刷毛目、内面ナデ調整。淡橙褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。13は甕の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実。口縁は断面三角形をなすが端部は剥落する。外面綵刷毛目、内面ナデ調整。淡褐～褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。14は甕の底部で、断面台形に張り出す。外面ナデ、外底は圧痕をヘラ削り、内面ナデか。鈍い橙～橙褐色で、胎土に径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。15は甕の底部か。平底。器面が剥落して調整不明。淡橙～黒色で、径2～3mmの砂粒を多く含み、焼成不良。外面に黒斑がある。16は甕の底部で、外底が窪む。外面綵刷毛目、内面ナデ調整か。暗橙色で、胎土に径1mm以下の細砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。17は甕の底部で、脚が付く。外面綫刷毛目、内面ナデ調整。暗橙色、径2mm以下砂粒を多量に含み、焼成良好。18は甕の底部で平底。内外ナデ調整で、内面には工具痕が残る。灰褐～暗橙褐色で、胎土に径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良。19は甕の底部で平底。内面ナデ以外は調整不明。橙褐～淡黄褐色で、径2mm以下の砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。

20は壺の肩部片で、外面に断面鉢形の低い突帯を巡らせるが、剥落して刻目は不明瞭。突帯の上下に各2条の沈線を回し、直下に一本描きで重弧文を入れる。内面には縞がある。外面ヘラ研磨で、内面ナデ調整か。外面淡褐～淡橙褐色、内面灰褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。21は弥生土器壺の底部である。安定の良い平底で、破面が擴口縁をなす。外面は横刷毛目にヘラナデを加えるが、粘土接合痕を留める。内面は細かい刷毛目調整。淡橙褐色を呈し、細砂粒を少量含み、焼成良好。22は壺の底部で、器面が剥落するが外ナデか。淡黄褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。23は鉢の胴部片。外面は器壁が剥落するが、ナデ調整か。口縁横ナデ。内面は口縁が粗い横刷毛目で、脚が細かい斜刷毛目調整。暗橙～橙褐色で、細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。脚外面に黒斑がある。

24～33は古式土師器である。24は甕で、口縁は外反して開き、脚は肩が張る。器壁が剥落して調整不明。暗橙色を呈し、胎土に径2mm砂粒を少、径1mm以下細砂粒を多、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。25は甕の口縁で、調整不明。暗橙～淡橙褐色で、径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成良好。26は甕の口縁で、器面剥落するが横ナデ調整か。暗橙色で、細砂粒を少量含み、焼成良好。二次加熱を受ける。27は甕の頸部片で、胴内面ヘラ削りで、他は横ナデ。淡黄褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、カクセン石を少量含み、焼成良好。28は甕の胴部片で、摩滅して不明瞭だが外面にタタキ痕があり、内面は板状工具によるナデ調整。赤褐～黒褐色で、径2mm以下砂粒・雲母微粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱を受ける。異なるタタキ痕を持つ土器小片が他に1点ある。29は小形甕の口縁部か。摩滅が著しい。淡橙色で、胎土は精良、焼成良好。30は鉢で、摩滅が著しく脆い。明橙褐色で、胎土精良、焼成良好。31は鉢の底部か。外面ヘラ削り、内面は粗い刷毛目後、細い刷毛目調整。暗橙色をなし、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。外面に黒斑がある。32は高环の脚。剥落するが、外面は面取り後、横ミガキ調整。頂部に小孔を開けるが、中心を外れた位置にある。淡褐～暗橙色で、微砂・雲母微粒を含むが胎土精良、焼成良好。33は鉢の脚であろう。二次被熱による器面剥落が著しい。黒褐色を呈し、微砂粒を少量含み、焼成不良。底部のみ完存する。

34は須恵器蓋杯の小片である。灰青色で、胎土は精良、焼成良好。上層から出土した。

35は碧玉製管玉で、上下から穿孔している。縦にふたつに割れている。長1.1cm。中層から出土した。あるいは主体部にあったものか。

古墳時代前期の遺構である。

方形周溝墓SD-5002 (Fig.102, PL.14)

調査区南端近くに検出した。C区の方形周溝墓SD-3006から続く一連の造構である。C区との境は擾乱坑により大きく破壊されている。また、北側も擾乱坑と中世溝に破壊されているが、擾乱層から東へ方形に回り込むことが読み取れる。C区と合わせて計測すると、内法で南北12m、東西11mほどの規模となろう。溝幅は最大1.6mで、横断面は逆台形をなす。図の等高線は20cm間隔で示した。SD-5001同様コーナー部が浅く、南側が段状に深い。南端で深さ56cm、コーナー部はこれより20cm深い。覆土は黒色粘質土である。

SD-5002出土遺物 (Fig.103)

弥生土器、古式土師器、黒曜石などが少量出土した。

36は弥生土器甕の底部。外面ナデ調整で、外底に圧痕とみられる小さな凹凸がある。外面黒褐色、内面淡灰色を呈し、細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。37も同じく甕の底部で、摩滅するが外面刷毛目、外底ナデ調整か。淡黄褐色で、径1~2mmの砂粒を含み、焼成不良。

38は古式土師器甕の肩部である。外面に雜な柳描き波状文の後、5条単位の櫛で横位にゆるい波状沈線を施す。内面は板状工具でナデ調整。外面橙色、内面暗褐色を呈し、胎土に径1mm前後の砂粒と

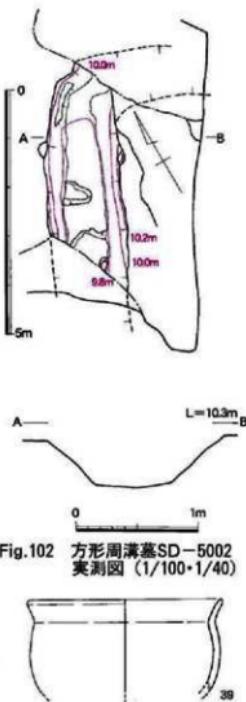


Fig.102 方形周溝墓SD-5002
実測図 (1/100・1/40)

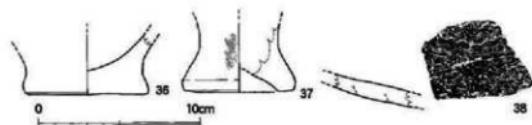


Fig.103 SD-5002出土遺物実測図 (1/3)

雲母粒を少量含み、焼成不良。小片のため図の傾きは不確実。39は古式土師器の小形丸底甕。摩滅して調整痕は残らない。淡黄褐色で、胎土は精良、焼成やや不良。小片のため法量と傾きは不確実。
古墳時代前期の造構である。

(2) 土坑

SK-5090 (Fig.104)

調査区東壁際のやや南よりに位置する。調査区東外へ伸びるが、隅丸長方形プランの土坑であろう。長径0.9m以上、短径0.55m。断面逆台形を呈し、深さ40cmである。

土器小片20点と黒曜石1点が出土したが、図化できるものはない。覆土から弥生～古墳時代の造構と考えられる。

SK-5091 (Fig.104)

SK-5090の2m南西に検出した。西側は中世溝SD-5003に切られている。やや不整な隅丸方形プランで、東西長0.8m以上、南北長1.0mで、深さ10cm。中央部に暗黄褐色粘土が置かれ、壺の口縁が倒

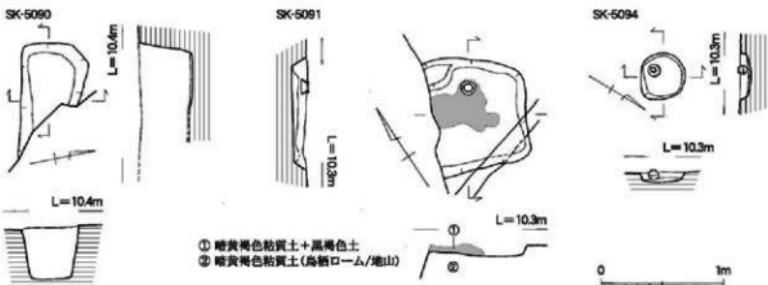


Fig.104 土坑SK-5090・5091・5094実測図 (1/40)

立して出土した。削平により失われた住居のカマドであろうか。

SK-5091出土遺物 (Fig.105)

古式土器器、須恵器、黒曜石が数点出土。

40は古式土器器壺の口縁部で、直立し、やや開く。外表面とも横ミガキ調整で、内面は下地に細かい横刷毛目調整が認められる。暗橙色を呈し、胎土に粗粒混じりの微細砂粒を多量に含み、焼成良好。

図化していないが、他に須恵器小片が1点出土している。古墳時代後期の遺構であろう。

SK-5094 (Fig.104, PL.15)

SK-5091の南東に近接する。円形プランの浅い小ビットで、径0.35~0.4m、深さ10cm弱である。須恵器小壺が正立した状態で出土した。

SK-5094出土遺物 (Fig.105)

出土遺物は図示した1点のみである。

41は須恵器小壺で、完存する。横ナデ整形後、外表面にカキ目を施し、下半を回転ヘラ削りする。灰青色を呈し、胎土に径2mm以下の石英粒を含む。焼成良好で、内底と口縁内側に自然釉を被る。口径6.9cm、器高6.8cm。

古墳時代後期の遺構である。

4. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は溝2条である。いずれも西隣りのC区で検出した溝に連続する。SD-5003の延長は更にF区へと伸びており、台地落ち際のSD-6001を経てSD-6010まで連続すると考えられる。

溝SD-5003 (Fig.106, PL.14・15)

調査区のはば中央を南北に貫く。E区内では直線的に伸びるが、南側は蛇行してC区の溝SD-3001に連続する。北側は擾乱坑に破壊されるが、調査区外へと伸びる。調査区内で8.5mの長さを確認した。

幅1.8~2.3m、横断面形は逆台形で、深さ1.0m。覆土は灰褐色粘質土で、最下層は砂質土へと変わるが水が常時流れた形跡ではない。

SD-5003出土遺物 (Fig.107)

弥生土器、古式土師器、須恵器、中国産陶磁器（白磁・竜泉窯系青磁）、瓦、石器（石庖丁・砥石・黒曜石）、鐵滓（椀形滓）が少量出土した。

42は弥生土器甕の底部で、剥落して調整不明。43も弥生土器甕の底部で、外面ナデ、外底ヘラナデ、内面は調整不明。44は弥生土器甕の底部か。外底ナデ以外は調整不明。45は古式土師器小形器台の脚である。器面が剥落し、内面ヘラナデ以外は調整不明。46は須恵器壺蓋で、横ナデ、天井部は回転ヘラ削り。小片のため不確実だが口径12.0cm。

C区の溝SD-3001との関係から中世後期の遺構と考えられるが、詳細時期を示す遺物に恵まれない。

溝SD-5006 (Fig.106, PL.14)

調査区の南端で一部を検出した。北側は擾乱坑に大きく破壊される。北端で方形周溝墓SD-5002と重複するが、擾乱に接するため切り合い不明瞭で同時に掘り下げた。幅1.2m、深さ40cmを測る。断面逆台形をなし、西壁の立ち上がりがやや緩やかである。

弥生土器、須恵器、中世土師器壺、黒曜石が少量出土したが、図化できない。詳細時期は不明。

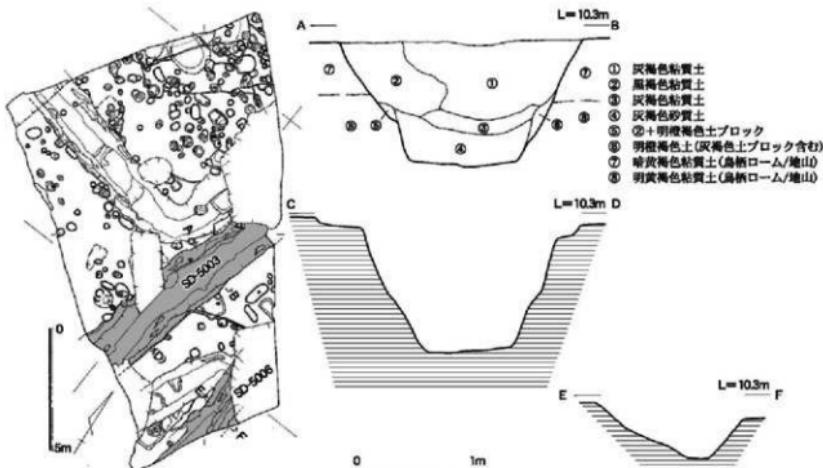


Fig.106 溝SD-5003・5006実測図 (1/200・1/40)

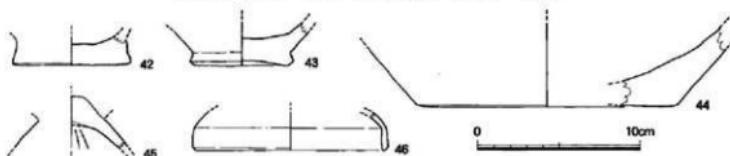


Fig.107 SD-5003出土遺物実測図 (1/3)

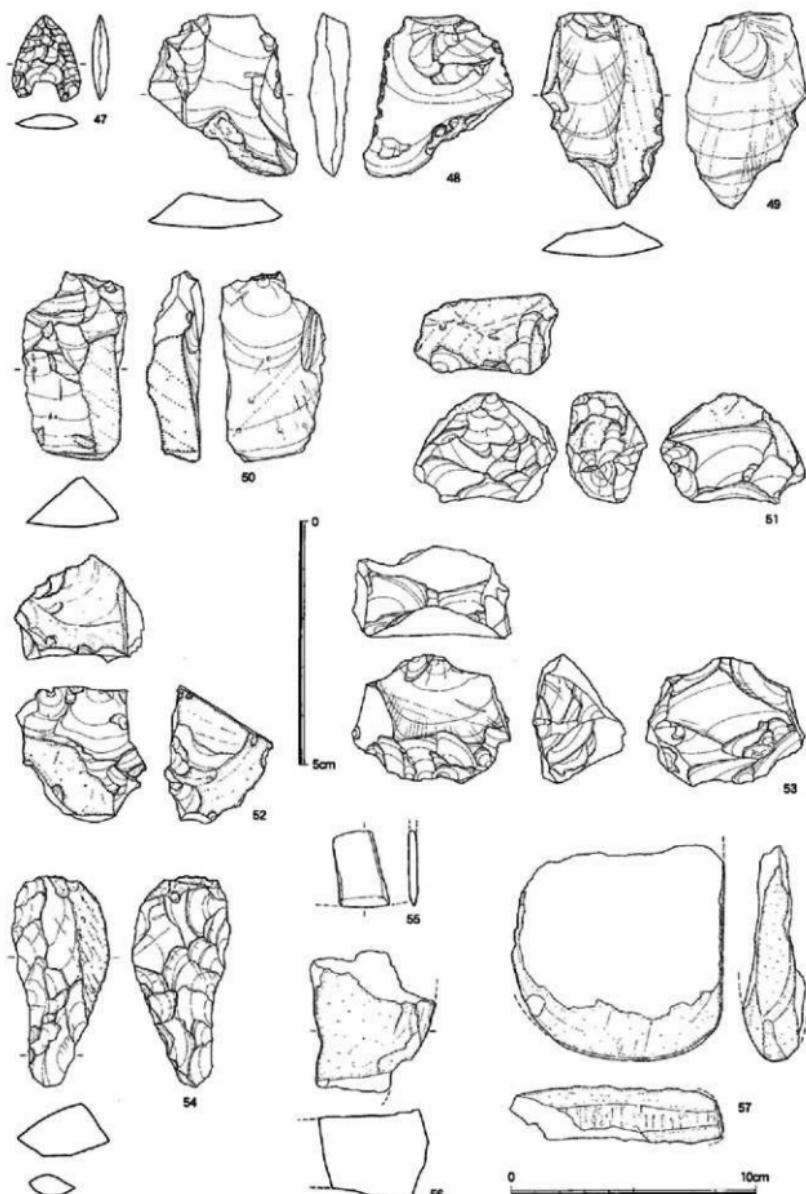


Fig.108 E区出土の石器実測図 (55~57は1/2、他は1/1)

5. その他の出土遺物 (Fig.108)

E区からはコンテナ1/3箱の黒曜石が出土した。大半はチップ(碎片)で、これに混じって以下の石器が認められた。貯蔵穴上面の窪み(SX-5004・5050)やビット(SP)、中世溝(SD-5003)などから出土したが、弥生時代前期を中心とする遺物と考えられる。

47は打製石鎌である。両面加工で剥離は細かく粗い。漆黒色黒曜石。長1.7cm。SX-5004出土。48・49は使用痕のある剥片で、いずれも一側縁に微細な刃こぼれがある。48は不整形の剥片で、背面の剥離は上方から加える。打面は自然面、打角は112°前後で、下端は節理面。漆黒色黒曜石で混入物が多い。長3.3cm。SX-5050出土。49は縦長の剥片で、背面の剥離は主に上方から加える。打面は剥離面だが無調整で、打角98°。漆黒色黒曜石。長4.0cm。SP-5031出土。50は剥片で、縦長で厚みがある。背面の剥離は上方から加える。背面と下面に自然面を残す。自然面打面で、打角は114°。漆黒色黒曜石で、混入物が多く節理が入る。SX-5050出土。51~53は黒曜石製の石核か。いずれも打面調整をせず、打面を転移しながら剥片剥離作業を行っている。51は上面・側面・背面の一部に自然面を残す。主に下方から剥離作業を行い、最後に上方から約100°の打角で加撃するが階段状剥離となり、残核を放棄している。漆黒色黒曜石。高2.2cm。SD-5003出土。52は正面のみを剥離作業面とし、打面を含め他面は全て自然面である。打角62°で、剥離の下端は節理面で抜ける。漆黒色黒曜石。高2.8cm。SP-5085出土。53は六面の全てで剥片剥離を行うが、横側面はチップ状の剥離である。最終的には上・下の二方向から剥離作業を行い、残核を放棄している。混じりの少ない漆黒色黒曜石。高2.6cm。SX-5050出土。これらの石核の剥離痕はいずれも寸詰まりで小さく、47の小形石鎌の原材にすら不適である。また、48~50の剥片の背面に残る剥離痕の打撃方向は一定であり、打面転移を繰り返す石核からこのような剥片は生まれないであろう。よってこれらは同時期の所産でないか、あるいは残核ではなくこれ自体が道具として用いられた可能性があろう。

54は石錐か。刃部は扁平で穿孔具としての锐利さに欠ける。厚みのある安山岩製の剥片を用い、打面と背面に自然面を残す。SP-5031出土。55は石庖丁か。小片に過ぎない。SD-5003出土。56は砥石片である。砂岩の一平坦面を使用するが、さほど平滑ではない。SD-5003出土。57は磨石である。磨製石斧の破損品を転用しており、下端に使用痕があり、更に破損して放棄している。SD-5001出土。

6. 小結

弥生時代の遺構は前期末～中期初頭前後とみられる貯蔵穴3基のみである。切り合があるが、最低2基は同時並存とみられ、一組の貯蔵穴と考えられる。当該期の弥生土器が後世の遺構覆土から出土しており、消失した弥生時代遺構が周囲に存在したと考えられる。貯蔵穴はF区の北半分でもまばらに分布するが、F区南半部では環状に集中して分布する状況を示しており、いくつかのグループに分かれて占地していたものと考えられる。

古墳時代前期の遺構は方形周溝墓2基のみで、隣接のC区で検出したものと合わせ計3基を確認した。E区の2基は、ひとつは溝の内法で8m以上、いまひとつは同じく内法で南北12m、東西11mほどの規模となろう。いずれも主体部は残らない。これに対応する集落としては、F区南半部で確認した竪穴住居4棟があり、集落から少し距離を置いた場所に墓地が営まれたと考えられる。

中世の遺構は溝2条である。この溝の南側は隣接のC区を通ってF区へと伸びていき、東へ曲がっている。一方の北側は、段丘のへりに沿って更に北へ伸びていくと考えられる。

PL.14



1. E区遠景（北西から）

※作業中の現場はF区



2. E区全景（南東から）



1. 貯蔵穴SK-5007(中央)・5092(手前)・5093(奥)(北東から)



2. 貯蔵穴SK-5092(南西から)



3. 貯蔵穴SK-5007土層断面(南東から)



4. 方形周溝墓SD-5001土層断面(東から)



5. 土坑SK-5094(北から)



6. 溝SD-5003土層断面(南から)

第八章 F区の調査

1. 調査の概要 (Fig.109・111)

F区は南北に細長く、中央部で二分して調査を行った。表土除去はE区に統一して平成15年5月19日より行い、6日間を要した。F区北半部はE区と並行して調査を進め、途中G区の調査も並行して行った。7月9日で作業終了し、翌10日から埋め戻し、南半部の表土剥ぎを25日まで行った。7月28日より造構確認作業を開始したが、工程の都合により盆休みを挟んで9月22日で一旦中断。11月26日より調査を再開し、12月15日から埋め戻しを始め、22日に終了した。翌年1月6日にF区東側の拡張部の表土剥ぎを行い、23日に埋め戻して調査終了した。その後、1月末まで土器洗い等の整理作業にあてた。

道路予定地は幅22mであるが、隣地との間に引きを取ったため調査区の東西幅は20m前後である。南北長は90mを測るが、北端はC区と一部重複させた。地表面の標高は11.1～11.6mで北側がやや高いが、逆に造構面は北が若干低く10.4～10.6mである。従って北側ほど表土が厚く、北端では1.2mであるが、南半部では30～50cm程度である。調査区内には、既存建物の解体時に生じたとみられる攪乱坑が生活道路に沿って多数あり、造構を大きく損なっている。造構面は鳥栖ロームで、調査区の西端は段丘崖となって急激に落ちている。この部分にはコンクリートブロック塀が巡らされているが、西側隣地は調査区より2m前後低く、大きく削平されていると考えられたため調査対象から除外した。

検出した造構は、弥生時代前期中葉～中期前葉の竪穴住居4・溝3・木棺墓3・土墳墓2・甕棺墓9（成人棺4、小兒棺5）・貯蔵穴20・土坑17、古墳時代前期の竪穴住居4、弥生～古墳時代の竪穴住居1・土坑4・性格不明造構1・ピット多数、奈良時代の溝1、中世の柱列1・掘立柱建物1・溝7・土坑2である。造構は特に南半部に濃く分布し、激しい切り合いが認められ、中でも貯蔵穴は竪穴住居や溝の下層から新たに見つかることが多かった。ただし削平を受けており、造構の残りは良いとは言い難い。遺物は弥生時代前～中期土器、古式土師器を中心に出土し、磨製石剣、磨製石鎌、石庖丁、石斧、砥石などのほか、黒曜石製の打製石鎌や剝片石器・石核・剝片・碎片が多数含まれる。

造構実測の基準線は、E区から引用した。標高も同じである。



Fig.109 F区位置図 (1/1,500)

2. 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 (Fig.110)

弥生時代～古墳時代前期の造構覆土はいずれも黒色粘質土で酷似しており、出土遺物が少ない造構（特に土坑など）については時期が区別できないものがある。このため、弥生～古墳時代の造構についてはまとめて報告する。また、報告した造構以外にピット多數があり、柱穴が並ぶものもあったが、掘立柱建物としては復元できなかった。

(1) 堅穴住居

豎穴住居は9軒を報告する。弥生時代4軒、古墳時代前期4軒、時期不詳1軒で、大半はF区南北部で検出した。一部しか調査できず住居の可能性があるが明確でない遺構を含んでいる。

堅穴住居SC-6016 (Fig.112)

F区北半部やや南寄りの東壁際に位置する。擾乱坑と調査区壁の間で一部を確認したに留まり、この項で報告するが住居である確証はない。南側に壁の立ち上がりと考えられる直線的な落ち込みが東西方向に0.7m伸び、北側は擾乱坑に切られている。南北長1.8m、深さ15cmで、床面は僅かに北へ下る。

SC-6016出土遺物 (Fig.113)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物はいずれも弥生土器である。

1は甕で、如意形口縁をなし、口唇に板小口で刻目を施す。刻目は深く密に口唇全面に入る。外面は縦方向の細い刷毛目の後にナデ調整を加えており、他は器面が剥落して調整不明。黒色ないし淡褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良。小片のため図の傾きは不確実。2も甕の口縁部で、逆「L」字形を呈し上面が内傾する。頸部に断面三角形突帯を貼付して横ナデするが、それ以外は器表面が剥落して調整不明。橙～淡橙色を呈し、胎土に石英粗粒と細砂粒を多量に、雲母粒を少量含み、焼成不良。

3は壺の胴部で、外面に4条以上の沈線と重弧文を施した痕跡が残る。器壁が完全に一枚剥落し、更にローリングを受けているため調整不明である。外面は丹塗りであった可能性がある。細砂粒と雲母粒を僅かに含み精良で、焼成不良。胴部の小片のため傾きと法量は不確実である。

弥生時代中期前葉の遺構であろう。

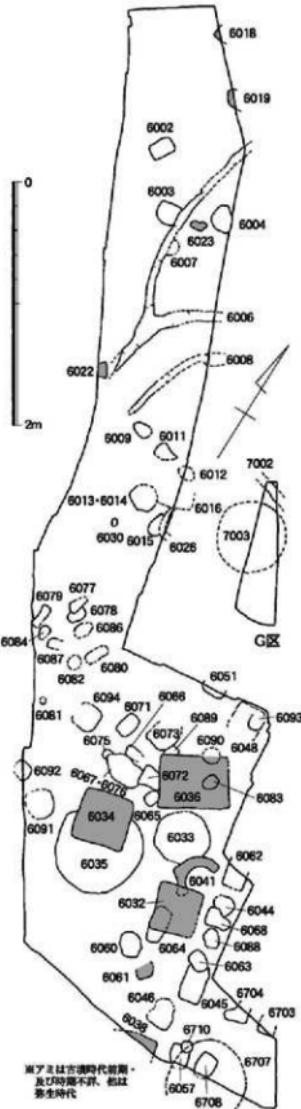


Fig.110 弥生～古墳時代の遺構配置図（1/400）

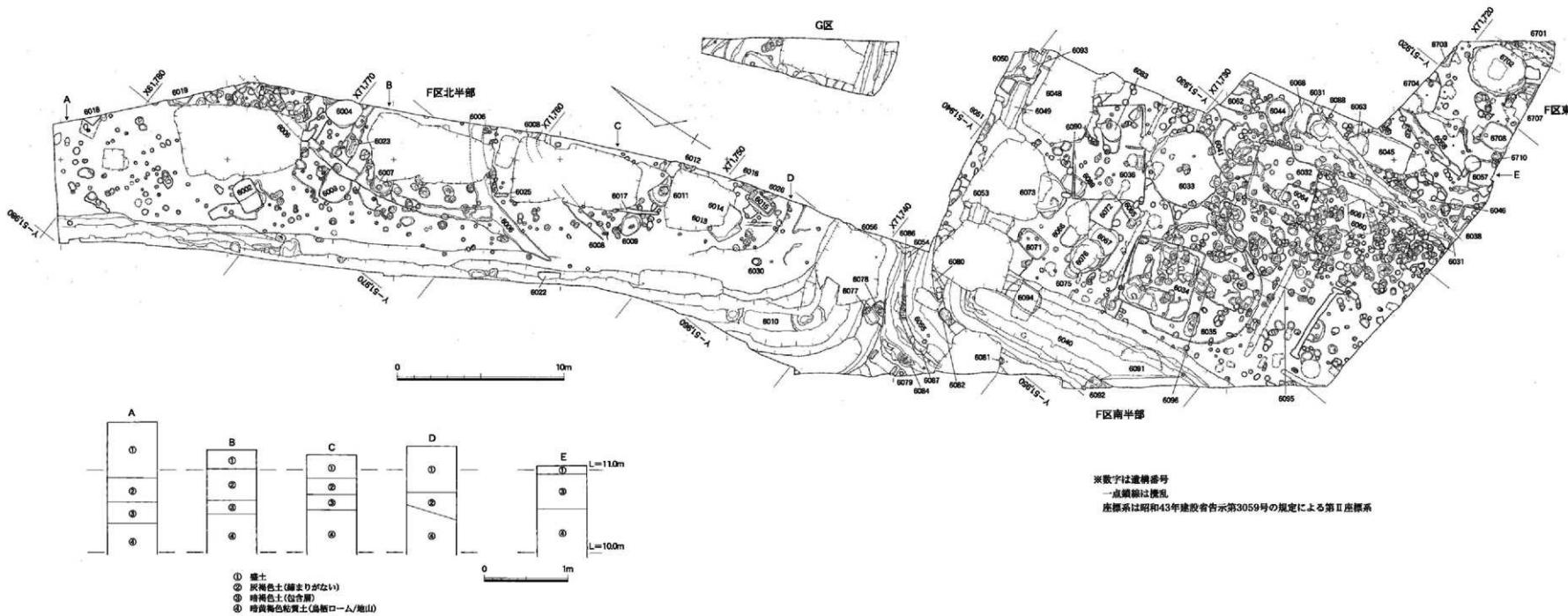


Fig.111 F区造構配置図(1/200)・土層略測図(1/40)

堅穴住居SC-6018

(Fig.112)

F区北半部の北東壁際に位置する。上面が擾乱坑により若干の削平を受ける。壁際に方形に曲がる住居コーナー部らしき造構が一部かかる。主要部分は調査区外にあるため、住居である確証はない。調査区内で南北長0.7m、東西長0.8mを測る。壁はほぼ直に立ち上がり、底面までの深さは10cmを残す。覆土は黒色粘質土である。

土器小片9点、滑石片・黒曜石各1点が出土した。

Fig.196に石器を図示した。

覆土から弥生～古墳時代の造構と考えられるが、詳細時期は不明である。

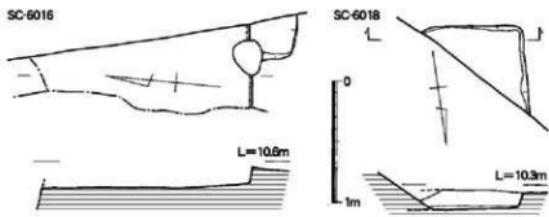


Fig.112 堅穴住居SC-6016・6018実測図 (1/40)

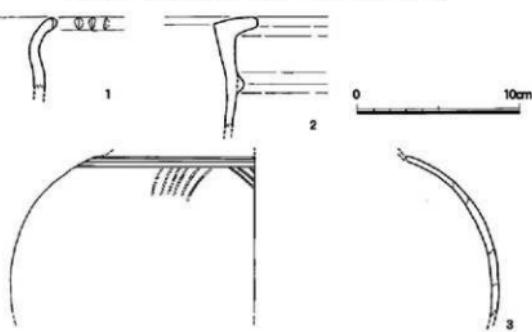


Fig.113 SC-6016出土遺物実測図 (1/3)

堅穴住居SC-6032 (Fig.114, PL.19)

F区南半部に検出した。調査区の南端から北へ10mほどに位置する。南東隅を中世溝SD-6031に切られる。南北にやや長い隅丸方形プランで、北へ少し開いており、南北長4.0m、東西長3.4～3.8mを測る。深さは残りの良い北側で20cm、南側では10cmに満たない。床面の中央に地床炉とみられる径35～45cmの隅丸方形の浅い窪みがある。深さ10cmで、覆土は下層に焼土、上層に炭化物が堆積していた。炉を挟んで南北に対峙する二本のピットが主柱穴と考えられる。北側のSP-6579は径30cmの円形プランで、深さ40cm。他方の主柱穴は楕円形プランで径30～50cm、深さ35cm。いずれにも柱痕跡は認められない。住居覆土は黒色粘質土で、地山は鳥栖ロームである。床面には汚れた地山土で薄く貼床を施しており、SD-6031に切られる部分では貼床によってプランが確認できた。東壁と北壁の一部には壁溝が巡る。造構平面図にスミアミで示した部分は炭化物で、床面から5～10cm浮いた状態で出土している。焼失住居とみられる。図に示したSK-6085・SK-6577等は下層造構である。

SC-6032出土遺物 (Fig.115, PL.26)

弥生土器、古式土師器、黒曜石、焼土塊がコンテナ2箱出土した。染付小片1点が混入している。図示した遺物は全て古式土師器である。

4は甌で底部を欠く。器面が摩滅して残りが悪いが、胴外面は縦刷毛目後に横刷毛目を施し、肩部にヘラ先で縦に刺突文を3つ加える。胴内面はヘラ削り、口縁内外を横ナデ、頸内面はナデ調整である。淡灰色を呈し、胎土に微細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。胴外面に黒斑がある。

5は甌の口縁部で、外反して開く。調整痕は残らない。黄白色をなし、微細砂粒を多量、暗赤色粒を

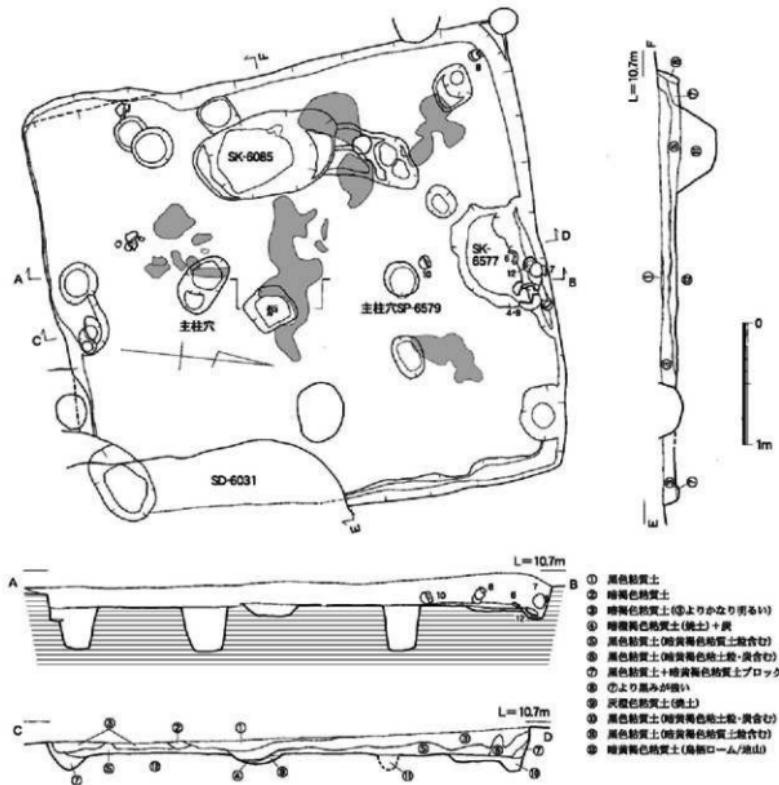


Fig.114 整穴住居SC-6032実測図 (1/40)

少量含み、焼成良好。6と7は二重口縁壺で、接合しないが同一個体であろう。口縁の接合部分から分離している。摩滅しており調整痕の残りが悪いが、口縁から頸部はヘラミガキ又は研磨、外面は頸部が刷毛目、胴部が継刷毛目後横ミガキ又は研磨か。内面は丁寧なナデ調整である。素地土は暗橙色であるが、研磨により器表面が暗褐色を呈する。胎土は精良で、細砂を僅かに、雲母微粒を多量に含む。焼成は口縁部分のみが不良で黒色をなす。8は台付長頸壺で、口縁の一部を欠くが他はほぼ残る。外面は口縁と脚に継刷毛目を施すが、他は調整不明。内面は口縁が横刷毛目、胴が指整形で、脚が横刷毛目調整である。暗橙色を呈し、胎土に径2mm以下の砂粒を少量含むが精良で、焼成良好。9は小形丸底壺で、口縁は屈曲して短く開く。器面が剥落するが、外面刷毛目、内面へラ整形で、口縁横ナテ調整。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含むが精良で、焼成良好。10は鉢で、ほぼ完存する。口縁は屈曲して短く開き、不安定な平底をなす。器面が剥落して調整不明。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒・粗大石英粒・暗赤色粒・雲母粒・黒色粒を少量含み、焼成良好で脚外面に黒斑がある。口縁が片口状に強く赤変しており、使用によるものであろうか。11は脚付鉢でほぼ完存する。体部は

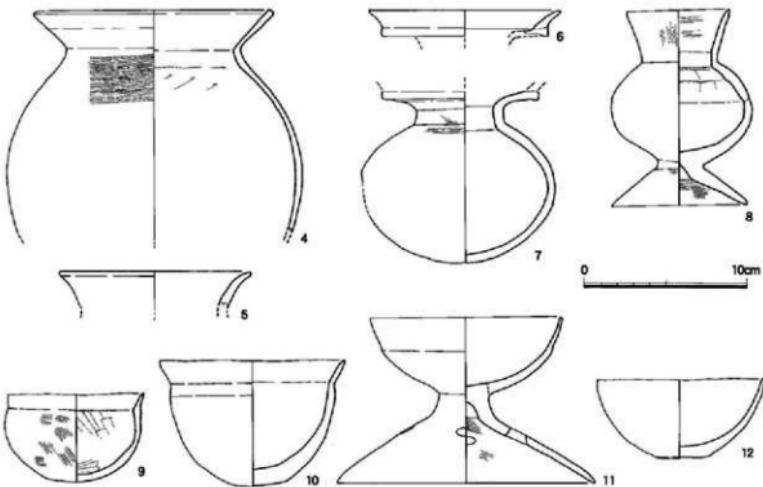


Fig.115 SC-6032出土遺物実測図 (1/3)

丸く、外面に段を設けて口縁との境とする。脚はラッパ状に大きく広がり、鉢底に差し込んで接合する。脚裾の四方には外面から透孔を穿つ。外面は刷毛目後へラミガキ、脚内面は刷毛目調整で、それ以外は器表面が摩滅して調整不明である。淡橙～淡灰橙色を呈し、胎土は極めて精良である。焼成良好。12は直口の鉢で、平底である。器壁が完全に一枚剥落しており、本来の器厚ではない。調整も不明。胎土に径2mm以下の砂粒・雲母粒・カクセン石を少量含み、焼成不良。二次加熱を受けたとみられる。

古墳時代前期の竪穴住居である。

竪穴住居SC-6033 (Fig.116, PL.19)

F区南半部に検出した。SC-6032と約2m離れた北西に位置する。擾乱や後世造構に一部を切られる。やや不整な円形プランを呈し、直径4.3～4.7m、深さは10cmで残りは悪い。中央に径40～50cmの不整形の浅い炉があり、焼土が堆積していた。炭化物の堆積は認められない。壁際に5つのピットが不規則に配されており、主柱穴の可能性がある。柱穴は円ないし稍円形プランで、径20～55cm、深さ30～55cmを測る。いずれにも柱痕跡は認められない。住居の覆土は黒色粘質土で、床面は地山（鳥栖ローム）削り出しである。

SC-6033出土遺物 (Fig.117)

弥生土器、黒曜石がコンテナにして約1/3箱出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

13は甕の口縁部で、如意形をなす。小片のため図の傾きは不確実である。器壁が完全に一枚剥落するが、口唇部に刻目の痕跡を留める。径1mm以下の細砂粒を多量に含み、焼成良好。14も甕の口縁で、逆「L」字形をなし、口縁上面は内傾する。調整痕は不明。淡黄褐色で、径3mmの粗砂粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。15も甕の口縁で、断面三角形を呈する。口縁端部は剥落する。外面刷毛目、内面ナデ調整か。口縁は横ナデ調整。暗橙～黒褐色で、胎土に細砂粒を多量、雲母粒を少量

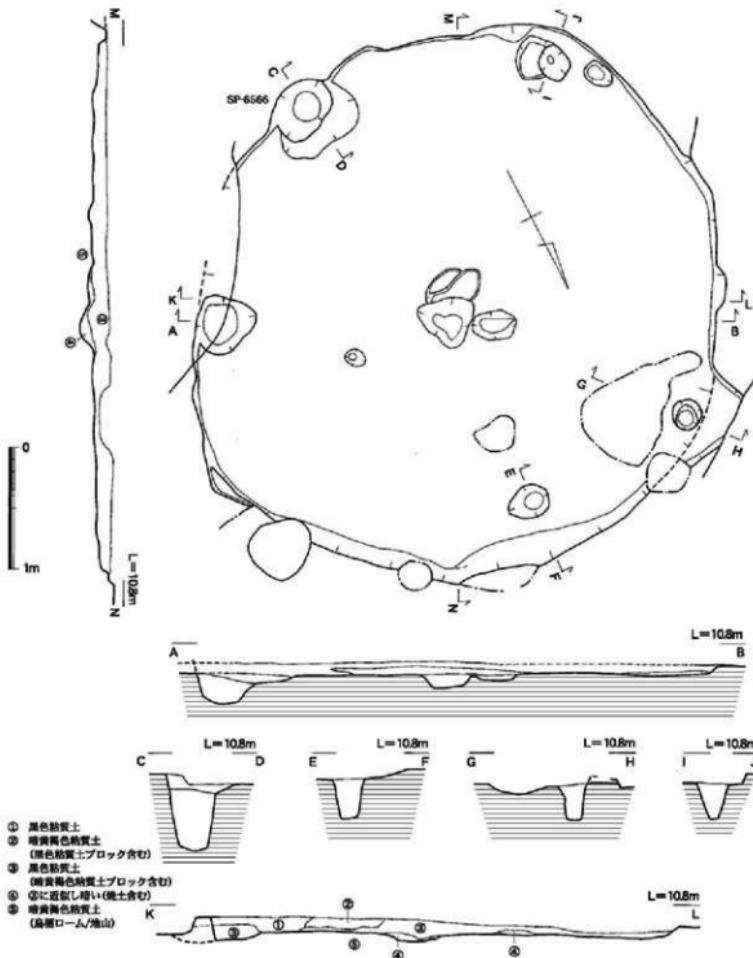


Fig.116 壁穴住居SC-6033実測図 (1/40)

含み、焼成不良。SP-6566出土。16は鉢の底部か。断面台形に下端が張り出し、胴部は大きく開く。内外ナメ調整で、外底に木葉圧痕が残る。黒～黒褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。17は鉢または甕の底部で、調整不明。黒～黒褐色で、径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。18は壺の底部であろう。平底。器面が剥落して調整不明。径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良である。

弥生時代中期初頭～前葉の住居であろう。

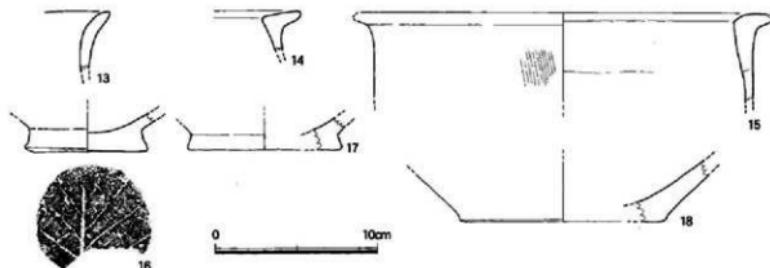


Fig.117 SC-6033出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居SC-6034 (Fig.118、PL.19)

F区南半部の中央付近に位置する。SC-6035を切るが、覆土が酷似するため重複部分ではプランがつかみにくい。南へやや開く隅丸方形プランで、東西にやや長く、東西4.2~4.5m、南北4.3mを測る。検出面から床面まで深さ30cm。主柱穴は図に線で結んだ4本からなり、楕円~隅丸方形プランで径30~50cm、深さ50~60cm。柱痕跡はない。北辺と南東隅の壁際には小溝が巡る。北~東壁では10~30cm内側で床面が一段下がるが、土層断面に切り合はれないと認められない。床面の北西隅には不整形な土坑を、南西隅にはベッド状造構を設けている。また、中央東側の床面上で不整形の浅い窪みを検出した。切り合はれからSC-6035より新しいが、当住居に伴う確認はない。東壁際には住居外から流れ込んだ状況で粘土塊が出土したが、焼けた痕跡はない。覆土は黒色粘質土で、SC-6035と重複する部分には厚さ5cmほどの貼床が認められる。炉跡、炭化物、焼土は確認できなかった。

SC-6034出土遺物 (Fig.119・120・193・195・196、PL.26)

弥生土器、古式土師器、石器（磨製石鑿・磨製石劍・砥石・石錐・黑曜石）、土製品がコンテナ3箱出土したほか、錯影れた鉄片1点がある。

19・20は弥生土器壺の底部で脚が付く。器面の残りが悪いが、外面縦刷毛目、内面ナデ調整か。20は二次加熱を受けたか。21は弥生土器壺の底部で、器面が剥落し、底部の孔は意図的かどうか不明。

22~26は古式土師器の甕である。22は器面剥落するが、胴外面に右上がり平行タタキ、内面ヘラ削りで粘土接合痕が残る。灰褐色で、粗大石英粒と細砂粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱を受ける。23は器面が一皮剥落し、本来の器厚ではない。粗大石英粒・細砂粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成不良。24は横ナデ調整か。淡橙褐色で、粗大石英粒混じりの細砂粒・暗赤色粒を多量に含み、焼成良好。25は外面横ナデ、内面調整不明。黄褐色で、径2mm以下の砂粒と暗赤色粒を多量に含み、焼成良好。26は底部を欠く。胴最大径は中位からやや上位にある。外面は刷毛目が僅かに残るが、内器面は完全剥落する。淡黄褐色を呈し、石英等径1~2mm砂粒と暗赤色粒を少量含み、焼成不良。

27は古式土師器二重口縁壺である。外面縦刷毛目、内面ヘラ削りか。淡橙褐色で、径6mmまでの砂粒・カクセン石を少量含む。焼成良好。28も古式土師器二重口縁壺で、外面縦刷毛目、内面横刷毛目か。橙~淡橙色で、粗砂・細砂粒・カクセン石を僅かに含み、焼成やや不良。29は古式土師器長頸壺の口縁部で、外面刷毛目で他は調整不明。橙~淡橙色で、胎土精良、焼成良好。

30~39は古式土師器の高杯である。30は口縁の大半を欠くが、他は残る。杯底は平坦で口縁との境に段がある。脚外面を面取し、裾の四方に外から透孔を穿つ。全体を刷毛目調整した後、脚内部を除いてヘラミガキし、杯内面に放射状の暗文を入れる。明橙色で、細砂と雲母微粒を少量含むが精良、

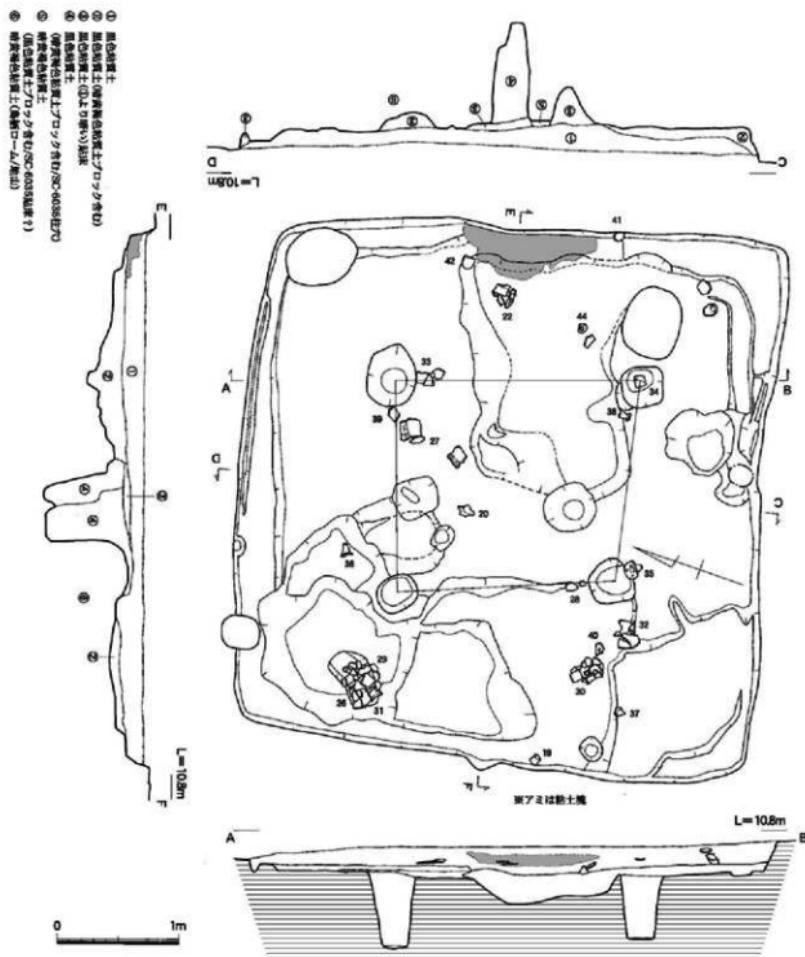


Fig.118 窓穴住居SC-6034実測図 (1/40)

焼成良好。31は坏の残欠。坏底は平坦で、屈曲部に段が残る。脚との接合部から剥落する。内外とも刷毛目の後へラミガキだが残りが悪い。淡黄褐色～黒色、胎土精良でカクセン石を含み、焼成良好。32は口縁の2/3を欠く。坏底は丸みを帯び、屈曲部の段は浅い。脚の透孔は外から四方に穿つが、正対しない。外面は剥落するが、脚には面取痕が残る。脚内はシボリ痕を工具で調整し、裾部は刷毛目調整。橙～淡橙色で、径4mmまでの石英粒・砂粒と雲母粒を少量含むが精良、焼成良好。33は口縁部1/2の残欠で、屈曲部に段がある。内外とも僅かに刷毛目があるが、残りが悪く図示できない。橙色で、

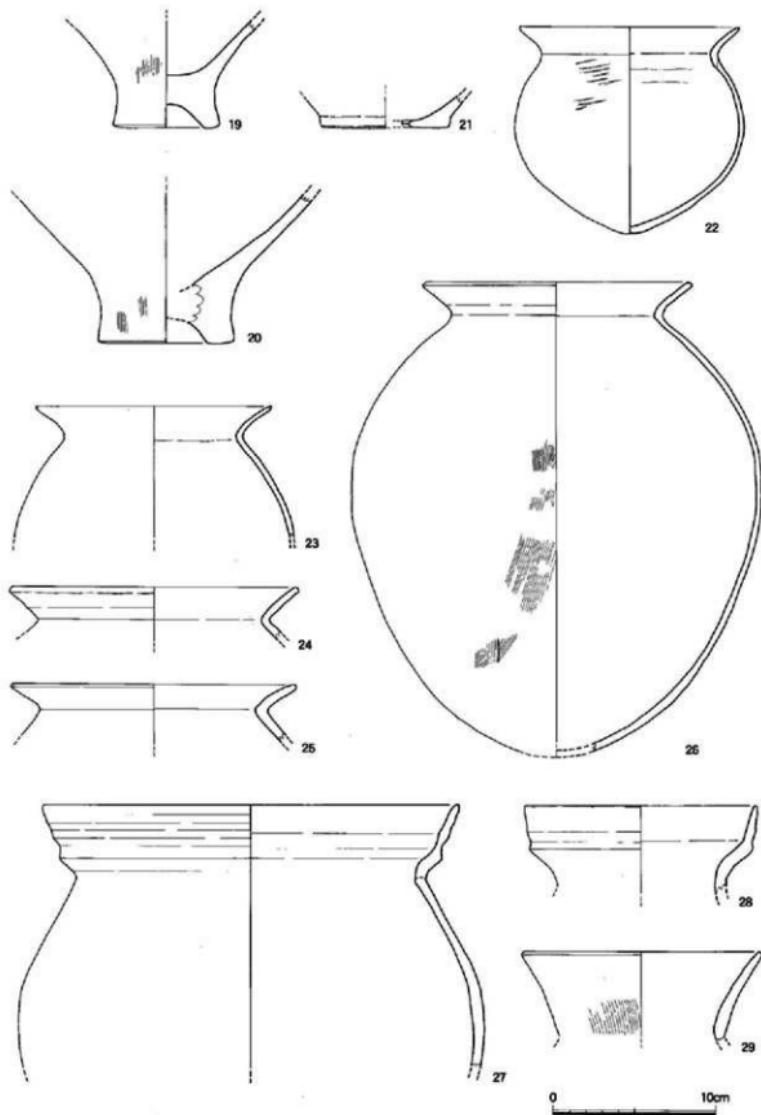


Fig.119 SC-6034出土遺物実測図 I (1/3)

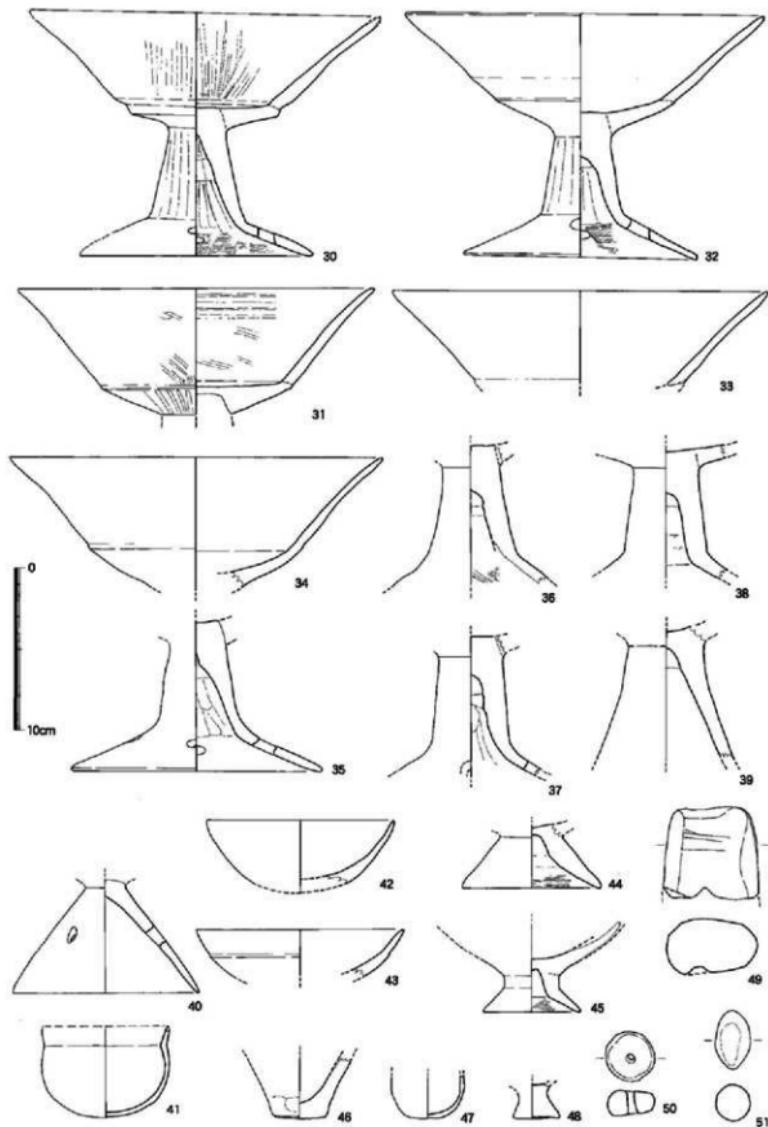


Fig.120 SC-6034出土遺物実測図 II (1/3)

粗大石英粒と細砂粒を少量含み、焼成良好。34は口縁部1/3の残欠で、接合しないが35の脚と同一個体である。坏底は丸く、段で口縁と区別する。摩滅が著しいが、内面は斜刷毛目後ミガキか。橙褐色で、細砂粒・雲母微粒を少量含み、焼成良好。35は脚部で完存する。摩滅して内面のヘラ整形以外は調整不明。透孔は外から四方に開けるが、正対しない。細砂粒・雲母微粒を少量含むが精良で、焼成良好。36は脚部で、内面に刷毛目を留めるが、他は調整不明。橙褐色で、細砂粒・カクセン石を多く含み、焼成不良。37も脚部で、内面を棒状の工具で調整するが、他は調整不明。透孔の一部が残る。淡橙色、細砂粒を少し含み胎土精良、焼成良好。38も脚部で、内面は工具による整形で他の調整痕は残らない。淡橙褐色、胎土精良で細砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好。39も脚部で接合部から剥落する。調整不明。橙灰～黒褐色、胎土に細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。

40は古式土師器小形器台の脚部である。三方に外から透孔を穿つ。著しく摩滅して調整不明。橙褐色で、細砂粒・雲母微粒を僅かに含み精良、焼成良好。41は古式土師器小形丸底壺。器面が一枚剥げ落ち本来の厚みではない。細砂粒を多量に含み、焼成良好。外面に黒斑がある。42は古式土師器鉢で、摩滅して調整不明。暗橙褐色、細砂粒・雲母微粒を少し含み精良、焼成良好。43は古式土師器脚付鉢の坏部で、SC-6032の11と同形か。外面の段で口縁を区別する。摩滅して調整不明。淡黄褐色、カクセン石・暗赤色粒を僅かに含み精良、焼成良好。44は脚付鉢の脚か。外面摩滅、内面ナデ及び刷毛目調整。橙褐～淡褐色、雲母粒と暗赤色粒を少量含み胎土精良、焼成良好。45は脚付鉢の脚部で、脚内面に刷毛目が残るが、他は調整不明。淡黄褐色、カクセン石と暗赤色粒を含み胎土精良、焼成良好。

46は底部片で器種不明。不安定な平底で、内外ナデ調整。外面黒色、内面暗褐色で、細砂粒を少量含み、焼成良好。47はミニチュア土器で、口縁を欠くが小形丸底壺を模したか。器表面は剥落する。胎土精良で雲母粒を僅かに含み、焼成良好。48はミニチュア土器の脚であろう。上面はヘラ削りで、他は摩滅。赤褐色で、径4mmの粗粒や細砂粒を少し含むが精良と言え、焼成良好。49は土製支脚か。下端は折れている。中実で、器表面は剥落するが、片面にヘラ先で付けた沈線が数本認められる。胎土は灰白色と橙褐色の土が混ざった綱状をなす。焼成良好。器表面に細かいひびが入っており被熱したとみられる。50は土製鋤車で、器表面は完全に剥落する。細砂粒を多く含み、焼成良好。51は土製投弾である。ナデ調整で、暗橙褐色をなし、胎土精良、焼成不良。

古墳時代前期の住居である。

整穴住居SC-6035 (Fig.121・122、PL.19)

F区南半部でSC-6034と重複し、これに切られている。平面形は円形で、径7.0～7.5m、検出面から床面まで20cm前後を測る。住居中央に土坑があり、この土坑を中心に環状に主柱穴が配置される。土坑と柱穴の一部には最大3～4回の切り合いが認められ、同じ場所で繰り返し建て直された住居と考えられる。中央土坑は梢円形プランで南北1.5m、東西1.4m、深さ40cm前後。覆土に炭化物・焼土等は認められない。柱穴は円～梢円形プランで、径30～50cm、深さ30～75cmを測り、いずれにも柱痕跡はない。住居覆土は黒色粘質土で、部分的に汚れた地山土で5cm厚ほどの貼床を施す。北～東半の壁際には部分的に壁溝が巡る。

SC-6035出土遺物 (Fig.123・193～195)

弥生土器、石器（石庖丁未製品・石鍊・磨製石斧・磨石・砥石・黒曜石）が少量出土し、須恵器1点が混入する。図示した遺物は全て弥生土器である。

52～56は甕の口縁部で断面三角形を呈する。いずれも小破片で図の傾きは不確実。52は調整不明。暗橙褐色、細砂粒多量・雲母粒少量含み、焼成良好。53は器面剥落するが、外面丹塗りか。淡橙褐色、

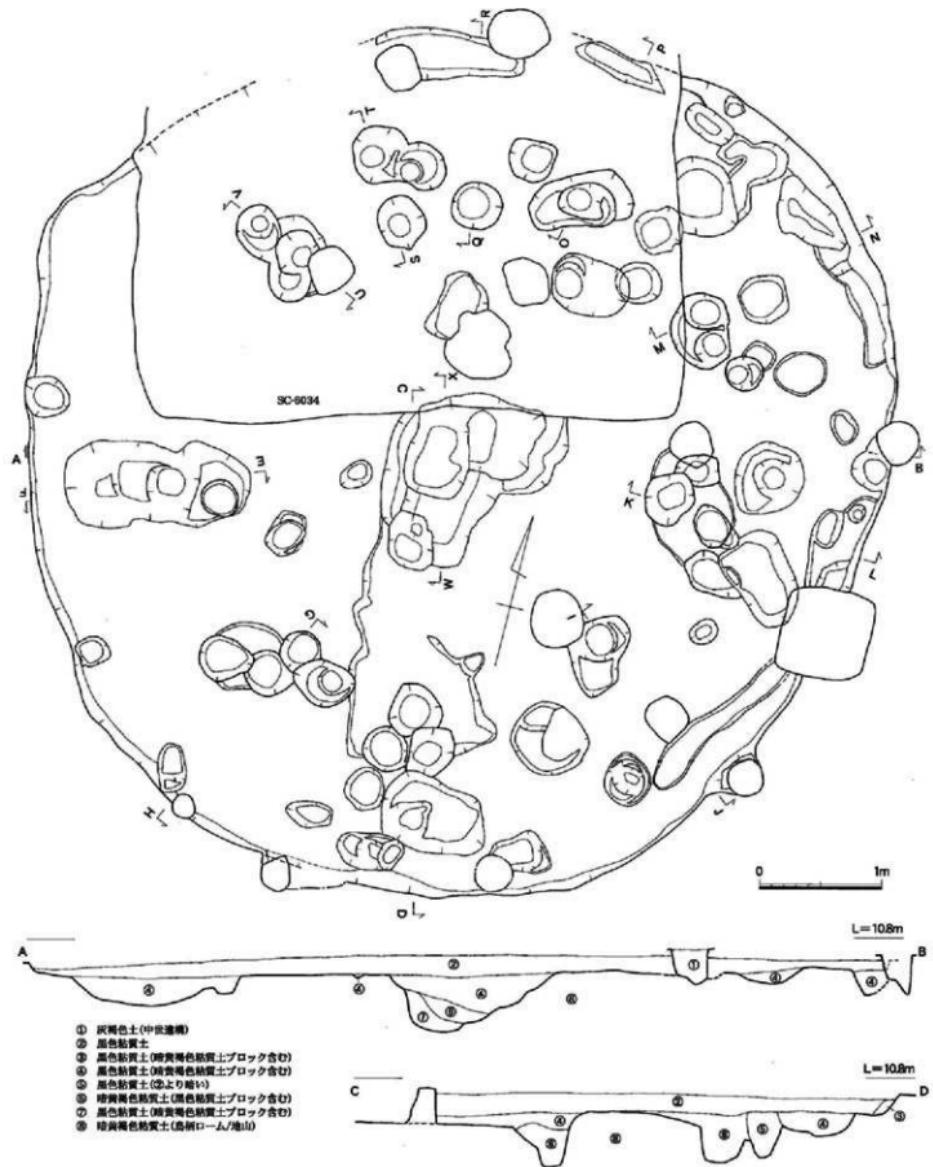


Fig.121 整穴住居SC-6035平面図と土層図 (1/40)

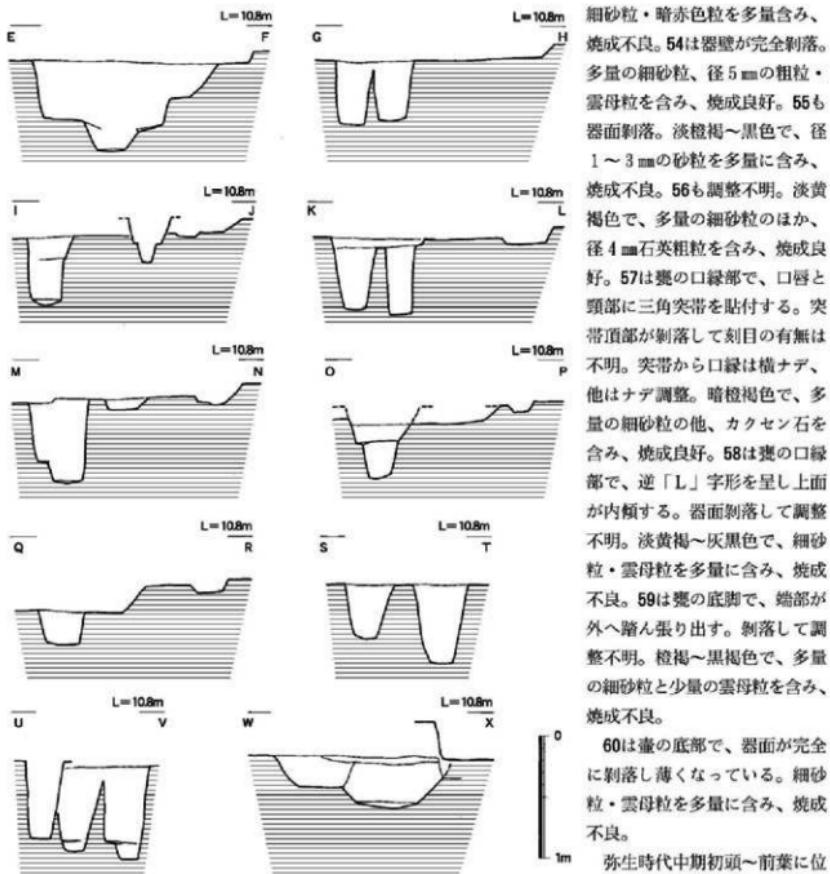


Fig. 122 壺穴住居SC-6035断面図(1/40)

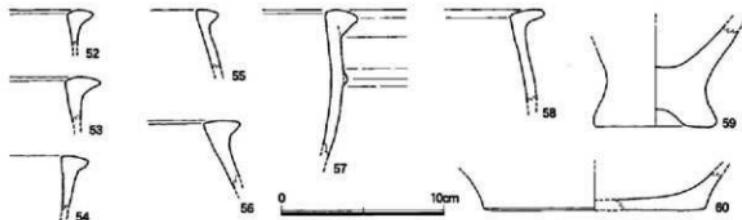


Fig. 123 SC-6035出土遺物実測図(1/3)

竪穴住居SC-6036 (Fig.124、PL.19)

F区南半部、SC-6033の北西に隣接する。北東隅は攢乱坑に切られる。方形プランで、5.7m×4.4m、深さ10cm。中央の長軸上に2つの主柱穴が並ぶ。西側のSP-6486は長径55cmの楕円形プランで、深さ27cmと浅く、高环の环部が投げ込まれていた。東側のSP-6652は長径40cmの楕円形プランで、深さ53cm。柱痕跡が認められ、柱の深さは35cmである。炉跡は明確でない。住居長辺の壁際の一部に壁溝が巡る。住居の覆土は黒色粘質土で、床面は地山削り出し。床面上から土器が多数出土した。

SC-6036出土遺物 (Fig.125・195、PL.26)

弥生土器、古式土師器、石器（砥石・黒曜石）がコンテナ2箱出土した。

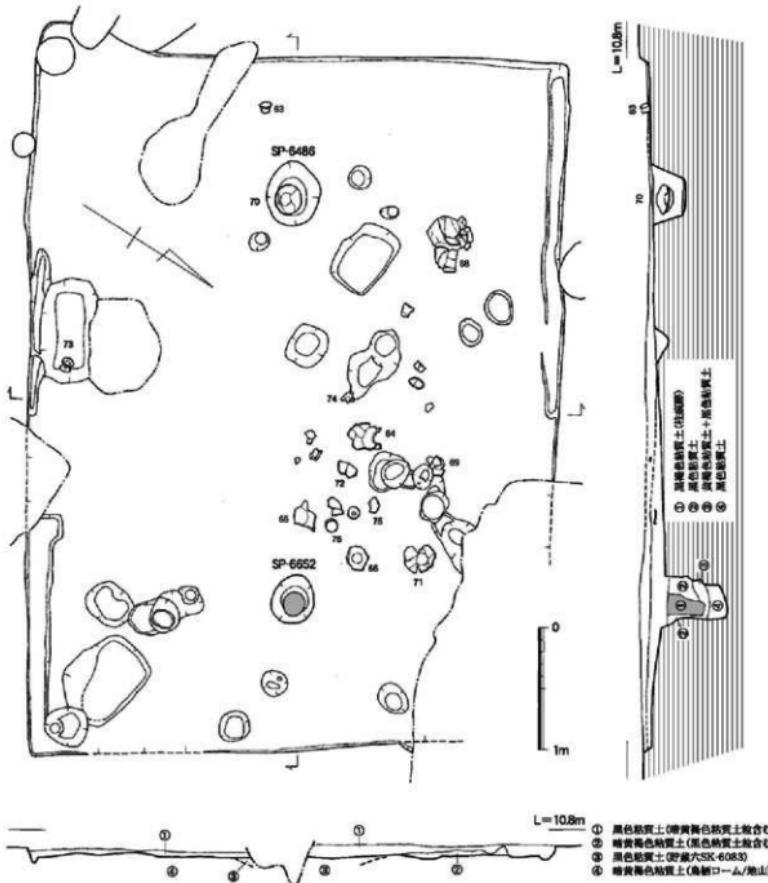


Fig.124 竪穴住居SC-6036実測図 (1/40)

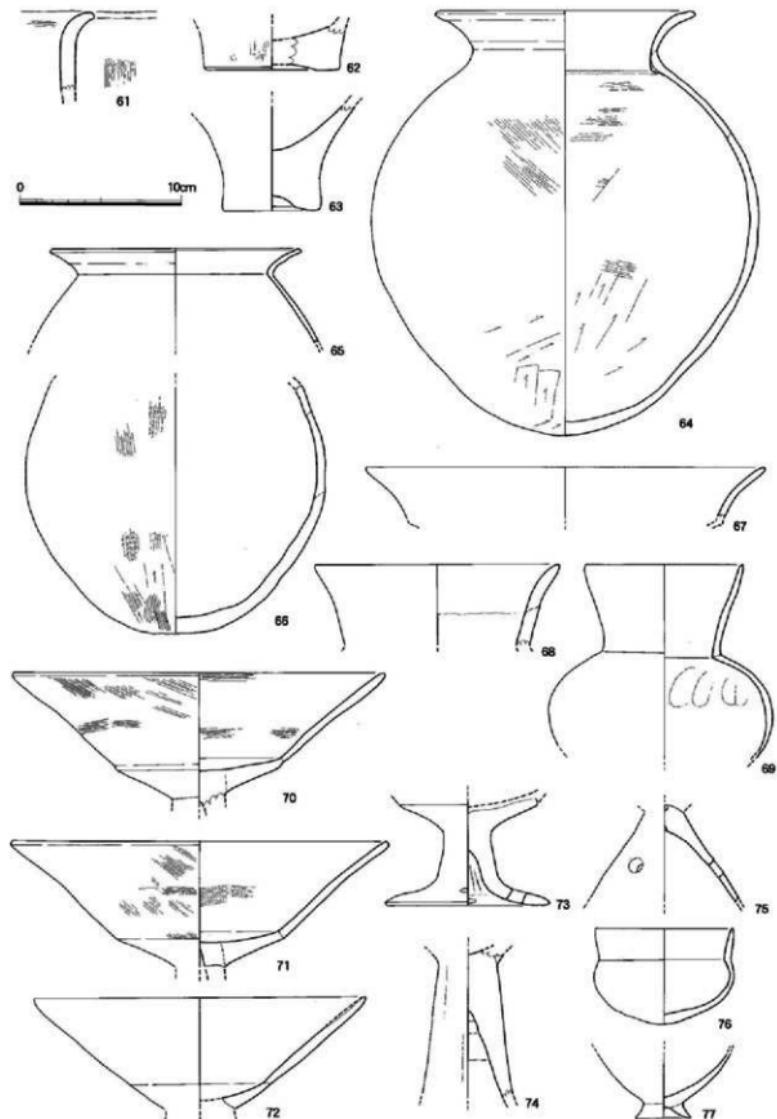


Fig.125 SC-6036出土遺物実測図 (1/3)

61は弥生土器で、如意形口縁の甕、62・63は弥生土器甕の底部である。

以下は全て古式土師器である。

64は甕で、底部は図上接合した。口縁が強く外反し、屈曲部内面を粘土で補強する。内外面とも底部ヘラ削り、その他は刷毛目調整。外面赤橙～淡黄褐色、内面暗橙色、細砂粒を少量含み、焼成不良。二次加熱を受ける。65は甕の上半で、器表面が一枚剥落し調整不明。細砂粒・暗赤色粒多量、雲母粒少量を含み、焼成良好。66は甕の下半で底部痕跡が残る。外底周辺をヘラ削りし、全体を刷毛目調整。内面剥落。淡灰白色、石英粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

67は二重口縁壺の口縁部か。器表面は残らない。多量の細砂粒と径3mmの石英粗粒を含み、焼成良好。68は壺の口縁部で、他に胴部片が多数あるが接合できない。器表面が摩滅し内面に粘土接合痕を留めるのみ。黒褐色、粗大石英粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。69は長頸壺で底部を欠く。摩滅が著しいが、内面に指押痕が残る。明橙褐色、雲母微粒と暗赤色粒を少量含み精良、焼成良好。

70～74は高環である。70は环部のみ完存し、屈曲部に段がある。外面は斜刷毛目で、中位に横刷毛目を1条回す。内面は横刷毛目後横ミガキ。橙～淡橙色、雲母粒を少量含み精良、一部焼成不良。口縁外面に黒斑がある。71も环部のみほぼ完存し、屈曲部の稜はある。外面は斜刷毛目で、中位に横刷毛目1条を回す。内面は横刷毛目だが残りが悪い。淡橙～淡橙褐色で、雲母粒を少量含み精良、焼成良好。口唇に黒斑がある。72は环部欠けで、脚との接合部から剥離する。屈曲部は不鮮明な稜となる。器表面は完全に剥落する。石英粗粒・雲母粒を含むが精良、焼成良好。口縁外面に黒斑がある。73は口縁を欠く。裾の四方に外面から透孔を入れる。脚内にシボリ痕を残し器表面剥落。橙褐色～赤橙色で、多量の細砂粒と少量の粗砂粒を含み、焼成不良。74は脚筒部の欠けで、内面は工具によるナデ調整だが、他は調整不明。橙褐色を呈し、胎土精良で細砂粒・暗赤色粒を少量含み、焼成良好。

75は小形器台の脚で、三方に透孔が開こう。摩滅して調整不明。橙褐色、細砂粒・雲母粒・暗赤色粒を少量含み精良、焼成良好。76は小形丸底壺で、口径と胴径が等しい。完存するが器表面は全て剥落する。粗大砂粒を少量含み精良、焼成良好。外底に黒斑がある。77は製壺土器で、器表面は一枚剥落する。細砂粒を多量、暗赤色粒・雲母微粒を僅かに含み、焼成良好。

古墳時代前期の住居である。

整穴住居SC-6038 (Fig.126)

F区南半部に検出した。調査区南壁際に位置する。隅丸方形住居のコーナー部と考えられ、主要部分は調査区南外にある。西側は中世溝SD-6031に切られる。東西3.0m、南北1.0mに壁の立ち上がりが伸びる。深さ20cmで、床面から5cm浮いてアミで図示した炭化材が出土し、焼失住居とみられる。

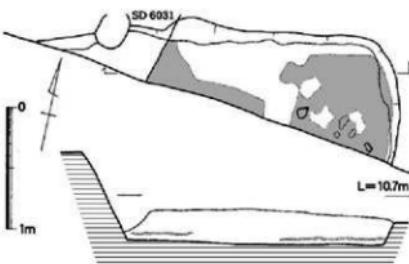


Fig.126 整穴住居SC-6038実測図 (1/40)

SC-6038出土遺物 (Fig.127)

弥生土器、古式土師器、黒曜石が少量出土。78は弥生土器甕の口縁部小片で、図の傾きは不確実。79は古式土師器長頸壺で、調整不

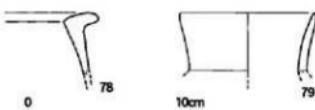


Fig.127 SC-6038出土遺物実測図 (1/3)

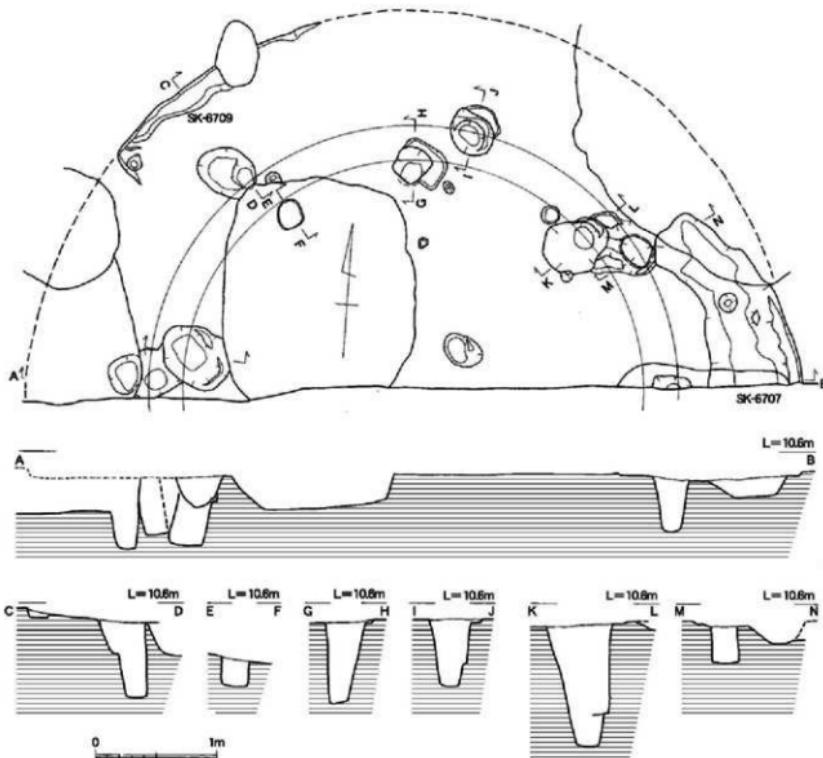


Fig.128 整穴住居SC-6707実測図 (1/40)

明。淡黄褐色、胎土精良で雲母粒を少量含み、焼成不良。

古墳時代前期の遺構であろう。

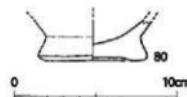
整穴住居SC-6707 (Fig.128, PL.18)

F区東に拡張した調査区に位置する。削平された円形住居と考えられる。南側は調査区外へ伸びる。壁溝とみられる東側のSK-6707と北西側のSK-6709から、径6.2mの円形プランと推定される。環状に並ぶ主柱穴が二組想定でき、建て替えを示すものと考えられよう。柱穴は円～楕円形プランで、径20～60cm、深さ35～100cmで、柱痕跡はない。各構造の覆土は黒色粘質土である。

SC-6707・6709出土遺物 (Fig.129)

弥生土器などの土器小片、黒曜石が少量出土した。80は弥生土器甕の底部片で、断面台形に下端が張り出す。器表面が剥落して調整不明。粗砂混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。

弥生時代前期の住居の可能性が高いが、出土遺物が少なく詳細は不明である。

Fig.129 SC-6707
出土遺物実測図 (1/3)

(2)溝状造構

弥生時代の溝をF区北半部で3条確認した。いずれも浅い小溝で、平面弧状にカーブして伸び、分岐するものもある。台地端部を区画する意図で設けた溝であろうか。

溝SD-6006 (Fig.130、PL.20)

F区北半部に検出した。平面形が弧状を呈する溝である。調査区を横断する形で伸びる南側溝と、これから分岐して北へ伸びる北側溝とからなる。

南側溝は、東端が擾乱坑を挟んで調査区外へと伸び、西端が地形の落ち際まで伸び削平消滅している。長さ10m分を確認した。溝幅は1m前後で、分岐する部分で幅広となりかつ深く25cmを測る。底面は西へ少し傾斜する。

北側溝の北端は擾乱坑を挟んで調査区外へと伸び、長さ17m分を確認した。幅0.5~0.8m、深さ10cm程度で、底面は南へ若干傾斜する。

SD-6006出土遺物 (Fig.131)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

81は甌の口縁部で、断面三角形を呈する。器表面は全て剥落しており調整不明である。胎土に多量の細砂粒、少量の粗大石英粒・雲母粒を含み、焼成良好である。82は甌の口縁部で、逆「L」字形をなすが、小片のため図の傾きは不確実である。器表面が剥落するが、口唇に刻目が付こう。淡黄褐色で、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良。83は甌の底部で、外底が少し窪む。器表面は一枚剥げ落ちており、調整不明である。径2mm前後

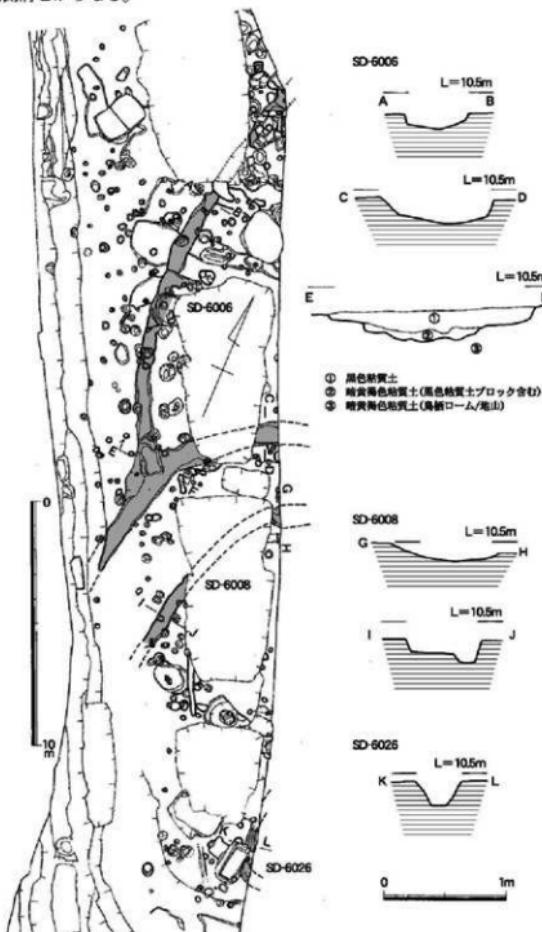


Fig.130 溝SD-6006・6008・6026実測図（平面は1/200、他は1/40）

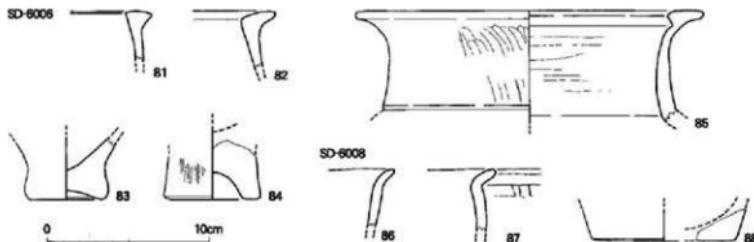


Fig.131 SD-6006・6008出土遺物実測図 (1/3)

の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。84は甌の底脚で、下端はあまり外へ張り出さない。外面縦刷毛目調整。橙色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。

85は壺で、口縁端部が鋸先形をなして短く伸びる。内外面とも刷毛目、ミガキ、口縁横ナデの順に調整を加える。外面暗橙褐～暗褐色、内面黒～黒褐色を呈する。胎土に細砂粒を多量、雲母粒・暗赤色粒を少量含み、焼成不良。城ノ越式段階の壺であろう。

弥生時代中期初頭に位置付けられよう。

溝SD-6008 (Fig.130、PL.20)

F区北半部に検出した。SD-6006の南側溝と約3mの間隔を置いて、これと平行するように伸びている。東側は櫛乱坑を挟んで調査区外へと伸び、西側は地形が下がって削平消滅している。長さ8mを確認し、最大幅60cm、深さ15cm前後で浅い。

SD-6008出土遺物 (Fig.131・195)

弥生土器、中世土師器碗1点、石器（砥石・黒曜石）が少量出土した。

以下は全て弥生土器である。86は甌の口縁部で、如意形をなす。器表面が一枚剥落し、調整不明、口唇刻目の有無も不明。径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。87も甌の口縁部で、やや強く外反する。口唇は剥落。外面縦刷毛目後横ナデか。内面ナデか。橙褐～黒褐色、細砂粒と雲母粒を少量含み、焼成不良。88は甌の底部小片で平底。外面ナデ調整。黒褐～淡黄褐色で、胎土に径1～2mmの砂粒を多く含むほか雲母粒が混じる。焼成良好。

中世土師器が混入するが弥生時代の遺構で、SD-6006と同時期と考えられる。

溝SD-6026 (Fig.130)

F区北半部の南寄りに検出した。調査区東壁際に位置し、木棺墓SK-6015と重複し、覆土が酷似するため切り合いで明確でないが、おそらく後出遺構であろう。東に向かって湾曲しており、長さ2.2m、最大幅40cm、深さ20cm。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器、土師器坏（底部へラ切り？）が少量出土したが、図示できるものはない。中世の土師器坏が1点混入しているが、弥生時代の遺構と考えられる。

(3)木棺墓

木棺墓3基、土塙墓2基、甌棺墓9基から構成される弥生墓群は、F区の中央部に集中して営まれ

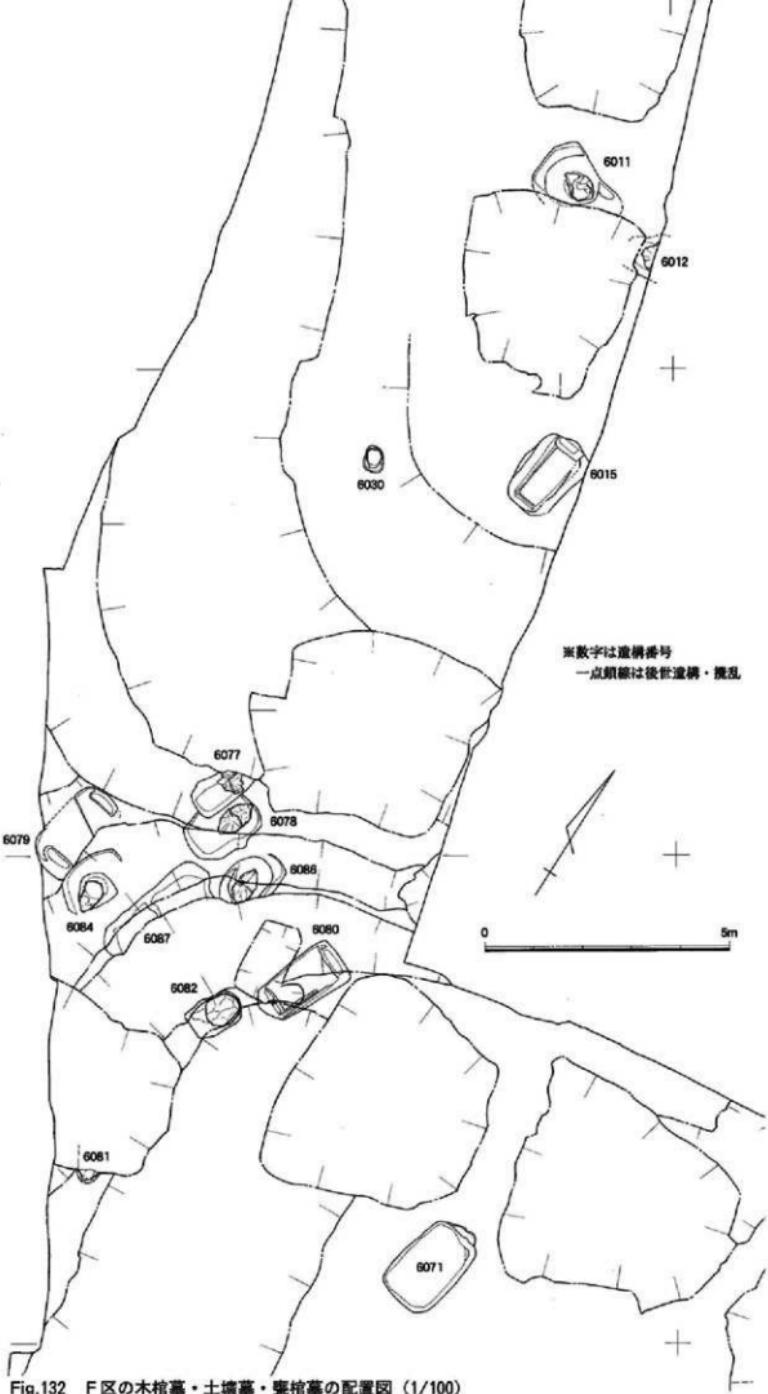


Fig.132 F区の木棺墓・土壙墓・石棺墓の配置図 (1/100)

ている (Fig.132)。ここは段丘が西側低位面へ落ち込む縁辺部にあたり、北端の壇棺墓SK-6011から南端の壇棺墓SK-6081まで台地縁に沿って帯状に分布したと考えられる。いくつかのグループをなすようだが、調査区が細長く、かつ中世溝や攢乱坑に破壊されており、群としては分け難い。

木棺墓SK-6015 (Fig.133、PL.20)

F区北半部に検出した組み合わせ式木棺墓である。東壁際に位置し、溝SD-6026と重なる。主軸方位は磁北から6°東偏する。掘り方は隅丸長方形プランで、長1.8m、幅1.1m、底面まで40cmを測る。東壁を除く三方に側板の掘り込みがあり、北側小口の掘り込みが最も大きく、深さ30cmである。南小口は深さ15cmとやや浅く、西壁は深さ5~13cmで北が深くなる。棺の内法は長さ1.3m、幅60cm弱と推定されるが、棺材の組み方は不明である。埋土から土器片が出土したが、副葬遺物はない。

SK-6015出土遺物 (Fig.134)

埋土から弥生土器、石器（磁石・黒曜石）がコンテナ1/3箱出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

89は如意形口縁の壺で、口唇にヘラで刻目を入れるが残りが悪い。頸がくびれて、胴には張りがある。内外面ナデ、口縁横ナデ調整。黒褐色～淡橙褐色を呈し、細砂粒を多量、雲母微粒を少量含み、焼成不良。90も如意形口縁の壺で、小片のため図の傾きは不確実で

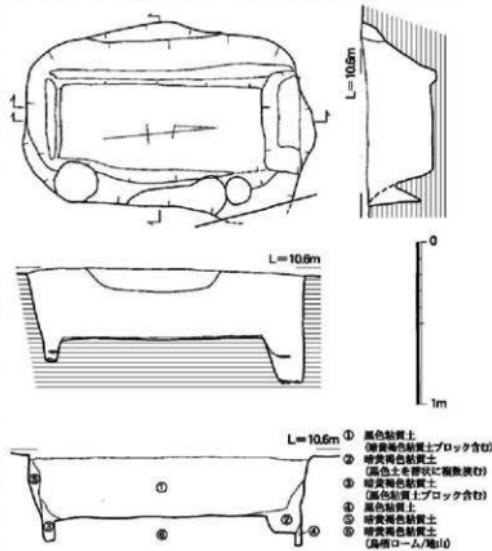


Fig.133 木棺墓SK-6015実測図 (1/30)

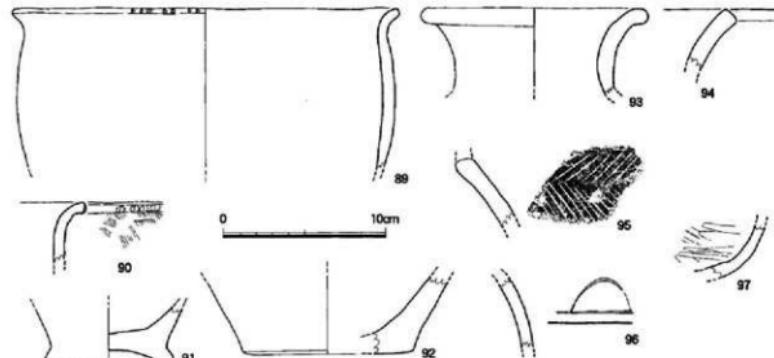


Fig.134 SK-6015出土遺物実測図 (1/3)

ある。口唇下半にヘラで刻目を施す。外面横ナデ、内面ナデ調整。暗橙褐～橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。91は甌の底部で、下端部が外へ張り出す。器表面は剥落する。細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。92も甌の底部片で、内面ナデ、外面調整不明。淡黄褐～淡明橙色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好。

93は甌の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実である。口縁は外反して端部が肥厚する。器面剥落するが、外面ナデ調整か。橙～淡橙色、石英・雲母など径1～2mmの砂粒を多く含み、焼成不良。94は甌又は鉢か。口縁部小片のため図の傾きは不確実。外面ナデか。灰褐色で、多量の細砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。95は甌の肩部小片で、外面に無軸羽状文を施し、上端に横沈線を入れる。下端に逆方向の斜沈線が見えており、下方に更に文様が続くとみられる。内面ナデ調整。灰褐色で、細砂粒・雲母粒を多く含み、焼成やや不良。96も甌の肩部小片で、外面に沈線と弧状文を施すが残りが悪い。調整も不明。淡黄褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好。97は小片だが小甌か。胴部小片のため、図の傾きは不確実である。外面を難にナデ、内面を工具により難に調整する。黒褐～黄褐色で、多量の細砂粒のほか雲母粒を含み、焼成良好。

SD-6026の遺物が混入している可能性がある。弥生時代前期後葉の木棺墓とみられる。

木棺墓SK-6079 (Fig.135, PL.20)

F区南半部の北端近くで検出した組み合せ式木棺墓で、中世溝SD-6010・6054等に切られて残りが悪い。まず小口の掘り込みを検出し、その後、調査区壁際を精査して掘り方の一部を確認した。南半の底面は少し下げ過ぎた。現状で長2.0m、幅1.0m以上を測り、南壁の立ち上がりは30cmを残す。小口部分の深さは20cmほどで、平面形が三日月形に湾曲しており、継割りした丸太材などを小口板に用いたのであろうか。棺の内法は長1.3mほどとなろう。主軸方位は磁北から8°東偏と計測される。

SK-6079出土遺物 (Fig.136)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は弥生土器である。

98・99はいずれも小片だが、甌の口縁部であろう。強く外反して開く。小片のため図の傾きは不確実。器表面が剥落し、調整・色調は不明である。胎土に雲母混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良である。100は甌の底部片で、平底である。内面ナデ調整で、外面は器表面が剥落し調整不明。黒褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良である。二次加熱を受けている。

図示していないが、他に頸部に断面三角形突帯を貼付した弥生土器甌がある。

弥生時代前期の遺構であるが、詳細時期は不明である。

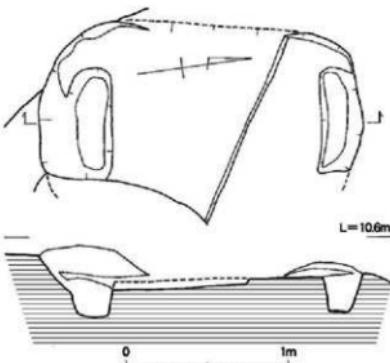


Fig.135 木棺墓SK-6079実測図 (1/30)

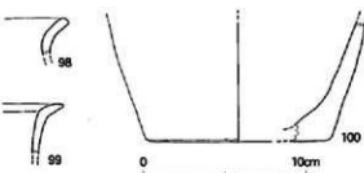


Fig.136 SK-6079出土遺物実測図 (1/3)

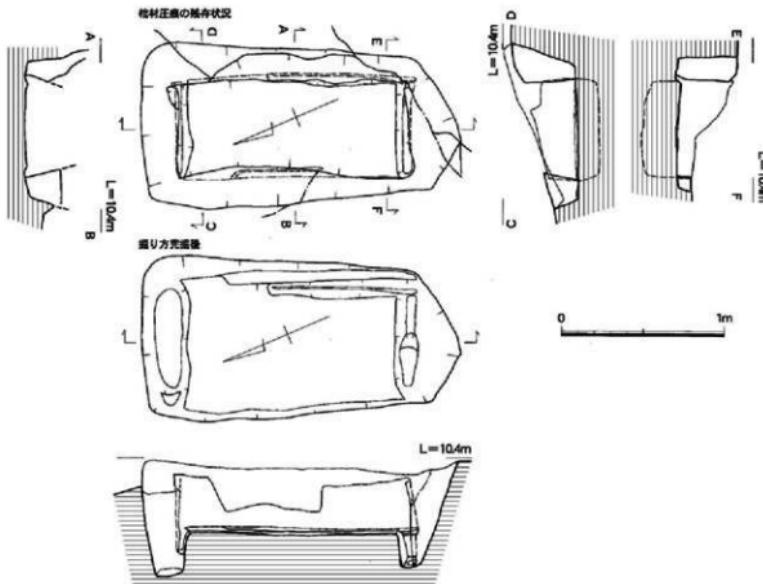


Fig.137 木棺墓SK-6080実測図 (1/30)

木棺墓SK-6080 (Fig.137, PL.20)

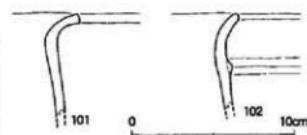
F区南半部の北端近くに位置する組み合わせ式木棺墓である。中世溝SD-6055・6040に切られるが、造構自体が深いため比較的の残りは良い。掘り方は南北に長い隅丸長方形プランで、長1.95m、幅1.0m、残りの良いところで検出面から底面まで40cmを測る。底面の四方に側板を立てた掘り込みがある。小口の掘り込みが大きく深く、北小口は深さ28cm、南小口は深さ20cm。東西の掘り込みは部分的に浅いが、小口の横まで伸びることから、側板で小口板を挟み込む形式であろう。四壁に棺材の痕跡が残り、いずれも土圧で内側に大きく倒れ込んでいた。棺材は全て腐食消失する。棺の内法は長1.3m、幅60cm弱と推定される。主軸は磁北から23°東偏する。副葬遺物は出土していない。

SK-6080出土遺物 (Fig.138)

弥生土器、石器（石庵丁・黒曜石）が少量ある。図示した遺物は全て弥生土器である。

101は壺の口縁部で、強く外反して開く。口唇に刻目が付く可能性があるが、器壁が一枚剥げ落ちており不明確である。胎土に石英・雲母などの細砂粒を多量に含み、焼成良好。102も壺の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実である。口縁は外反して開き、頸部に断面三角形突帯を貼付する。器表面が完全に剥落する。胎土に石英粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成は極めて不良である。

弥生時代前期後葉の木棺墓と考えられよう。



(4) 土壙墓

土壙墓SK-6071 (Fig.139、PL.21)

F区南半部の北寄りに、弥生墓群からやや離れて位置する。土坑に一部を切られる。南北に長い隅丸長方形プランで、長2.0m、幅1.25m、深さ40cmである。底面は平坦で、若干の凹凸がある。主軸方位は磁北から14°東偏する。主軸方位が木棺墓に近似しており、整った形状から土壙墓と考えたが、その確証はない。

SK-6071出土遺物 (Fig.140)

弥生土器、石器（砥石・黒曜石）が少量出土した。図示した2点は弥生土器である。

103は甌の口縁部で、約1/2周が残る。如意形口縁で、口唇下端に浅く刻目を入れるが残りが悪い。器面が一枚剥落しており、本来の厚さではない。口縁直下に僅かに器表面を残しており、横ナデ調整で黒褐色であったこと知られる。径3mmまでの粗砂・細砂粒を多量に含み、焼成不良。104は甌の底部片で、器面剥落するが外面ナデ調整であろう。淡橙色を呈し、雲母など径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良である。

弥生時代前期後葉の遺構であろう。

土壙墓SK-6087 (Fig.139)

F区南半部の北端近くに位置する。中世溝SD-6054・6055に抉まれた部分にかろうじて一部が残っていた。東半部が全く失われているが、南北に長い隅丸長方形プランか。現状で長2.6m、幅1.0m以上、深さは20cmを残す。底面は平坦で、北半が一段低い。主軸方位は磁北から20°前後東偏し、他の弥生墓に近似する。弥生墓群が集中する部分に検出したため土壙墓として報告したが、確証はない。

弥生土器、黒曜石が少量出土したが、図化できるものはない。弥生時代の遺構である。

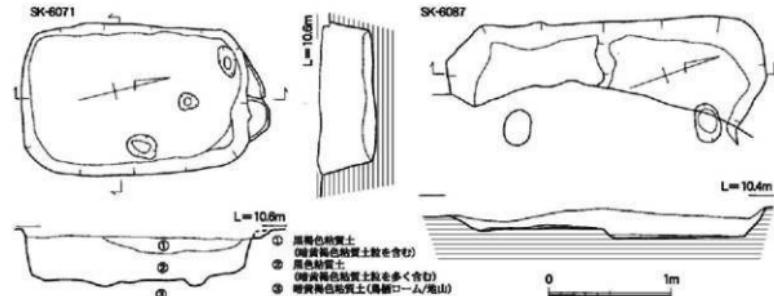


Fig.139 土壙墓SK-6071・6087実測図 (1/40)

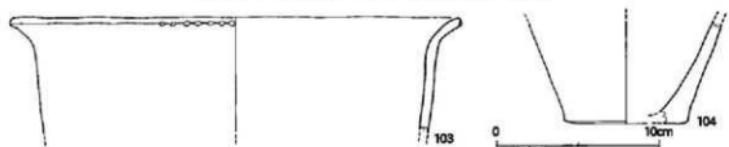


Fig.140 SK-6071出土遺物実測図 (1/3)

(5) 壺棺墓

壺棺墓は9基を検出した。成人棺4基、小児棺5基である。この他、壺棺墓群を破壊する中世溝SD-6010などから5個体以上の壺棺片が出土しており、後世に失われた壺棺墓が多いものと考えられる。これらはいずれも弥生時代前期末～中期前葉の短期に造営されたと考えられる。

壺棺墓SK-6011 (Fig.141, PL.21)

F区北半部で検出した。SC-6016の北西に位置する小児棺である。壺坑に挟まれた部分にかろうじて残っていたが、強い削平を受けている。墓壙は楕円形プランとみられ、東西長1.8mを測る。東へ向かって斜坑を掘り下げており、西壁は段状に立ち上がる。検出面から底面まで55cmを測り、棺は底面に接する。上下棺とも壺の口縁を打ち欠いて用いた合わせ口で、接合部に粘土被覆は認められない。主軸方位は磁北から80°西偏し、21°の傾斜で埋置されている。

SK-6011出土遺物 (Fig.142, PL.26)

壺棺のほか、埋土から土器小片が少量出土した。105は上壺で、壺の頸部以上を打ち欠く。胴のやや上位に断面三角形の小さな突帯を1条貼付する。器面の残りが悪いが、外面ヘラ研磨、内面ナデ調整で内底に指押さえ痕が残る。外面暗橙褐色、内面暗褐色を呈し、胎土に石英粗粒・雲母粒を少量、細砂粒を多量に含み、焼成不良である。外面下半から底部に黒斑がある。胴最大径33.9cm、器高25.0cm。106は下壺で、上壺より大振りの壺を打ち欠いて用いる。胴に2条の三角突帯を貼付する。器表面が荒れているが、外面ヘラ研磨、内面ナデ調整であろう。淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を少量含み、焼成不良。底部に黒斑がある。胴最大径51.5cm、器高45.7cm。

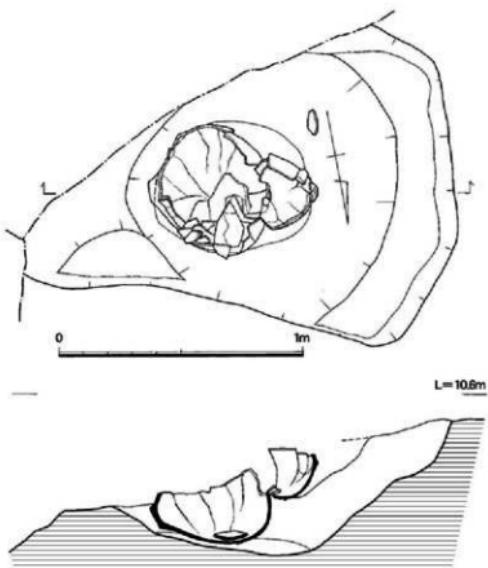


Fig.141 壺棺墓SK-6011実測図 (1/20)

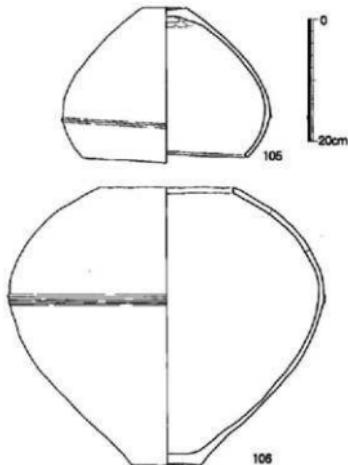


Fig.142 SK-6011出土遺物実測図 (1/8)

甕棺墓SK-6012 (Fig.143, PL.21)

F区北半部、SK-6011の東に位置する成人棺である。擾乱坑と調査区壁の間に一部を確認したが、主要部分は調査区外にある。墓壇の南北幅は0.9mである。東に開口しており、甕棺本体は長さ70cmが残るが、うち50cmは調査区壁に食い込んでいる。底部は擾乱に切り取られている。調査時には下甕のみを確認したが、出土遺物には上甕の口縁が含まれており、合わせ口甕棺と考えられる。主軸方位は磁北から90°ほど東を向こう。

SK-6012出土遺物 (Fig.144)

図示した甕棺のほかに、弥生土器が埋土から少量出土した。

107は上甕であろう。口縁部のみの破片で、下甕内に落ち込んだ状態で出土している。口縁は逆「L」字形をなし上面が内傾する。口唇を面取して少し壅ませ、上下端にヘラで刻目を施す。口縁の内側をナデて凹線状に窪ませ、内端を少し突出させている。外面は器面剥落して調整不明。内面はナデ調整で、口縁横ナデ調整である。暗橙褐～灰褐色を呈し、胎土に多量の細砂粒のほか、径3mmまでの粗砂と雲母粒を含み、焼成不良である。口径57cm。108は下甕で、底部はない。口縁は逆「L」字形で上面内傾する。内端を突出させ、口唇を面取して平坦につくり、全面にヘラ刻目を施す。胴外面は縱刷毛目後ナデ、内面ナデ、口縁横ナデ調整である。胴部の中位に横沈線2条を巡らせ、沈線と口縁との間を縦に四分画するように2条の垂線を入れる。横沈線は一部三重となるが、下端の1条は斜行し途切れおり浅い。灰褐～淡橙褐色を呈し、胎土には細砂粒が極めて多いほか、雲母粒を含む。焼成不良で胴外面に黒斑がある。口径60cm。

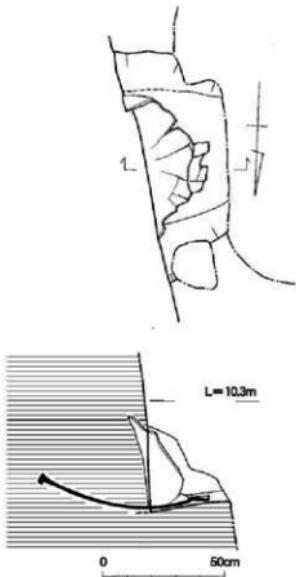


Fig.143 甕棺墓SK-6012実測図 (1/20)

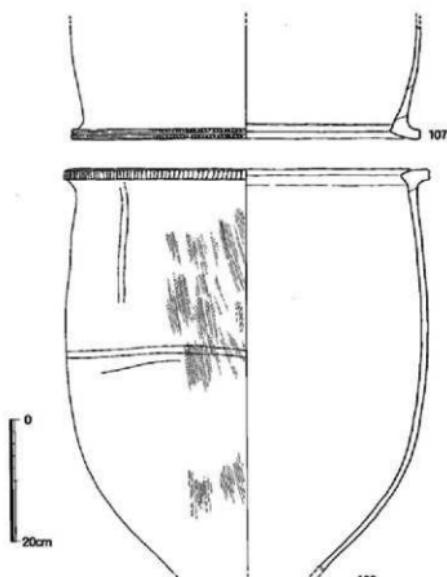


Fig.144 SK-6012出土遺物実測図 (1/8)

甕棺墓SK-6030 (Fig.145)

F区北半部、SK-6011・6012から南にやや離れて位置する。強い削平を受け、底部のみが残る。墓壙は現状で南北に長い楕円形プランで、長0.55m、幅0.4m。南へ向かって斜めに掘り込まれており、検出面から底面まで12cmを測る。甕棺は墓壙底面にほぼ接地する。主軸方位は磁北から15°ほど西偏する。

甕棺の底部のみが出土したが、残りが悪く図化できない。色調と厚みから、中期初頭の甕棺とみられる。

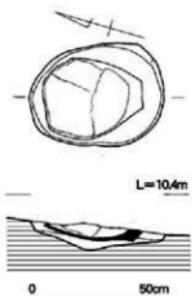


Fig.145 甕棺墓SK-6030 実測図 (1/20)

甕棺墓SK-6077 (Fig.146, PL.21)

F区南部で検出した。中世溝SD-6010の肩に位置し、これに大きく破壊されている。小児甕棺であろう。墓壙は北側が損なわれているが、南北に長い隅丸長方形プランとみられ、長1.3m以上、幅0.75m、深さ20cmを測る。底面は平坦で、北側に寄せて甕棺を据えているが、底面からやや浮いている。甕2個体と鉢1個体を用いた三連棺と考えられるが、攪乱と削平によりかなり荒らされている。主軸方位は磁北から20°前後東偏する。出土状況及び法量から110が上甕、111が下甕とみられ、109は上下棺の接合部を覆うために用いられたと考えられる鉢で、底部は打ち抜いたのであろう。

SK-6077出土遺物 (Fig.147, PL.27)

図示した弥生土器が出土遺物の全てである。

109は鉢で、底部はない。口縁は断面三角形をなし、端部を面取して密にヘラで刻目を入れる。頭部に断面三角形の突帯1条を貼付する。内外面ナデ調整で、口縁と突帯は横ナデ調整する。外面橙褐色～黒色、内面黒褐色～淡褐色を呈し、胎土に径2～3mmまでの砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良である。口径59.0cm、110は上甕であろう。底部はない。口縁は逆「L」

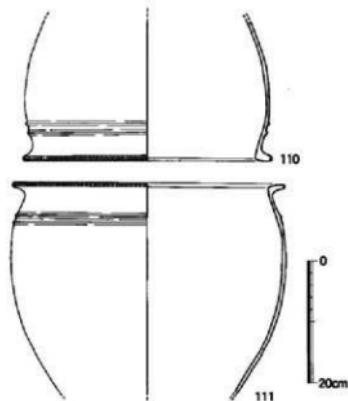
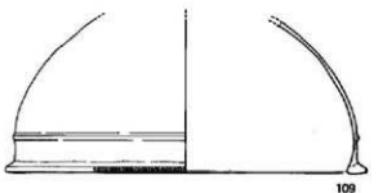


Fig.146 甕棺墓SK-6077実測図 (1/20)

Fig.147 SK-6077出土遺物実測図 (1/8)

字形に短く伸びて上面が内傾し、端部を面取してヘラで密に刻目を施している。胴は口径を上回らない程度に膨らみ、頸部に2条の断面三角形突帯を貼付する。器表面が剥落しており調整は不明である。橙褐色で、胎土に径2~3mm以下の砂粒を多量に、雲母・カクセン石を稀に含み、焼成良好。口径40.8cm。111は下甕であろう。110に比べて一回り大きく、胴の張り出しが口径をやや上回るが、口縁の形状や刻目、頸部突帯、色調・胎土・焼成等の所見は110と同じである。口径44.6cm。

甕棺墓SK-6078 (Fig.148、PL.21)

F区南半部に検出した小堀棺である。SK-6077の東に隣接し、これに切られている。墓壇は南半を中世溝に切られるが、平面形は南北に長い隅丸長方形で、長1.6m、幅1.1m。底面の北半部に梢円形の溝を掘り、棺を据えている。検出面から墓壇底面まで30cmを測り、甕棺は底面に接地する。上下とも甕を用いた合わせ口で、濁黄白色粘土で接合部を覆って封をしている。下甕は上甕よりひと回り大きく、上甕は削平により1/2弱が失われている。主軸方位は磁北から18°東偏し、14°の傾斜で埋置されている。

SK-6078出土遺物 (Fig.149、PL.27)

甕棺の他に弥生土器、黒曜石が少量出土した。

112は上甕の口縁と底部で、他に接合しない胴部片がある。口縁は逆「L」字形をなし、頸部に三角突帯2条を貼付する。底部は脚状をなし、少し開く。器面剥落のため、内底ナデ以外は調整不明。淡橙褐~淡黄褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好。内底に炭化物が付着し、外底は赤変するようであり、日常土器を転用したのである。口径32.0cm。113は下甕で、完存する。逆「L」字形の口縁に向かって頸部が肥厚する。口唇にヘラで刻目を入れるが残りが悪い。胴が張り出し、頸部に三角突

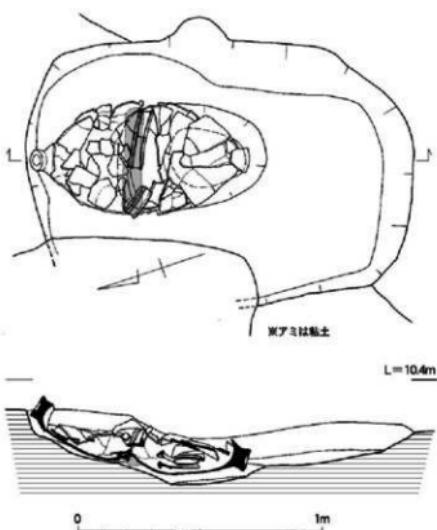


Fig.148 甕棺墓SK-6078実測図 (1/20)

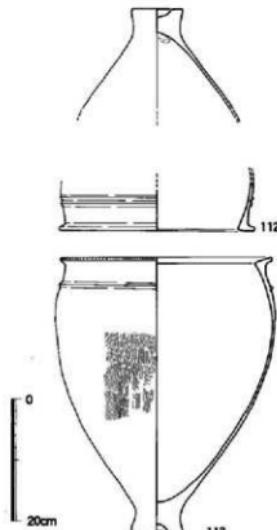


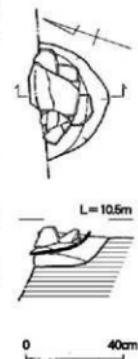
Fig.149 SK-6078出土遺物実測図 (1/8)

帶1条を貼り付ける。底脚は外に少し踏ん張る。外面に縦刷毛目し、口縁と突帯は横ナデ。内面は摩滅するがナデ調整か。黒褐～灰褐色で、径4mmまでの粗砂が混じる細砂粒を多量に含み、焼成不良。口径34.5cm、器高45.7cm。

壺棺墓SK-6081 (Fig.150、PL.22)

F区で検出した壺棺墓群中、最も南に位置する。攪乱坑に大きく破壊されており、一部がかろうじて残った成人棺である。墓壙は現状で梢円形プランをなし、径0.5mを測る。深さ10cm。南に開口すると考えられ、主軸方位は磁北から20°程度西偏しよう。

壺棺は洞部片のみの残欠で、実測不可能である。厚い器壁の特徴から中期初頭前後の壺棺と考えられる。



壺棺墓SK-6082 (Fig.151、PL.22)

F区南部半部に検出した成人棺である。壺棺墓SK-6081の北側4mに位置する。東西を中世溝に挟まれており、かろうじて破壊を免れているが、上部は著しく削平されている。墓壙は不整な梢円形プランを呈し、長1.1m、幅0.7mを測る。北へ向かって斜傾を掘り下げており、深さ30cmである。壺棺は墓壙底面に接地する。主軸方位は磁北から30°東偏し、埋置角度は44°と急傾斜である。

SK-6082出土遺物 (Fig.152、PL.27)

壺棺のほか、弥生土器、黒曜石が少量出土している。

114は壺で、口縁部はない。頸部と洞中位に3条の横沈線を巡らせ、その間を3条の縦沈線でつないでいる。縦沈線により頸部が8分画される。器表面の残りは良くないが、内外面ナデ調整とみられ、内底には指頭とヘラで押された痕跡が残る。淡灰黄～淡黄褐色をなし、胎土に石英・雲母などの径4mmまでの砂粒を多量に含み、焼成不良である。

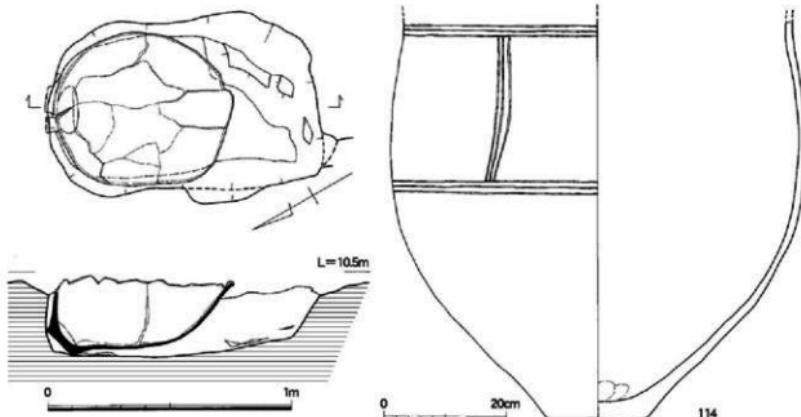


Fig.151 壺棺墓SK-6082実測図 (1/20)

Fig.152 SK-6082出土遺物実測図 (1/8)

甕棺墓SK-6084 (Fig.153、PL.22)

F区南半部に検出した小児棺である。甕棺墓SK-6082の約3m西側に位置する。中世溝SD-6054に東半を大きく破壊されるが、墓壙は不整な楕円形プランとみられ、南北長1.55m、東西幅1.1m以上である。最も残りの良い南西壁の高さは40cmを測る。墓壙底面のやや南寄りに径0.8m×0.75m、深さ10cmの不整楕円形の浅い掘り込みを設けて棺を据えており、底面はほぼ接地する。棺は上蓋が口縁を打ち欠いた壺、下蓋は小形の甕で、合わせ口である。接合部に粘土による覆い等は認められなかった。上下とも削平により1/2弱が失われている。主軸方位はほぼ磁北を向いており、7°の倒置で埋納されている。

SK-6084出土遺物 (Fig.154、PL.27)

図示した甕棺のほか、弥生土器、黒曜石が少量出土した。

115は上蓋で、壺の頸部以上を打ち欠いて転用している。外器面は横のヘラ研磨で、底部は縦に研磨を施す。内面は丁寧なナデ調整である。暗橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好である。内外底に黒斑がある。胴部最大径42.5cm。116は下蓋で、完存する。口縁は断面三角形を呈するが短く、上面が内傾する。胴部が大きく張り出して口径を上回り、頸部には三角突帯を1条貼付する。底部は脚状をなすが、下端はさほど広がらない。器表面が荒れているが、外面の一部に綴刷毛目が痕跡的に残り、上からナデ調整を加えている。内面はナデ調整か。外面暗褐色、内面は淡橙褐色で下半は黒色を呈する。胎土に径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良である。口径32.5cm、器高38.2cmを測る。

甕棺墓SK-6086 (Fig.155、PL.22)

F区南半部に検出した小児棺である。中世溝SD-6054・6055に挟まれて残りが悪い。墓壙プランは楕円形とみられる。南北1.4m以上、東西1.0m以上を測り、壁は30cmを残す。底面の南へ寄せて1.2m以上×0.85m、深さ10cmの楕円形プランの窪みを掘り、この底面に接地して棺を据えている。棺は上下ともに小形の甕を用いた合わせ口棺で、接合部を濁黄白色の粘土で被覆していた。主軸方位は磁北から2°東偏し、6°の傾斜で倒置埋納されている。

SK-6086出土遺物 (Fig.156、PL.27)

図示した甕棺のほか、弥生土器、黒曜石が少量出土している。

117は上蓋で、完存する。器形が歪み、口縁が径28~33cmの楕円形をなす。口縁は逆「L」字形をなし、上面内傾する。頸部に三角突帯1条を貼付する。胴は膨らみを持ち、底脚は広がりが少なく不安定である。器表面が剥落するが、外面の一部に綴刷毛目が残り、本来の色調が黒色であったことが分かる。内底に指押さえ痕とナデ調整を留める。径3mmまでの粗砂と多量の細砂粒を含み、焼成良好。器高37.0cm。118は下蓋で、完存する。口縁は三角形と逆「L」字形の中間的な形をなし、胴の張りは口径を上回る。底脚は少し外に広がる。頸部に断面三角形突帯を1条貼付するが、完全に一周せず、一ヶ所で突帯が途切れる部分がある。片方の突帯を湾曲させて上下に約1cmの食い違いを生じさせており、意図的な文様と考えられる。剥落のため定かではないが、左右とももう少し突帯が伸びていた可能性がある。器表面が一枚剥落するが、外面の一部に綴刷毛目痕が残り、黒色を呈する。径3mm前後までの粗砂粒を多く含み、焼成不良である。煮炊きに用いた痕跡があり、転用棺と考えられる。口径33.0cm。

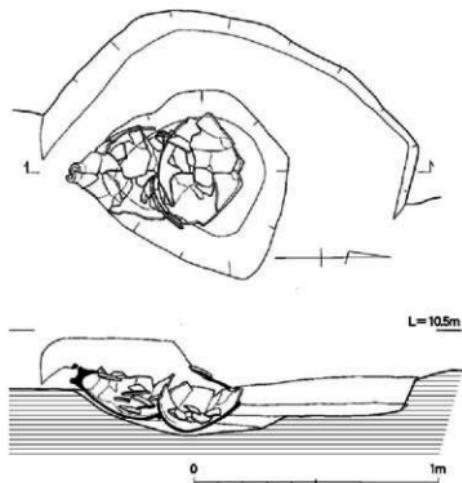


Fig.153 室棺墓SK-6084実測図(1/20)

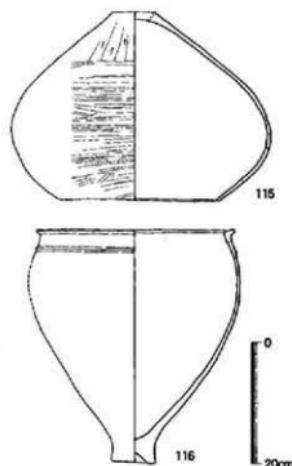


Fig.154 SK-6084出土遺物実測図(1/8)

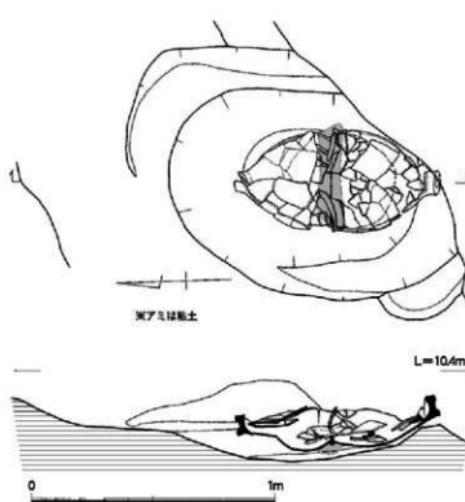


Fig.155 室棺墓SK-6086実測図(1/20)

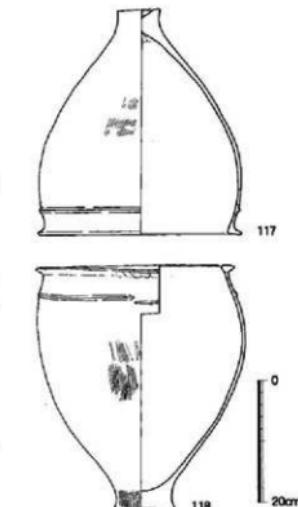


Fig.156 SK-6086出土遺物実測図(1/8)

(6)貯蔵穴

貯蔵穴は20基を検出した。調査区全域に分布するが、特にF区南半部に15基が集中しており、ここでは馬蹄形ないし環状に分布する傾向がうかがえる。弥生時代前期中葉～末頃に位置付けられ、底面形が長方形をなすもの1基、隅丸方～長方形のもの9基、円形のもの9基、楕円形のもの1基である。平面プランの時期的な傾向は窺えない。SK-6002は一段のステップを付けた特異な形状をなす。

貯蔵穴SK-6002 (Fig.157、PL.22)

F区の北端部から南へ11mの位置に検出した。底面は長方形をなし、長1.9m、幅1.3m。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北半部が一段深く1.1m、南半部は0.6m。底面平坦で、南短辺の両隅には深さ10cmほどの小ピットをやや外方に向けて掘っており、上屋の支柱とみられる。南東隅の底面からFig.158-132の壺底部が潰れた状態で出土した。少量ではあるが炭化米が覆土から出土しており、貯蔵穴であることは間違いないであろう。

SK-6002出土遺物 (Fig.158・194・195)

弥生土器、石器（柱状片刃石斧・砥石・黒曜石）がコンテナ1箱あるほか、炭化米が少量出土した。また、須恵器小片が1点混入して出土した。以下は全て弥生土器である。

119は甕で、屈曲部外面に刻目突帯を貼付する。磨滅が著しい。淡橙褐色で、石英粗粒混じりの細砂粒を少量含み、焼成良好。120は甕の口縁部で強く外反する。器表面が一枚剥落し、口唇刻目の有無及び調整は不明。淡橙褐色で、径2mm以下の砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。121も甕の口縁部で如意形をなし、口唇全面にヘラ刻目を施す。外面横ナデ、内面不明。黒褐色で、胎土に多量の細砂粒のほか、石英粗粒・雲母粒を含む。焼成良好。小片のため図の傾きは不確実。122は甕の底部か。平底で、器面剥落するが外面ナデ調整か。淡褐色で、径2mm以下の砂粒を多量に含むほか、雲母粒を含み、焼成良好。内面に僅かに炭化物が付着する。123は甕底部で平底。内底を指整形し、全体をナデ調整する。外面橙褐色～暗褐色、内面黒褐色で、胎土に粗砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。内面に炭化物が付着し、外側は赤変する。124も甕の底部で、平底。外面縱刷毛目、内面ナデ調整。橙褐色で、細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。125は甕の底脚か。脚内端が少し潰れる。外面指押さえ後刷毛目、内面ナデ調整。淡褐色で、径2mm以下の砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。

126・127は接合しないが同一個体の甕である。他に沈線3条を回した肩部片がある。口縁外面に粘土で段を設け、口縁は強く反る。器表面は全剥落する。粗砂・雲母の混ざった細砂粒を多く含み、焼成良好。128は甕の口縁部小片で、口唇下端にヘラで小さく刻目を入れる。内外とも丹塗磨研である。雲母混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。129は甕の口縁か。小片のため図の傾きは不確実。強く外反して開き、端部に浅い沈線が入る。外面ナデ、内面指押え。橙褐色、細砂粒を多量、雲母粒・カクセン石を少量含み、焼成良好。130は甕の底部で、外周を押えて円盤状に整形する。内面ナデ調整。橙褐色で、胎土に径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。131も甕底部で、内面ナデ、他は調整不明。外面橙色、内面黒色をなし、径2mm以下の砂粒を多量、カクセン石を僅かに含む。焼成不良。132も甕底部で、造構図に出土状況を示した土器である。他に肩部片が多数あるが接合しない。外面ナデ調整、内面は剥落する。橙褐色で、多量の細～粗砂粒のほか雲母粒を含む。焼成良好。133も甕底部で、外面ナデ。内面剥落。淡橙褐色～淡褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。

弥生時代前期中葉～後葉の造構であろう。

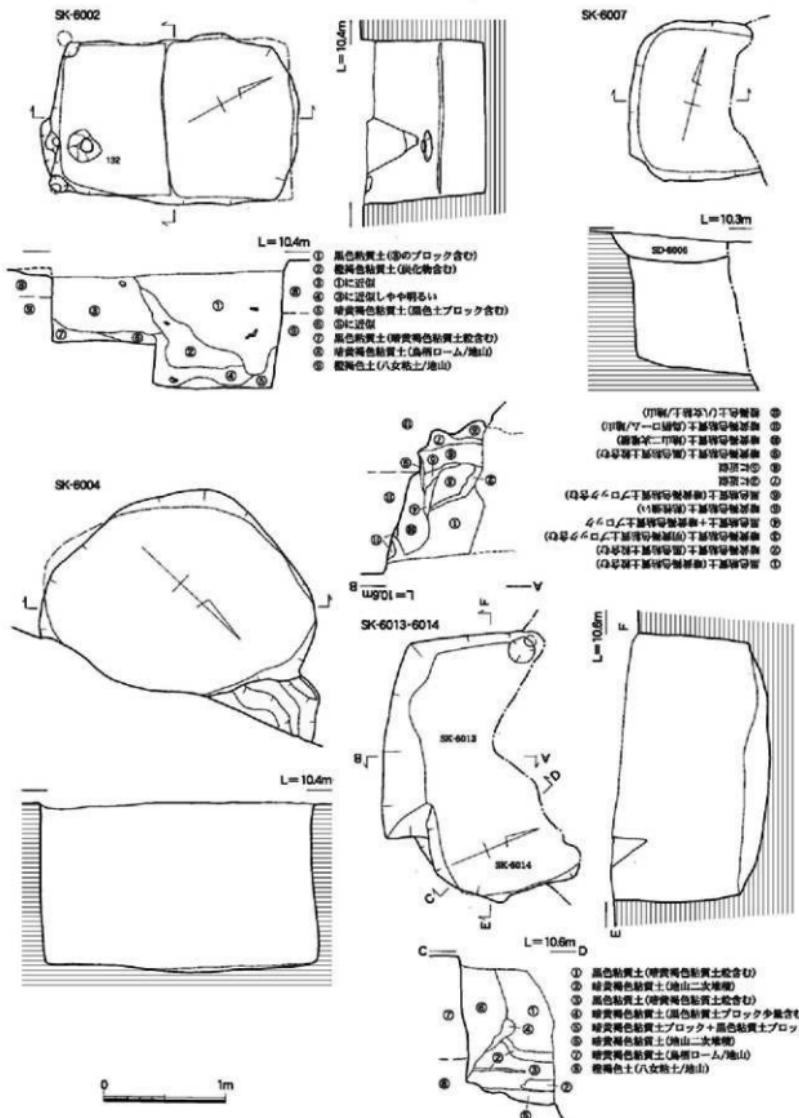


Fig.157 貯蔵穴SK-6002・6004・6007・6013・6014実測図 (1/40)

貯藏穴SK-6004 (Fig.157、PL.22)

F区北半部の東壁際に検出し、東側は一部が区外へ伸びる。底面は楕円形プランで、長径2.25m、短径1.5m程度か。円筒状をなすが、掘削時に壁面が崩壊したローム土が多量に出土しており、本来は断面形が袋状をなすと考えられる。底面は平坦で、深さ1.4mを測る。覆土は黒色粘質土である。

SK-6004出土遺物 (Fig.158)

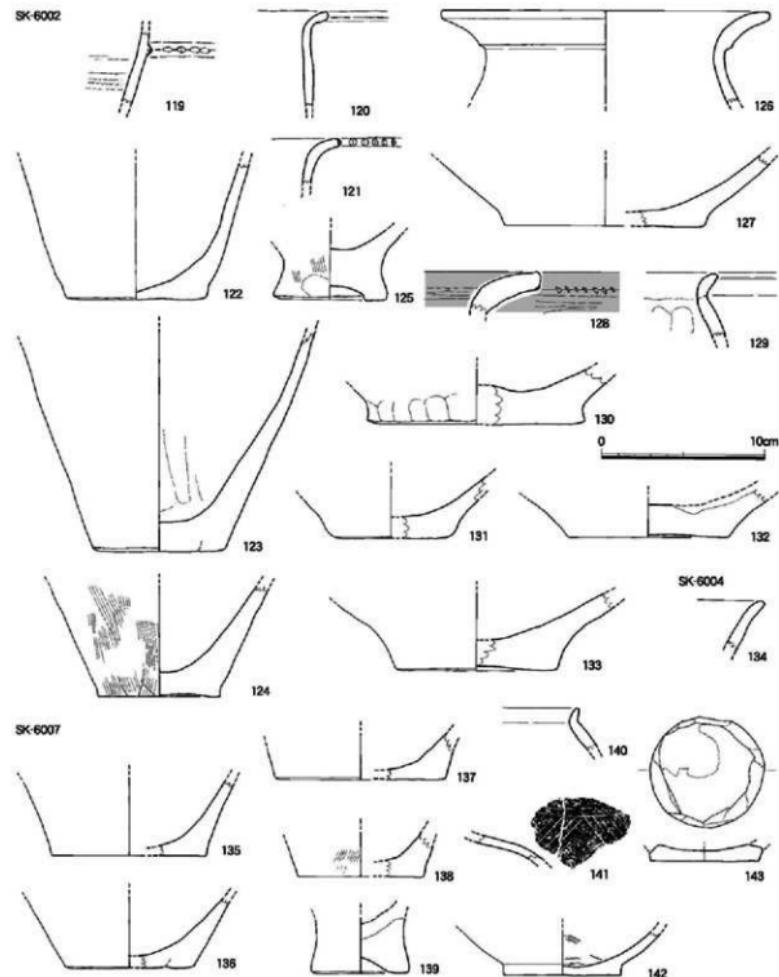


Fig.158 SK-6002・6004・6007出土遺物実測図 (1/3)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。134は弥生土器甕又は鉢の口縁部か。内面ナデ、外面は調整不明。淡黄褐色～淡橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。

貯蔵穴SK-6007 (Fig.157)

F区北半部、SK-6004の4m南側に検出した。溝SD-6006に切られ、東半は擾乱坑により失う。底面隅丸方形で、1.2m×1.0m以上。断面円筒形で、深さ1.2m。底面は平坦で、僅かに東へ傾斜する。
SK-6007出土遺物 (Fig.158)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

135～138は甕の底部で、安定の良い平底である。135は器表面が全て剥落。径8mmの粗大砂粒、多量の細砂粒、少量の雲母粒を含み、焼成不良。136は外底に粘土接合痕が残る。外面ナデ調整で、内面剥落。淡橙～黒褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。137は外面ナデ調整、内器面剥落。暗橙色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。138は外面刷毛目、内器面剥落。黒～暗橙色、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。139は甕の底脚で、下端はあまり張り出さない。調整痕は残らない。淡褐～明橙褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。

140は壺か。小片のため図の傾きは不確実。口縁は短く立つ。器面剥落するが内面ナデ調整か。橙褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。141は壺肩部で、外面に沈線2条と複線山形文を施す。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。暗赤褐色で、細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。142は壺の円盤状底部で、ローリングを受けるが内面に工具によるナデ痕を留める。雲母微粒を少量含み胎土精良、焼成不良。胴外面上に黒斑がある。143は壺底部で、縁を打ち欠いているようであり、再利用品か。ローリングを受ける。胎土精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。

弥生時代前期末頃の遺構と考えられる。

貯蔵穴SK-6013・6014 (Fig.157, PL.23)

F区北半部の南寄りに検出した。2基の貯蔵穴が切り合うが、覆土が酷似し、底面が同レベルにあり、各個がつかみ難い。ともに北半を擾乱により失う。SK-6013は底面隅丸方形。東西1.3m前後で、南北長は不明。深さ1.2m。底面に凹凸がある。⑩層は壁面が落ちたもの。SK-6014も隅丸方形か。法量不明。深さ1.2mで、底面は平坦で北にやや傾斜する。土層⑥層は壁土が落ちたもので、本来の断面形はフラスコ状をなそう。遺物は土層ベルトの南北で分けた。出土土器からみてSK-6013が古い。
SK-6013出土遺物 (Fig.159)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

144は甕の胴部で、ローリングが著しいが、外面に横の貝殻条痕が残る。黒褐～淡黄褐色で、細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。145は甕の底部。外面縦刷毛目、内面横刷毛目調整。淡橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。外底に黒斑がある。

146は小壺の口縁部小片で、摩滅する。微砂粒・雲母微粒を少量含み精良、焼成不良。

弥生時代前期中葉～後葉の遺構であろう。

SK-6014出土遺物 (Fig.159, PL.27)

弥生土器、黒曜石、炭化米が少量出土した。図は全て弥生土器である。

147・148は甕で、接合しないが同一個体であろう。如意形口縁で、口唇下半に板小口又はヘラで密に刻目を施すが、器表面が一枚剥落し残りが悪い。底部内面は指頭整形の後、先端の丸い板状工具でナデ調整する。他は調整不明。胎土に石英粗粒混じりの細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。

149は壺の口縁部

SK-6013

で、外反し、端部の内外に段を有する。

外面の段は退化し單なる屈曲となる部分

がある。口唇は面取し、上下端に刻目がつこう。器面剥落す

る。径2mm以下の砂粒を極めて多く含み、焼成良好。150は高環

の口縁部か。外面横ナデ、内面調整不明。

暗橙褐色。カクセン

石など細砂粒を多く含み、焼成不良。

弥生時代前期後葉の遺構であろう。

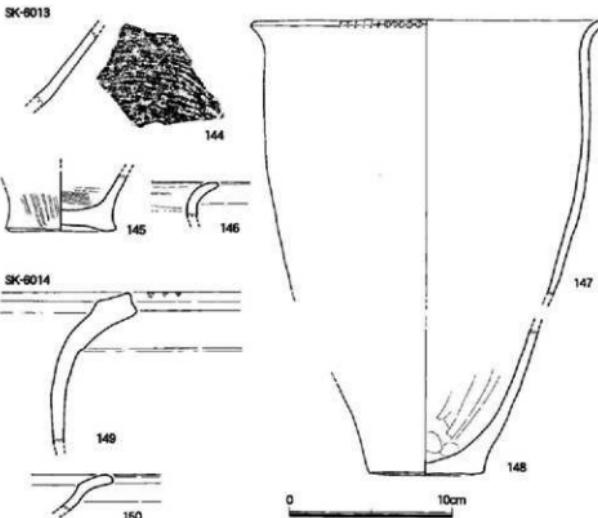


Fig.159 SK-6013・6014出土物実測図 (1/3)

貯藏穴SK-6044 (Fig.160)

F区南半部に検出した。東壁の中央付近に位置する。径1.6~1.8mの略円形プランで、一旦すばまわり、ラスコ状に広がって径2.2mの円形の底面となる。深さ90cmで、底面は皿状に少し窪む。

SK-6044出土物 (Fig.161)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

151は壺で下半を欠く。頸部で内屈し口縁は直立する。上端と頸部に突帯を貼付し、突帯下半を中心に深く密にヘラ刻目を入れる。頸部突帯は左にやや垂れる。器面剥落するが内外ナデ調整か。多量の細砂粒、石英粗粒・カクセン石を含み、焼成良好。外面にススが付着する。152は壺の口縁部小片で、図の傾きは不確実。頸部で屈曲し、口縁は内傾する。上端と頸部に高めの突帯を貼付し、棒状の丸い施文具を押圧する。頸部突帯は右がやや垂れる。外面貝殻条痕、内面ナデ調整で指押さえ痕が残る。淡黄褐色で、石英など細砂粒を少量含み、焼成良好。153は壺の頸部小片で、図の傾きは不確実。屈曲部外面に突帯を巡らせてヘラ刻目を入れる。外面貝殻条痕、内面はナデと貝殻を併用する。黒褐~淡橙褐色、雲母・カクセン石混じりの細砂粒を少量含み、焼成良好。154は壺の口縁部で、強く外反する。器面剥落するが口唇に刻目の痕跡を残す。細砂粒を多く含み、焼成良好。155は壺で下半を欠く。口縁はゆるく外反し、頸部に沈線2条を回す。口唇は剥落し刻目が付く可能性がある。内外ナデ調整で、口縁横ナデ。内面に砂粒が動いた痕跡があり、ナデの前に軽く削ったか。細砂粒を多量、石英粗粒、カクセン石を少量含み、焼成不良。二次加熱により黒~赤橙色に赤変し、外器面に細かいヒビが入る。156~158は壺の平底。156は外面刷毛目、内面ナデ。雲母混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。157は器表面が剥落。石英粗粒とカクセン石などの細砂粒を多量に含み、焼成不良。158も調整痕は残らないが赤変し、橙褐~赤橙色をなす。多量の砂粒・少量のカクセン石を含み、焼成不良。

159は壺の底部である。内外面ヘラ研磨で、外底はヘラ削り後ナデ調整。外面黄褐色、内面黒褐色

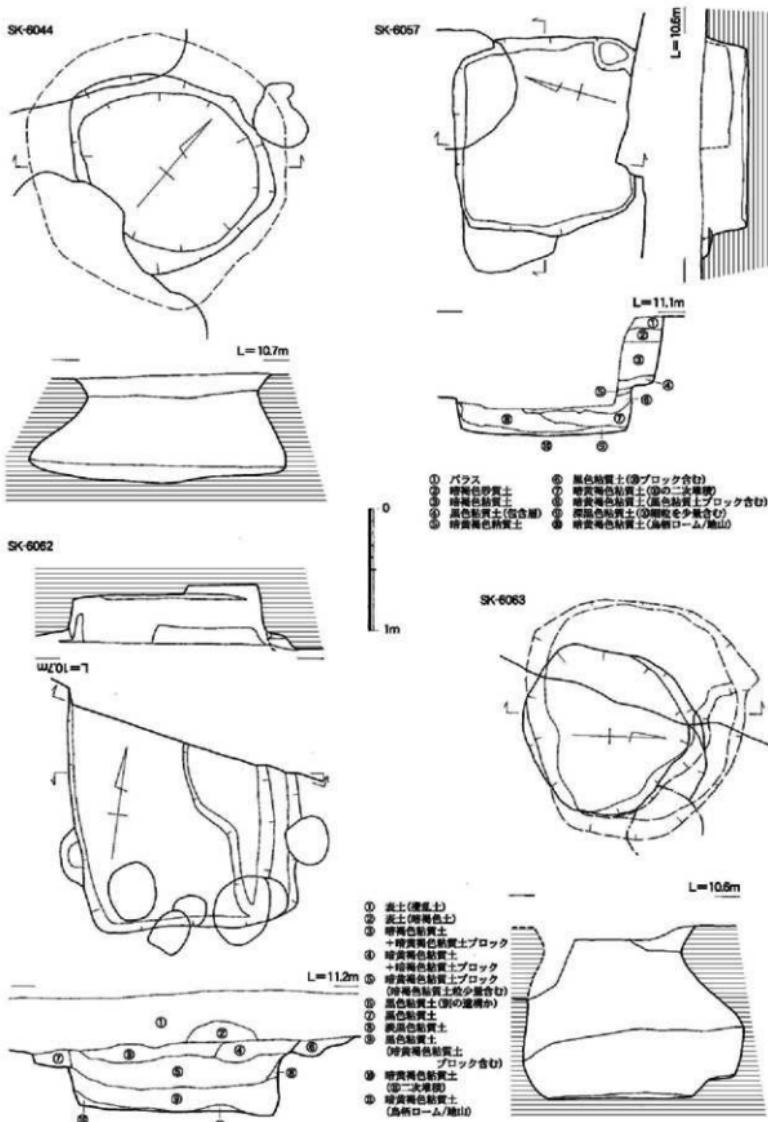


Fig.160 貯蔵穴SK-6044・6057・6062・6063実測図 (1/40)

で、細砂粒を多く含むが胎土精良、焼成良好。外面に黒斑がある。160は粗製土器で、鉢の口縁部が、内外面とも雑なナデ調整で、内面に粘土接合痕が残る。黒褐色、細砂粒多量・雲母粒を含み、焼成不良。弥生時代前期前葉～中葉頃の遺構であろう。

貯蔵穴SK-6057 (Fig.160、PL.23)

F区南東隅～F区東に検出した。調査区南外に伸びる。隅丸長方形プランで、1.6m×1.4m。断面逆台形で、深さ40cm。底面平坦である。底面に有機質深黒色粘質土の堆積があり、貯蔵穴と判断した。
SK-6057出土遺物 (Fig.161・193)

弥生土器、石器（石庖丁・砥石・黒曜石）が少量出土した。161は弥生土器壺の口縁部である。口縁は強く外反し、外面に段を設けるが、剥落してローリングを受けており調整不明。外面橙色、内面淡黄褐色、径2mm以下の砂粒を多く含むほか、石英粗粒・雲母粒が混じる。焼成良好。

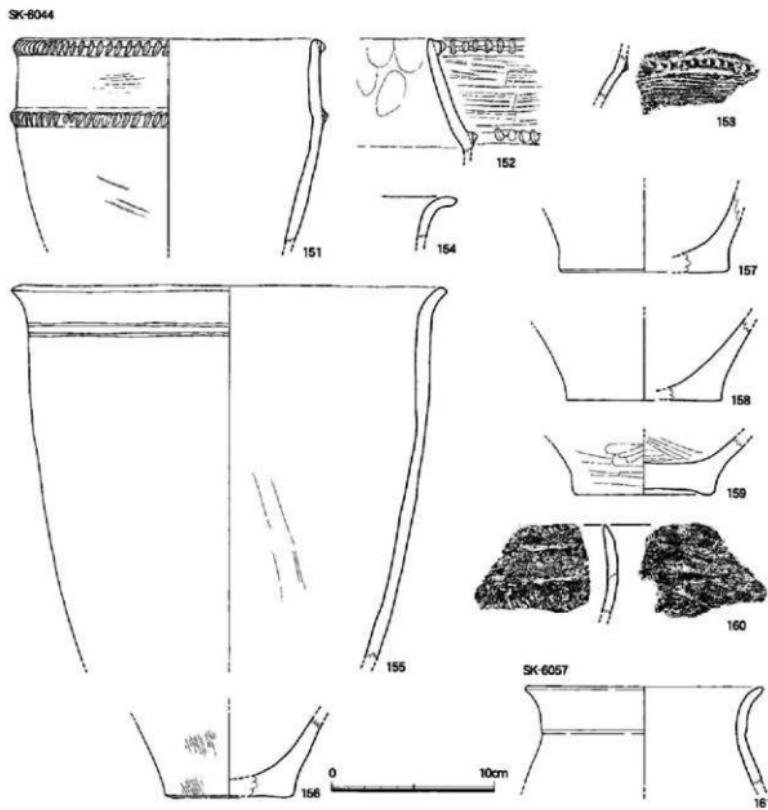


Fig.161 SK-6044・6057出土遺物実測図 (1/3)

貯蔵穴SK-6062 (Fig.160)

F区南半部に検出した。SK-6044の北側に隣接し、北は調査区外へ伸びる。南北に長い隅丸長方形プランで、長2.0m以上、幅1.9m。断面逆台形で、底面は平坦で東壁際が一段深く、深さ50cm。図の⑤層は人為的な埋め土であろう。下層に黒色粘質土が堆積することから貯蔵穴と判断した。

SK-6062出土遺物 (Fig.162)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

162は甕の口縁部片で、端部に突帯を貼付し、棒状工具を下方へ押圧して刻目を施し、粘土が下へはみ出す。指押さえにより内端が突出する。外面は条痕後、板又はヘラ状の工具でナデ消す。内面ナデ調整。外面暗橙褐色～黒褐色、内面橙褐色を呈し、胎土に石英粒・細砂粒を少量含み、焼成不良。163は甕の口縁部小片で、図の傾きは不確実。如意形をなし、外器面が剥落して口唇刻目の有無は不明。内面ナデ調整。淡橙褐色で、石英粒など砂粒を多く含み、焼成良好。164も甕で、逆「L」字形口縁で上面内傾する。摩滅して調整不明。淡橙褐色で、微細砂粒を多く含むほか、石英粗粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。165は甕の底部で、断面台形に張り出す。調整不明。外面黒色、内面橙褐色をなし、細砂粒・雲母粒を少量含み精良で、焼成良好。166も甕底部で、平底。内外ナデ調整。暗橙～黒色で、石英粗粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。167も甕底部で、器面剥落。石英など径2mm以下の砂粒を多く含み、雲母粒・カクセン石が混じる。焼成不良。二次加熱により外面が赤変する。

168は壺の口縁部で、外面に粘土を貼付するが段は痕跡的である。内外ヘラ研磨。淡灰褐色、胎土は精良で雲母と細砂粒を僅かに含み、焼成良好。169は壺の底部片。外面ヘラ研磨か。内面には指押さえ痕が残る。外面褐色、内面淡赤褐色で、雲母・暗赤色粒まじりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

162・163・166・168は下層から出土した。164を柱穴などからの混入遺物と考えれば、他は板付II式の範疇でとらえることができよう。混入でなければ中期前葉の遺構である。

貯蔵穴SK-6063 (Fig.160)

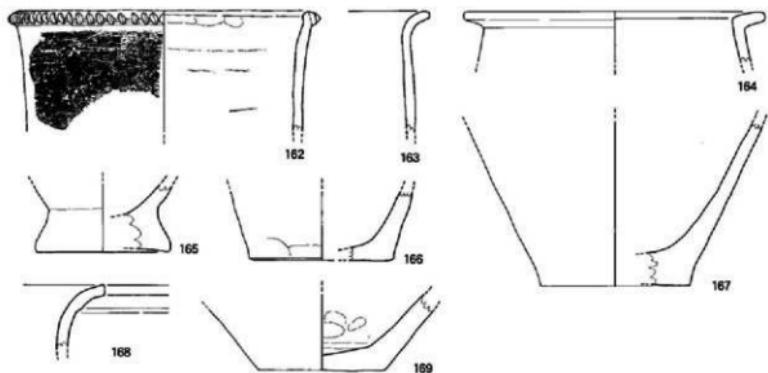
F区南半部の調査区東壁際に位置する袋状貯蔵穴である。中世溝SD-6031に切られる。土坑SK-6045の底面で確認したが、掘削後の土層観察によりSK-6045を切る遺構であることが判明した。上部は不整な横円形をなし、径1.3～1.6m。一旦すぼまり、フラスコ状に広がる。底面は誤って掘りすぎており、本来の深さは1.4m。底面は径1.9mの円形プランで、平坦である。

SK-6063出土遺物 (Fig.162、PL.27)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

170は甕で、ほぼ完存する。如意形口縁で、口唇にヘラ刻目を施すが残りが悪い。胴中位に粘土帶の接合痕があり、下半が橙褐色、上半は黒味があり、異なる素地土を用いる。外面は剥落するが下半にナデ、口縁に横ナデ痕が残る。内面ナデ調整で、頸部と底部は指押さえ。石英粗粒～細砂を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。器高18.3cm。171は甕の上半で、洞が少し膨らむ。如意形口縁で、口唇の刻目はヘラで浅く密に施す。外面はヘラなどの工具で丁寧にナデ調整。内面はナデ調整で指押さえ痕が残る。口縁横ナデ調整。外面黒褐色～橙褐色、内面橙～褐色をなし、石英粗粒や砂粒、雲母粒を含み、焼成不良。172も甕で、口縁が強く外反し「く」字形に近い。剥落のため調整不明で、口唇に刻目が付く可能性がある。雲母など径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好。外面に黒斑がある。173は甕の口縁で逆「L」字形をなすが、小片のため図の傾きは不確実。外面継刷毛目、口縁横ナデ、内面は器壁剥落。橙褐色、石英粗粒と雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。174は甕の底部で、平底。器面の残りが悪いが、外面粗い継刷毛目、内面ナデ調整で底に指押さえが残る。淡黄褐色～

SK-6062



SK-6063

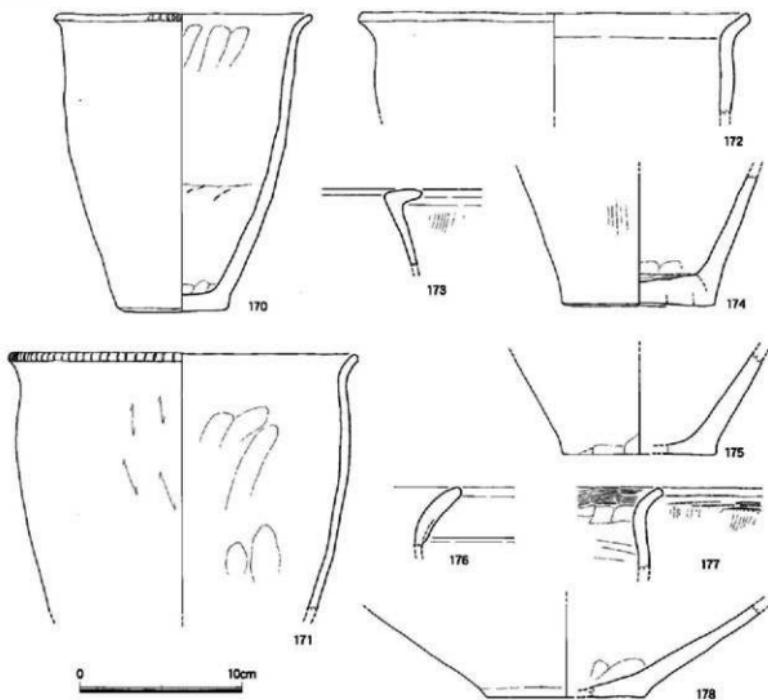


Fig.162 SK-6062・6063出土遺物実測図 (1/3)

淡褐色で、石英粗粒・砂粒が多く、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。175も壺の底部で薄い。内外面ナデ調整。外面淡暗橙褐色、内面黒褐色をなし、雲母など細砂粒を多量に含み、焼成不良。

176は壺の口縁部片で、外反し、外面に粘土を貼付してあまい段を造る。調整痕は残らない。淡黄褐色で、細砂粒が多く、雲母やカクサン石を含み、焼成や不良。177は口縁部の小片で、岡の傾きは不確実。外面綿刷毛目後ヘラ研磨、内面は口縁が横刷毛、頸部ヘラナデ、胴部ヘラ研磨で、壺の調整手法に似ている。外面にぶい橙褐色、内面黒色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。178は壺の底部片で、器面剥落のため調整不明。外面にスヌが付着する。細砂粒が極めて多く、他に石英・雲母粒を含み、焼成不良。胎土に炭化物を薄く挟み込んでおり、有機物を混ぜ込んだか。

173など弥生時代中期前葉に下る土器が数点含まれる。その他は前期後葉までの土器である。

贮藏穴SK-6073 (Fig.163、PL.23)

F区南半部の北寄りに位置する。北半部を擾乱坑に切られる。上端は1.7m以上×2.5mの梢円形をなし、一旦すばまるが、土層作図後に壁が崩落した。断面袋状をなし、最大径2.3mまで膨らむ。底面はそれよりやや狭く径2.0mの円形プランをなし、平坦である。検出面から底面まで1.1mを測る。

SK-6073出土遺物 (Fig.164 • 196)

弥生土器、石器（磨製石器・黒曜石）がコンテナ1箱出土した。図示した遺物は弥生土器である。

179は壺の口縁部小片で、図の傾きは不確実。端部に方形突帯を貼付しヘラ刻目を施す。外面は摩滅するが横ナデか。内面刷毛目調整。暗橙褐色で、細砂・雲母粒を少量含み、焼成良好。180は如意形口縁の壺で、ローリングを受け、口唇の刻目の有無は確認できない。頭部に退化した段又は沈線がある。外面調整不明、内面ナデ、口縁横ナデか。橙褐色で、径3mm以下の砂粒を少し含むが精良で、焼成不良。181は鉢の口縁部か。小片である。内外面へラ研磨。頭部の孔は焼成後の穿孔とも考えられるが、破面に統いており不確実。にぶい暗橙褐色をなし、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。

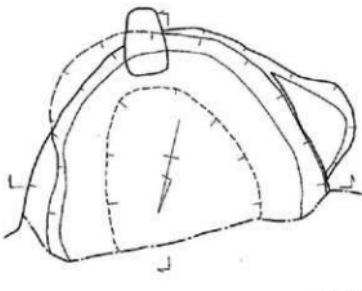


Fig.163 貯藏穴SK-6073実測図 (1/40)

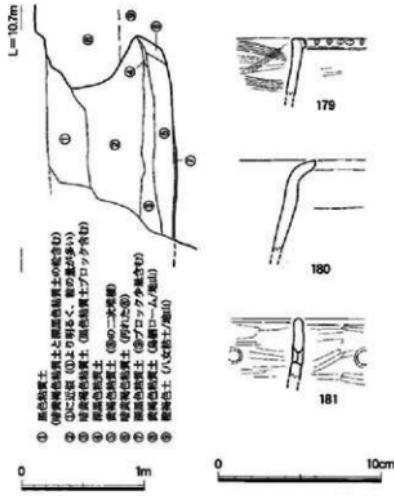


Fig.164 SK-6073出土遺物
臺灣圖(1/3)

貯蔵穴SK-6076 (Fig.165, PL.23)

F区南半部に検出した袋状貯蔵穴である。貯蔵穴SK-6073の南約3mに位置する。東西の壁でそれぞれ土坑と切り合うが、覆土が酷似するため検出時には一つの遺構と認識して掘り下げを進めたが、その後の土層断面観察等により、SK-6075→SK-6076→SK-6067の順に新しいことが分かった。SK-6076は、上部が東西に長い楕円形プランをなし、長径2.5m前後、短径2.1m。すり鉢状に一旦狭まり、中位で径0.8mまでくびれ、底部はラスコ状に大きく開く。底面は径2.4~2.5mの平坦な円形プランをなす。土層図作成後に、くびれ部が崩落したため平面図と対応しない。

SK-6076出土遺物 (Fig.166・195・196, PL.27)

弥生土器、石器（磨製石器・砥石・黒曜石）がコンテナ1箱出土した。以下は全て弥生土器である。

182は甕の口縁部小片で、僅かに外反し、端部にヘラ刻目を浅く密に入れる。外面は継の、内面は斜めの貝殻条痕を施す。外面暗褐色、内面淡橙褐色で、細砂粒を含み、焼成不良。183は如意形口縁の甕で、強く外反し、口唇に浅くヘラ刻目を施す。外面粗刷毛目、内面ナデ調整。淡黄褐色で一部赤変する。石英粒・暗赤色粒混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。184は甕で下半を欠く。口縁は強く外反し内面に不明瞭な稜がある。

端部を面取りし、上下端にへうで密に浅い刻目を入れる。胴外面に段を設け、口唇と同様の刻目を施す。外面は継刷毛目後にヘラ等の工具による斜～横ナデを加え、段の周囲は横ナデとする。内面は指押さえ後に、胴部ナデ、口縁横刷毛目を施す。黒褐～燈褐色を呈し、石英粗粒・雲母粒を少、細砂粒を多く含み、焼成不良。外面に黒色塗料を塗っている。185は甕の口縁部で断面三角形をなし、頸部に三角突帯2条を貼付する。器表面は一枚剥落。粗砂粒と細砂粒を多く含み、焼成不良。

186は甕の口縁部で、ローリングが著しい。口縁外面に退化した段があり、内外とも丹塗磨研。胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。187も甕で、口縁に粘土を貼付して段とし、内面は指押さえにより不明瞭な稜

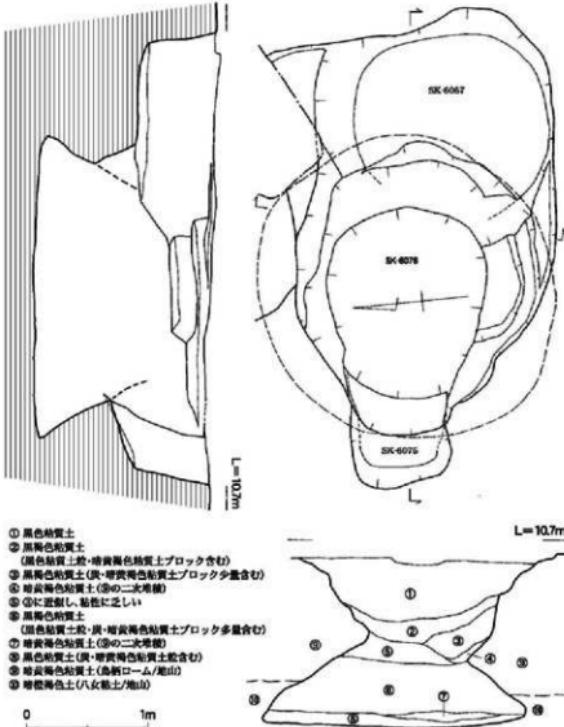


Fig.165 貯蔵穴SK-6076実測図 (1/40)

をなす。外面は残りが悪いがヘラ研磨か。内面は指押さえ後ナデ調整。淡橙褐～淡褐色、石英・雲母など径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好。188は壺の底部小片で、外底に木葉压痕が残る。外面橙褐色、内面黒色を呈し、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。189は壺の底部か。調整痕が残らない。橙褐色、径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好。190は鉢の底部か。外面は摩滅するが、一部に工具による調整痕が残る。内面ヘラ研磨。暗橙褐色、石英粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。191は鉢。口縁は強く外反し、頸部で内屈する。口唇は剥落する。外面摩滅するが、頸部紙刷毛目、胴部ヘラ研磨。内面ヘラ研磨で、口縁は丁寧だが下方は粗雑。外面橙褐色、内面は炭素吸着して黒色。石英粗粒・雲母粒混じりの砂粒を多く含み、焼成不良。192は高坏か。口縁部小片で、屈曲して外反する。摩滅するが内外ヘラ研磨調整。暗褐色で、石英粗粒・カクセン石・細砂粒を少量含み、焼成良好。185はSK-6067からの混入か。弥生時代前期後葉までに位置づけられよう。

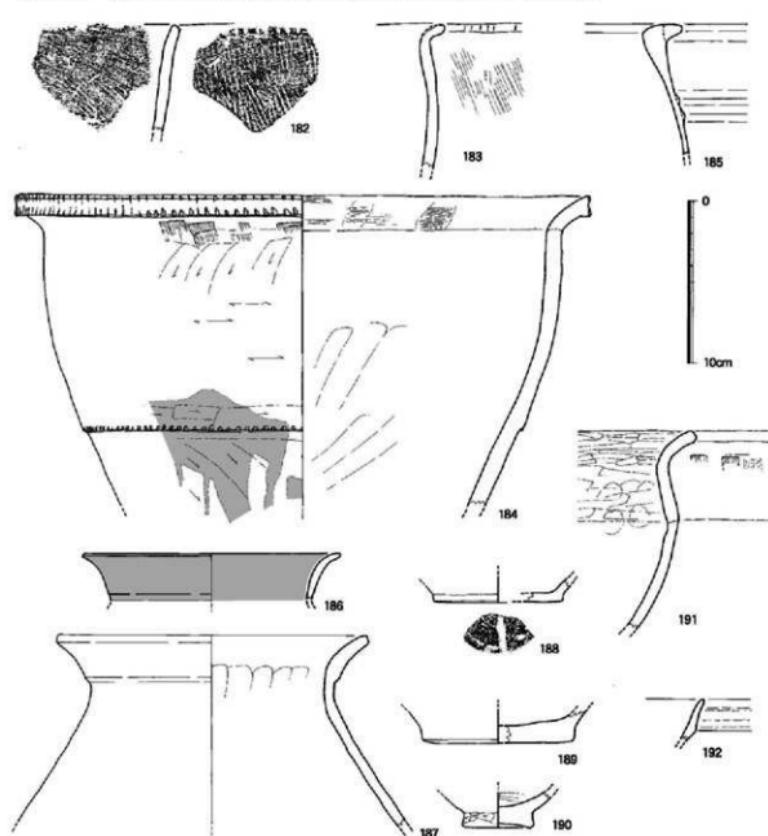


Fig.166 SK-6076出土遺物実測図 (1/3)

貯蔵穴SK-6083 (Fig.167, PL.23)

F区南半部の北東に位置する。竪穴住居SC-6036の下位に検出した。上端は楕円形で、径1.1~1.4m。壁面が崩壊して断面台形だが、本来は袋状をなそう。深さ0.8m。底面は径1.3mの円形で、平坦。
SK-6083出土遺物 (Fig.168)

弥生土器、黒曜石・安山岩が少量出土した。弥生土器4点を図示した。

193は如意形口縁の甕で、図の傾きは不確実。口唇にヘラで浅く刻目を入れる。黒~橙褐色で、細砂粒を多量、石英・カクセン石を少量含み、焼成良好。194は甕の底部で摩滅する。内面ナデか。黒褐色~淡褐色で、雲母など細砂粒を多く含み、焼成不良。195は壺の口縁部小片で摩滅する。外面は粘土貼付か。胎土精良で雲母を含み、焼成良好。196は胎土精良で、壺の底部か。調整不明、焼成不良。

貯蔵穴SK-6088 (Fig.167, PL.24)

F区南半部の東壁近くに位置する。中世溝SD-6031の底面で確認した。不整な隅丸長方形を呈し、長1.8m、幅1.35mを測る。断面台形で壁が抉れ、特に南東側は袋状となる。深さ60cmで隅丸方形プランの平坦面を造り、北に寄せて1.3×0.8m、深さ30cmの不整楕円形の窪みを掘る。掘り直し、又は下位の別造構か。この窪みには、崩落したローム土に挟まれて有機質の深黒色粘質土が堆積していた。

SK-6088出土遺物 (Fig.168)

弥生土器、石器（柱状片刃石斧・砥石・黒曜石）が少量ある。

197は甕の口縁部小片で、図の傾きは不確実。端部に三角突帯を貼付し、丸棒状の工具を上から下へ押し下げて刻目を入れており、粘土が下へはみ出す。暗橙色で、径2mm砂粒混じりの細砂粒を少量含み、焼成良好。198は甕の底部片で、断面台形に下端が張り出す。摩滅して調整痕は残らない。橙褐色、細砂粒を多量に含み、焼成不良。199は壺の口縁部小片で、外面に粘土を貼付して突帯状の段をつくる。摩滅するが内外ヘラ研磨であろう。淡橙褐色で、胎土に雲母などの細砂粒を多量に含み、焼成良好。

貯蔵穴SK-6090 (Fig.167)

F区南半部、SC-6036の下位に位置し、攪乱坑に破壊され壁の一部が残った造構である。造構検出面から深さ60cmで底面の一部を確認した。底面は円形をなそう。形状から貯蔵穴と推定した。

土器片が1点出土したが、図化できるものではない。

貯蔵穴SK-6091 (Fig.167, PL.24)

F区南半部の西壁近く、中世溝SD-6040の掘削後に現れた造構である。溝の斜面に袋状貯蔵穴の下半部が1/2周弱残っていた。本来はフラスコ状の断面であったとみられるが崩落しており、1.0mの直立する壁となる。底面は径2.5mの円形プランで、若干西へ傾斜し、SD-6040底面と連続する。

SK-6091出土遺物 (Fig.168)

弥生土器、黒曜石がコンテナ1/2箱ほど出土した。図示した遺物は弥生土器である。

200は甕の底部で、粘土接合部から剥落する。外面は下から上へ継刷毛目、内面指押え後ナデ調整。焼成後に外底から穿った孔がある。淡黄褐色~橙色で、内面に炭化物が付着する。石英粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。煮炊きに使用している。201は甕の底部か。外面指押さえ後ヘラナデ、内器面剥落。淡黄白色で、細砂粒を少量含み、焼成不良。202は壺の底部で、ローリングを受けるが内面ヘラ研磨か。外底には木葉圧痕がある。淡黄灰色で、胎土は精良、焼成不良。図化していないが、他に如意形口縁の甕や、沈線を施した壺胴部片がある。弥生時代前期後葉を前後する時期であろう。

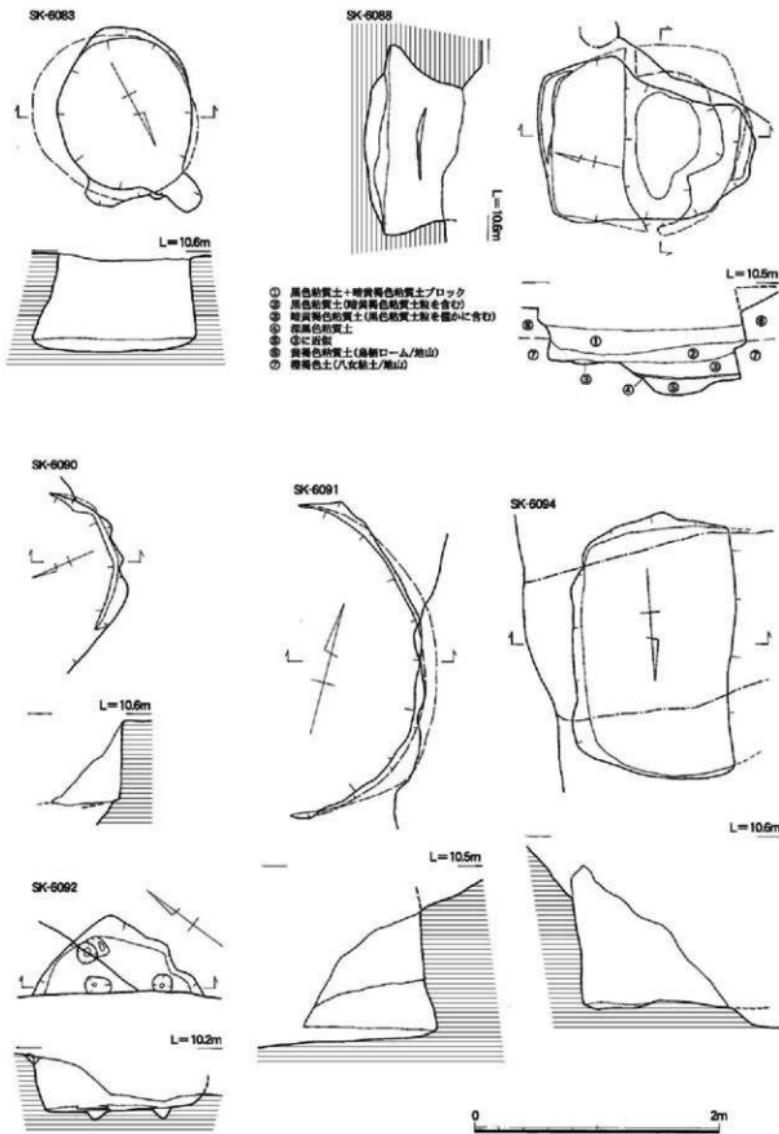


Fig.167 貯藏穴SK-6083・6088・6090・6091・6092・6094実測図 (1/40)

貯藏穴SK-6092 (Fig.167)

中世溝SD-6040の掘削後その斜面で検出した。西側は調査区外へ伸びる。底面は円形プランとみられ、径1.2m以上。断面逆台形で、北西壁で45cmが残る。底面は平坦である。

弥生土器、黒曜石が十数点ほど出土したが、図化できるものはない。

貯藏穴SK-6094 (Fig.167、PL.24)

SD-6040の掘削後その斜面で確認した。試掘トレンチと重なり残りが悪いが、隅丸方形の底面をなそう。2.2m×1.3m以上で、壁はほぼ直立し、南東隅で深さ1.1mを測る。底面はほぼ平坦である。

SK-6094出土遺物 (Fig.168・194)

弥生土器、石器（柱状片刃石斧・黒曜石・安山岩）が少量ある。以下は弥生土器である。

203と204は甕の口縁部と底部で、接合しないが同一個体である。如意形口縁で、胴が膨らむ。口唇下端にヘラで浅く不等間に刻目を施す。器面の残りが悪いが、外面刷毛目、内底は指押さえ。黒褐色で、雲母粒・細砂粒を多量、粗砂粒・カクセン石を少量含み、焼成良好。外面にスス、内底に厚く炭化物が付着する。205は甕の底部で、断面台形に大きく張り出す。内面ナデの他は調整不明。橙褐色、細砂・雲母粒を少量含み、焼成不良。206は甕の底脚で、下端は張り出さない。摩滅し、内面に指押さえ痕を残すのみ。淡橙褐色で、雲母など細砂粒を多量に含み、焼成不良。207は甕底部で、外底の縁を強くナデて底を強調する。雲母など細砂粒を多く含み、焼成不良。弥生時代前期末頃か。

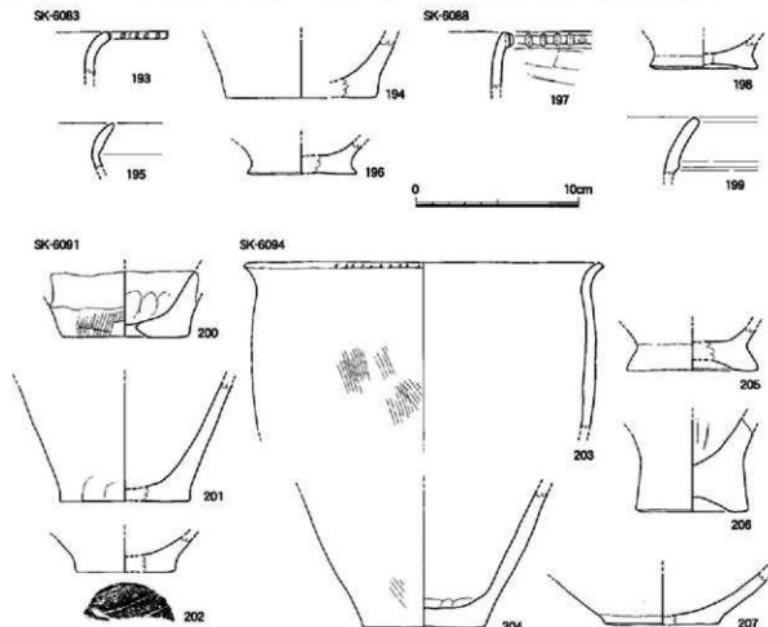


Fig.168 SK-6083・6088・6091・6094出土遺物実測図 (1/3)

貯藏穴SK-6703 (Fig.169)

F区東の北東隅に位置する。調査区壁際に一部を確認したが、主要部分は区外にある。隅丸方形プランか、断面形は略逆台形で、床面は段をなして落ち、最深部で90cmを測る。

SK-6703出土遺物 (Fig.170・195・196)

弥生土器、土製品、石器（鋸鍼車、砥石、黒曜石）が少量出土した。他に竈泉窯系青磁1点があり、調査区壁から混じり込んだようである。

208は弥生土器臺か。口縁部小片で歪みがあり、図の傾きは不確実である。器表面が一枚剥落する。径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。**209**は弥生土器甕の底部で、器面は剥落。内面に炭化物の痕跡が残る。細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。

貯藏穴SK-6708 (Fig.169, PL.24)

F区東の南壁際に検出した。一部が調査区壁にかかる。隅丸長方形プランで、長1.9m前後、幅1.6m。断面逆台形で深さ30cm、底面はほぼ平坦である。底近くに黒色粘質土が堆積し、その上を崩落土とみられる地山土が覆っており、貯藏穴特有の土層堆積状況を示す。

弥生土器、黒曜石が少量出土したが、図化できるものはない。

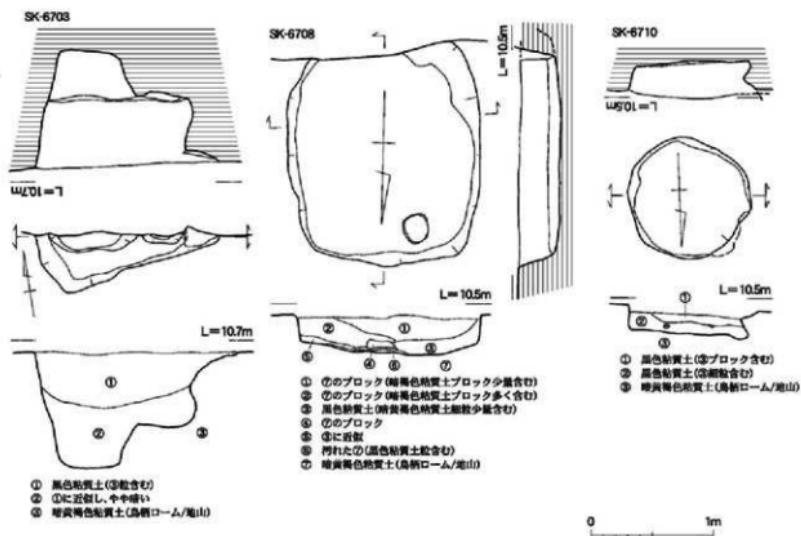


Fig. 169 脾藏穴SK-6703・6708・6710実測図 (1/40)



Fig.170 SK-6703・6710出土遺物実測図 (1/3)

貯蔵穴SK-6710 (Fig.169)

F区東のSK-6708の約1m西に位置する。貯蔵穴SK-6057を切る。円形プランで径1.0m。円筒形をなし、深さ20cm。西壁は袋状となる。黒色粘質土の覆土と、袋状の壁面から貯蔵穴に含めた。

貯蔵穴SK-6710出土遺物 (Fig.170)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。

210は弥生土器壺の肩部小片である。外面に三角突帯を貼付し、直下に有軸羽状文を施す。淡橙褐色で、径2mm以下の砂粒を多量に含み粗く、焼成良好。

(7)土坑

土坑は21基を報告する。弥生時代前期～中期17基、弥生～古墳時代（時期不詳）4基である。他に、報告から漏れた浅い窪み状の遺構が少數ある。

土坑SK-6003 (Fig.171)

F区北半部の中央北寄りに位置する。弥生時代の溝SD-6006に東側を切られる。やや不整な隅丸長方形プランを呈し、東西2m前後、南北1.25mを測る。断面逆台形をなし、深さ15cmで浅く、底面は平坦である。

弥生土器、黒曜石が少量のほか、須恵器1点が混入して出土した。図化できるものはない。

土坑SK-6009 (Fig.171, PL.24)

F区北半部のほぼ中央に検出した。中世溝SD-6017に東側を切られる。不整な梢円形プランで、長径1.5m、短径1.1mである。深さ20cmで、浅皿状に窪む。

SK-6009出土遺物 (Fig.172・194)

弥生土器、石器（大型蛤刃石斧・砥石・黒曜石）が少量出土した。以下は弥生土器である。

211は甕の口縁部で、逆「L」字形をなし上面が内傾する。外面ナデ、内面剥落、口縁横ナデ調整。淡橙～淡黄褐色で、径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。212は壺の底部で、平底。器表面が剥落するが、内底に指押さえ痕が残る。外面赤褐色、内面淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量、径2mmの砂粒を少量含み、焼成不良。以上2点は遺構図に出土位置を示した。

弥生時代中期前葉の遺構であろう。

土坑SK-6019 (Fig.171)

F区北半部に検出した。東壁北端近くに位置し、主要部分は調査区外にある。平面形は不整隅丸方形か。長1.6m、深さ20cmで、西壁は段状に落ち、底面は平坦である。

土器小片が1点出土したが、図示できるものではない。

土坑SK-6022 (Fig.171)

F区北半部中央の西寄りに検出した。SD-6001の斜面に位置し、西側は削平消滅する。隅丸長方形プランで、長1.35m、幅は0.45m以上となろう。断面逆台形で、深さ10cmである。

土器小片が十数点出土したが、図化できるものがない。

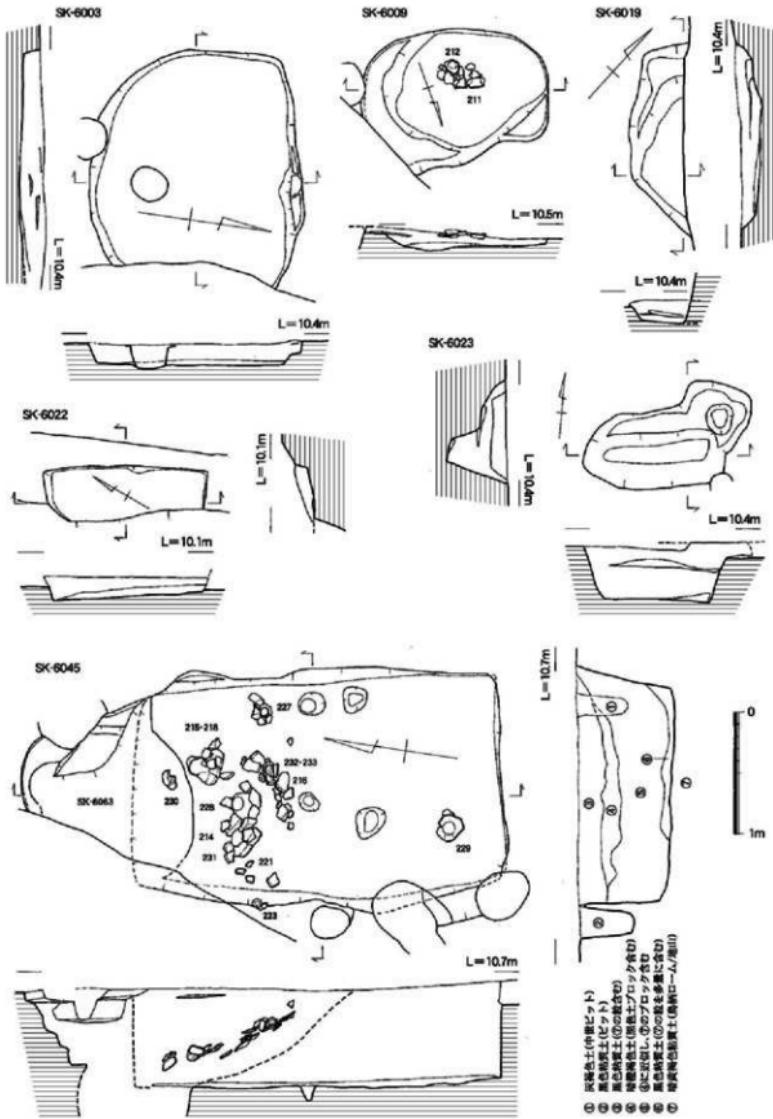


Fig.171 土坑SK-6003・6009・6019・6022・6023・6045実測図 (1/40)

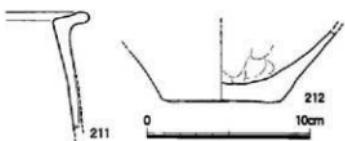


Fig.172 SK-6009出土遺物実測図 (1/3)

土坑SK-6045 (Fig.171, PL.24)

F区南半部に検出した。貯蔵穴SK-6063と重複するが、覆土が酷似するため検出時に切り合いを認識できず、底面まで掘削した後、土層観察によりSK-6063が後出の遺構と判断した。土層及び遺物の出土状況から、SK-6063の壁面が遺構覆土であったため崩壊して大きく口を開き、この崩壊坑に多量の土器が流入ないし投棄されたと考えられる。遺構図に示した点線は推定される崩壊ラインで、従って図示した土器の大半はSK-6063に伴うと考えられる。

SK-6045は整った箱形の掘り方を持つ遺構で、長方形プランで長3m以上、幅2.0m、深さ80cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。土坑としたが、貯蔵穴の可能性があろう。

SK-6045出土遺物 (Fig.173・174・193・194, PL.27)

弥生土器、石器（石臼・石斧・砥石・黒曜石）がコンテナ3箱出土した。大半はSK-6063に伴う可能性が強い。ただし229はこの遺構の底面から出土した。以下の遺物は全て弥生土器である。

213は甕の口縁で、端部に高い突帯を貼付し、板小口又は貝殻で密に刻目を入れる。口縁上面は平坦面をなす。外面は貝殻条痕の後、細かい横刷毛目調整。内面は器面剥落、暗橙褐色～黒色を呈し、径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。214は甕で底部を欠く。如意形口縁で、口唇全面にヘラで大きく刻目を入れる。外面は板状の工具でナデ調整し、口縁下は指押さえ。内面は剥落するが指押さえ痕が残り、ナデ調整か。外面は口縁が淡褐色、胴中位が褐色、下位が暗褐色（赤変）へと変わり、中～下位にススが付着する。内面は上位が淡灰褐色、下位が淡褐色に変わり炭化物が付着する。煮炊きに使用したことによく示す。石英・雲母・カクセン石が混ざった細砂粒を多量に含み、焼成良好。215は甕で、考古学的完形。如意形口縁で強く反り、胴が若干張る。口唇下半を中心にヘラで浅く刻目を施す。器表面の残りが悪いが、外面はヘラ状工具でナデ、内面はナデ調整で、口縁内面に横方向のヘラナデにより軽い稜を生じる。外底ヘラナデ。外面淡橙褐色～黒褐色、内面橙褐色を呈し、石英・雲母混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。外底付近は赤変して胴部にススが付着し、内底に炭化物の痕跡が残る。216・217は接合しないが同一個体の甕である。口縁は内面の指押さえにより強く外反し不鮮明な稜が入る。外面は器面が剥落し口唇の刻目は図化不能。内面は板又はヘラによるナデ調整とみられ段差が残る。淡黄褐色～褐～黒褐色を呈し、胎土に雲母など1～2mmの砂粒を多く含み、焼成不良。218は甕でほぼ完存する。口縁は短く外反し、胴が張る。口唇の刻目はヘラで密に施すが、ほとんど剥落する。外面全体に縦の粗刷毛目を施し、頸部を異なる刷毛目具又は貝殻で横にナデる。外底はヘラナデ。内面は器表面剥落する。外面上半が黒褐色、下半が淡橙褐色を呈すが、使用による色調の変化であろう。粗大石英粒・雲母・カクセン石を僅かに、細砂粒を多量に含み、焼成良好。219は甕で、口縁が断面三角形を呈し、外端は摩滅する。口縁直下は指押さえし、縁に刷毛目を加え、頸部に沈線1条を回す。内面ナデ調整。外面黒褐色、内面暗橙褐色、径1～2mmの砂粒を多量、径3mmの粗砂、雲母微粒を少量含み、焼成不良。220は甕の底部で、器表面が剥落するが、内面に炭化物が認められる。径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。外底が赤変する。221も甕の底部で、器表面が

土坑SK-6023 (Fig.171)

F区北半部に検出した。土坑SK-6003の東に位置する。東西に長い楕円形プランで、東にピットが隣接する。長11m、幅0.65m。南に一段深く、深さ50cmである。

土器小片と黒曜石が少量出土した。図化できない。

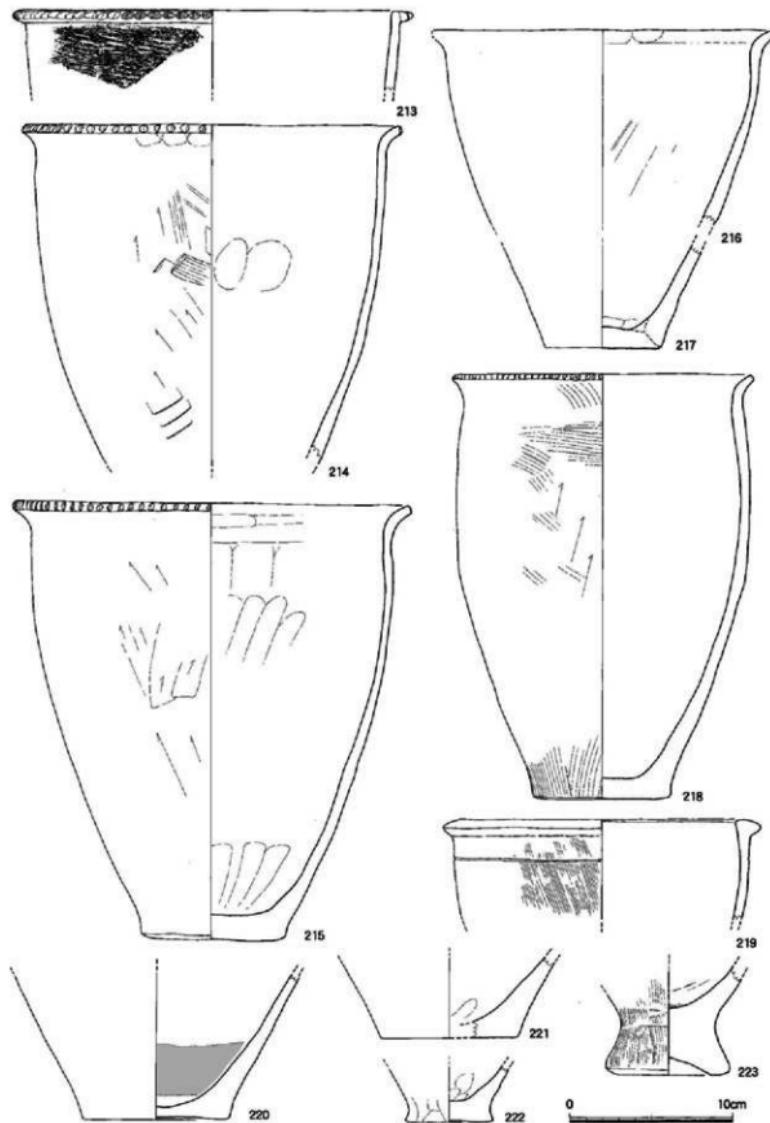


Fig.173 SK-6045出土遺物実測図 I (1/3)

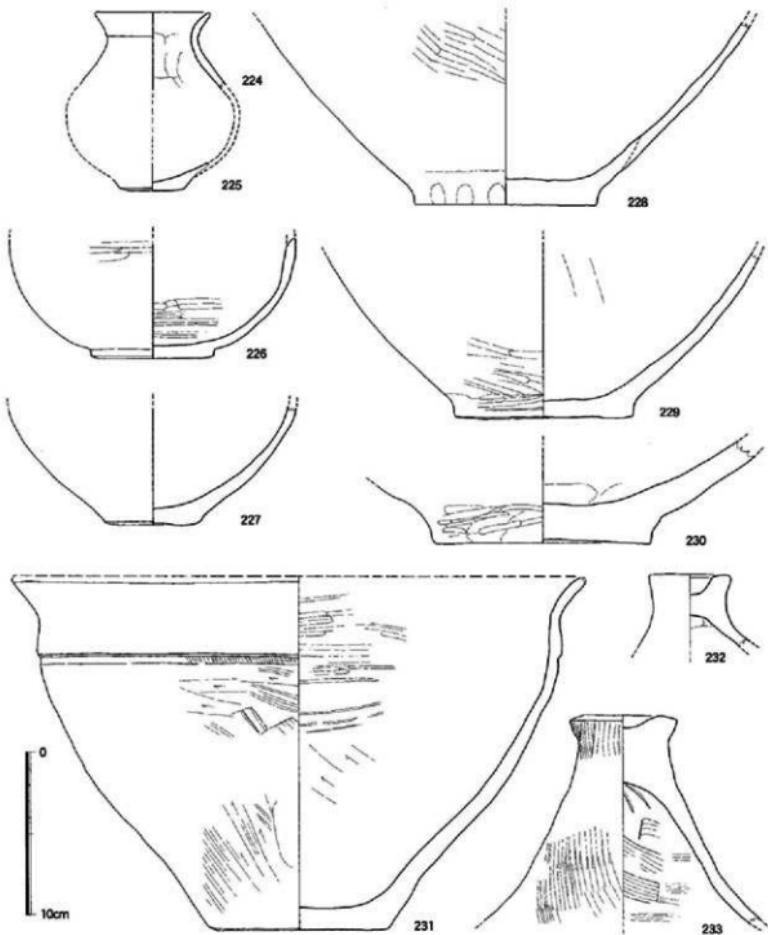


Fig.174 SK-6045出土遺物実測図II (1/3)

剥落するが内底に指押さえ痕が残り、内外面ナデ調整か。使用により外面暗橙色、内面黒褐色を呈する。石英粗粒・雲母粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。222は小形甕の底部か。内外とも指頭によるナデ調整だが粗雑。黒～暗橙色で、石英粗大粒、径1～2mmの砂粒を多く含み、焼成不良。223は甕の底部で、脚が外へ踏ん張る。外面縦刷毛目、内面は板によるナデ調整。外面黒褐色、内面はススが付着し黒色をなす。細砂粒を多量に含み、焼成良好。二次加熱による細かいヒビが入る。

224・225は小壺の口縁と底で、接合しないが同一個体である。器表面が完全に剥落し、かつローリ

ングが著しい。口縁は外反し、外面に段を持つ。肩の内外に段の痕跡が残る。内面は指押さえか。淡灰褐色で、胎土精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。226は壺の下半で、接合しない胴部を図上で合成しており図の傾きは不確実。器面の残りが悪いが、内外とも横のヘラ研磨。淡黄褐色～暗褐色で、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。227は壺の底部で、器表面は剥落する。石英粗粒混じりの砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好。228は壺の底部で、粘土帯の剥離痕からみて外傾接合であろう。底部まわりを指頭整形し、胴にヘラ研磨を施す。内面は器表面が剥落する。淡橙褐色～淡橙色を呈し、石英粗粒・雲母粒・暗赤色粒・細砂粒を少量含み、焼成不良。229は壺の底部で、指押さえにより底部整形する。胴外面を下へ向かってヘラ研磨し、下端に粘土が垂れる。外底はヘラ削り後ナデ調整。内面は剥落が著しいが、ヘラナデによる段差が残る。外面赤褐色、内面赤褐色～暗褐色を呈し、胎土に径2mm以下の砂粒を多く含むほか、径2～5mmの粗砂粒、雲母粒が混じる。焼成不良。230は大形壺の底部。底部外周を指押さえ整形し、胴外面をヘラ研磨する。内底に指押さえ痕が残るが摩滅が著しい。外面橙色、内面淡黄灰色。胎土に石英など径2mm以下の砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。

231は大形の鉢である。口縁部を大きく欠き、口唇は剥落する。如意形口縁で、頸部に沈線1条を巡らせる。沈線は板小口を上から下に押圧して施す。上半は内外ともヘラ研磨で、下半は外面が指押さえ後に斜刷毛目、内面がナデ調整。外面暗橙褐色～橙褐色、内面黒褐色～褐色を呈し、胎土に石英・雲母などの径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。232は蓋で、器面剥落して調整不明。多量の細砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。233も蓋である。外面とも粗い刷毛目調整で、外面は縱、内面は横に施す。内頂部はヘラ整形。橙褐色～黒褐色で、雲母など径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好。

図示した土器の大半は、この造構を切るSK-6063（弥生時代前期後葉・板付IIb式）に投棄ないし流入したものと考えられる。よってSK-6045はそれ以前に置かれる。

土坑SK-6046 (Fig.175)

F区南半部に検出した。調査区南東隅に位置する。西側を中世溝SD-6031に切られる。南北に長い不整隅丸長方形プランで、長2.4m、幅1.6m以上。深さ10cmで、底面は平坦である。

SK-6046出土遺物 (Fig.176・194)

弥生土器、石器（扁平片刃石斧・黒曜石）が少量出土した。

234は弥生土器の如意形口縁甕で、ローリングが著しい。内面ナデ、口縁横ナデの他は調整不明である。黒～黄褐色を呈し、胎土に径2mm以下の砂粒と雲母微粒を少量含み、焼成不良。小片のため図の傾きは不確実である。

土坑SK-6048 (Fig.175, PL.25)

F区南半部に検出した。北東隅に位置し、中世土坑SK-6050等に切られる。南側は擾乱坑に破壊される。東西にやや長い隅丸方形プランで、東西2.6m、南北2.2m以上。断面逆台形で、底面は北半が一段高く、深さ30cm、南半は深さ60cmで、ともに平坦である。貯蔵穴の可能性もある。

SK-6048出土遺物 (Fig.176)

弥生土器、黒曜石が少量出土し、高麗青磁1点が中世造構又は調査区壁から混入している。

235は弥生土器甕の底部片で、ローリングを受けている。外面縱刷毛目、内面ナデ調整。黒～黄褐色で、胎土に雲母・カクセン石混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。236は弥生土器高环の脚で、环との接合部に三角突帯を貼付する。外面摩滅、内面ヘラ状工具によるナデ調整。淡褐色～淡橙褐色、胎土に雲母微粒・暗赤色粒、径2mm以下の砂粒多量を含み、焼成不良。

土坑SK-6051 (Fig.175)

F区南半部の北壁際に検出した。主要部分は調査区外にある。長径2.0mほどの椭円形プランとなる。西端と中央が浅く窪んでおり、最深30cmである。

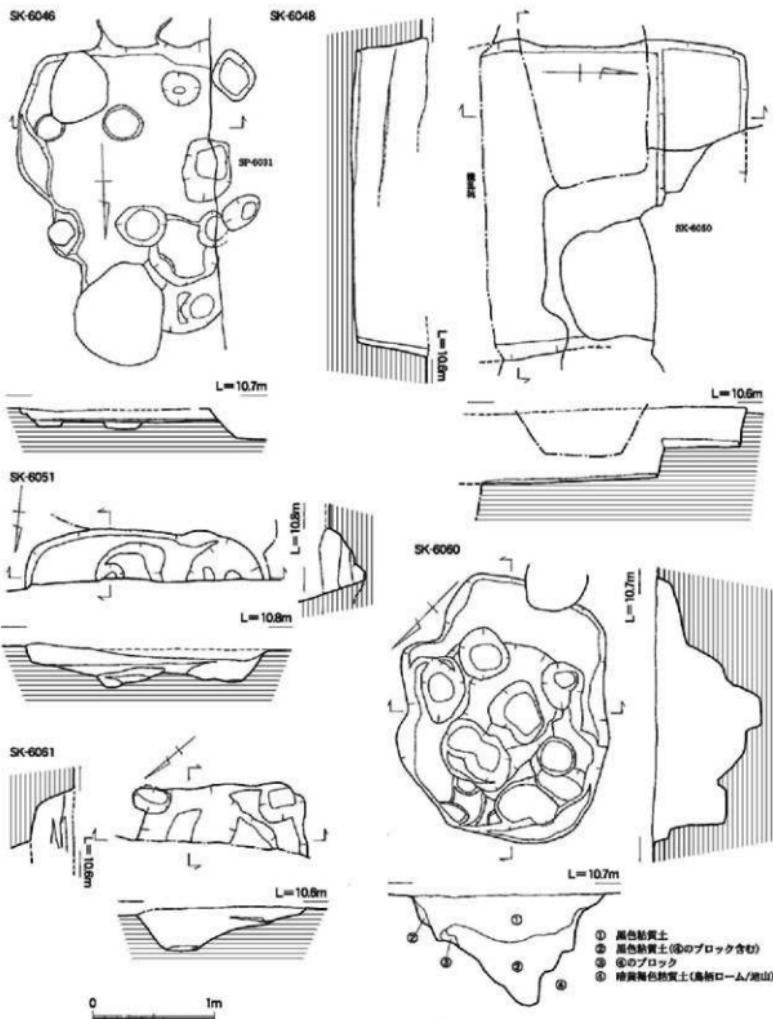


Fig.175 土坑SK-6046・6048・6051・6060・6061実測図 (1/40)

SK-6051出土遺物 (Fig.176)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

237は壺の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実である。口線上端に突帯を貼付しヘラ刻目を入れるが、ヘラの勢いが過ぎて突帯下に刺突を生じている。外面～口縁内を横ナデ、内面ナデ調整。暗橙色を呈し、白色粗粒・雲母微粒・細砂粒を少量含むが精良である。焼成良好。238も壺で、口縁部小片のため図の傾きは不確実である。如意形で口唇にヘラ刻目を施す。口縁横ナデ後、外面に継刷毛目、内面ナデ調整。黒～褐色で、多量の細砂粒のほか雲母粒を含み、焼成不良。239は壺の底部で厚い。外面継刷毛目、内面ナデ調整。外底に木葉压痕が残る。橙褐～暗橙褐色で、石英粗粒・雲母粒・暗赤色粒、及び多量の細砂粒を含み、焼成不良。

240は壺の底部で、著しいローリングにより丸まっており、本来の器形ではない。胎土は精良、焼成不良。

弥生時代前期後葉を前後する時期の造構であろう。

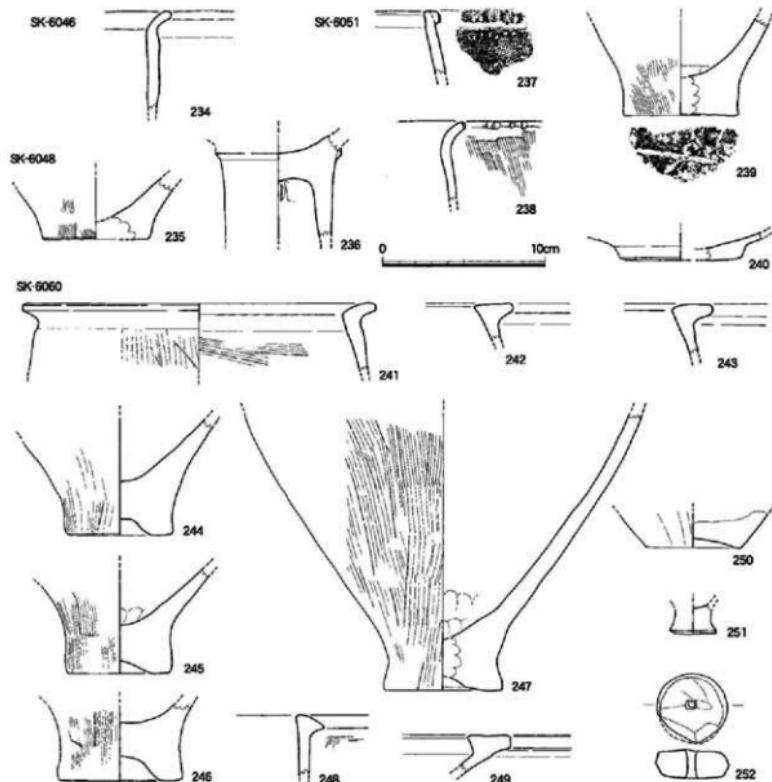


Fig.176 SK-6046・6048・6051・6060出土遺物実測図 (1/3)

土坑SK-6060 (Fig.175)

F区南半の南東部に位置する。不整楕円形プランの土坑で、長径2.2m、短径1.6m。すり鉢状に窪み、深さ90cm。底面には小ビット多数を検出したが、土層断面では土坑の上位から切り込むビットは認められない。ただし、周辺には小ビットが集中する。

SK-6060出土遺物 (Fig.176・193・195)

弥生土器、土製品、石器（石窓丁・砥石・黒曜石）がコンテナ1箱出土した。図示した遺物のうち、252は土製品、他は弥生土器である。

241は壺の口縁部で、逆「L」字形をなし上面内傾する。内外刷毛目で、口縁横ナデ。暗橙褐色～暗褐色で、胎土に雲母などの細砂粒を多く含み、焼成良好。242・243も壺の口縁部で、逆「L」字形を呈するが、小片のため図の傾きは不確実。内面ナデ、口縁横ナデ調整。黒～暗褐色ないし暗橙褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。242は内外に炭化物が付着する。244～247は壺の底部で、脚が付く。外面縦刷毛目、内面ナデ調整で、内底に指押さえ痕の残るものが多い。244は橙褐色～淡黄褐色、雲母混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。245は外面暗橙褐色、内面黒色。雲母混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。246は橙褐色、石英粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。247は外面淡黄褐色～褐色、内面灰褐色～黒色、石英粗粒・雲母細粒を僅かに、細砂粒を多く含み、焼成不良。

248は壺の口縁部で、小片のため傾きは不確実。直立し、端部が断面三角形をなす。外面縦刷毛目以外は調整不明。淡橙褐色で、雲母微粒などの細砂粒を多量に含み、焼成良好。249は壺又は高壺の口縁部で、鋤先形をなす。ヘラ研磨調整か。暗橙褐色～褐色、雲母などの細砂粒を多く含み、焼成不良。250は壺の底部で、外底が窪む。外面ヘラ研磨。橙～灰褐色で、雲母など細砂粒を多く含み、焼成不良。

251はミニチュア土器の脚で、調整痕は残らない。胎土精良、焼成不良。252は土製紡錘車で、孔が中心を外れる。ナデ調整。暗褐色で、粗大石英粒など砂粒を多く含み、焼成不良。

弥生時代中期前葉の遺構であろう。

土坑SK-6061 (Fig.175)

F区南半部に検出した。調査区南東部、土坑SK-6060の東側に位置する。攢乱により西半を失う。現状で長1.4mの楕円形プランである。底面は北側に深いすり鉢状をなし、深さ35cmである。

弥生土器、黒曜石が少量出土したが、図化できる遺物はない。

土坑SK-6064 (Fig.177)

F区南半の南東付近に位置し、竪穴住居SC-6032に切られる。南北に長い不整な隅丸長方形プランで、長径3.1m、短径1.5m。断面逆台形を呈し、深さ40cm。底面は平坦で、南へ若干下る。

SK-6064出土遺物 (Fig.178・194)

弥生土器、石器（磨製石斧・黒曜石）が少量ある。以下は全て弥生土器である。

253は如意形口縁壺の小片で、口唇に刻目があるが剥げ落ちて不明瞭。内面ナデ調整。暗橙褐色～黒褐色。雲母など径2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。254は断面三角形口縁の壺。器面剥落して調整不明。淡黄褐色～淡橙褐色で、雲母など径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好。

255は壺の肩部でローリングを受ける。外面にヘラ研磨後、横沈線と複線山形文を施文する。内面ヘラナデ。黒色、胎土精良で雲母微粒を含み、焼成不良。256は壺の底部でローリングを受ける。外面ヘラ研磨、内面ナデ。黒～暗褐色で、雲母など細砂粒を多量に含み、焼成不良。

弥生時代中期初頭の遺構であろう。

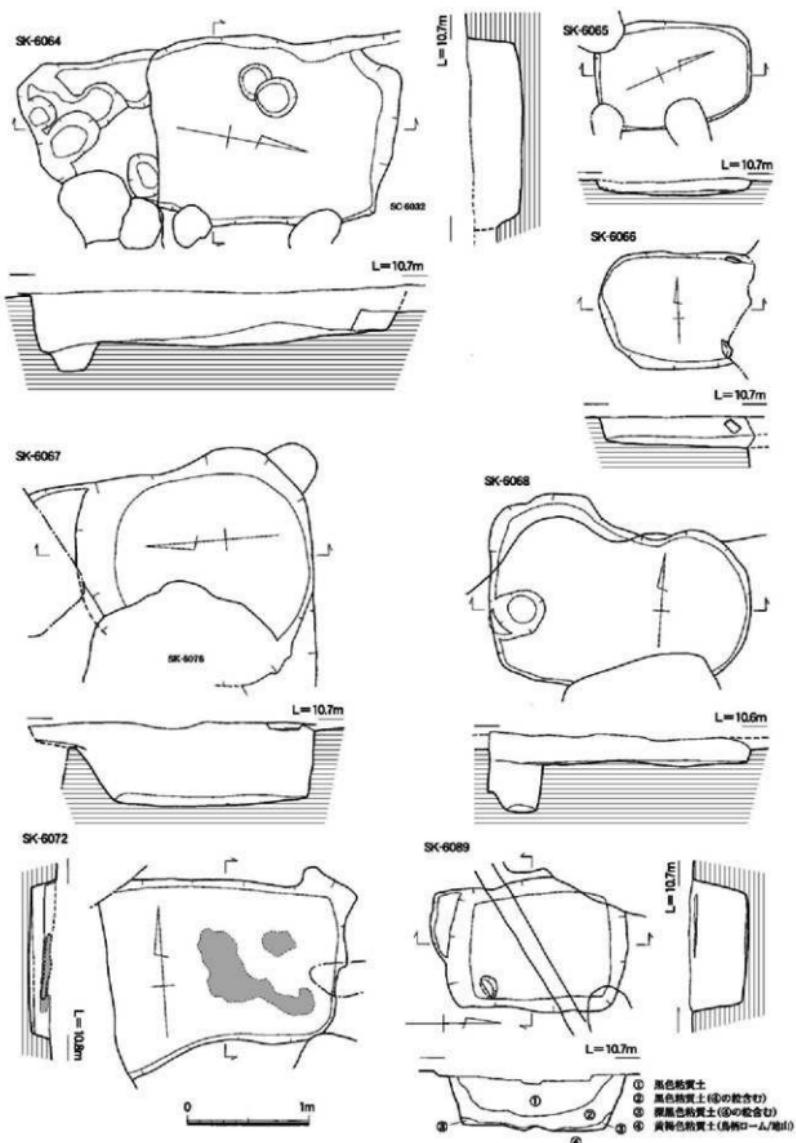


Fig.177 土坑SK-6064~6068・6072・6089実測図 (1/40)

土坑SK-6065 (Fig.177)

F区南半部に検出した。竪穴住居SC-6036の南西に重複し、これを切る。隅丸長方形に近いプランで、長径1.3m、短径0.9m。深さ13cmと浅い。底面は平坦である。

土坑SK-6065出土遺物 (Fig.178)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。

257は弥生土器大形壺の口縁部片である。内外面に粘土帶貼り付けによるあまい段がある。器表面は一枚剥げ落ち、調整・色調は不明。石英粗粒の混ざった細砂粒を多量に含み、焼成良好である。板付IIb式段階か。

土坑SK-6066 (Fig.177)

F区南半部の北西よりに検出した。貯蔵穴SK-6076の北に接する。東側は擅乱坑により失われる。椭円形プランとみられ、長径1.3m以上、短径0.95m。断面逆台形をなし、深さ25cmを測る。底面は平坦である。

SK-6066出土遺物 (Fig.178・194)

弥生土器、石器（磨石・黒曜石）が少量出土した。

258は壺の口縁部で、激しいローリングを受ける。口縁外面は稜をなす。胎土精良で、焼成良好。口径12.0cm。板付II式の範疇にあろう。

土坑SK-6067 (Fig.177)

F区南半部に検出した。貯蔵穴SK-6076の東辺を切るが、検出時には切り合いを把握していない。円形プランをなし、径2m前後か。断面逆台形をなし、南壁は直立気味である。深さ60cmで、底面は平坦である。

SK-6067出土遺物 (Fig.178・193~195、PL.27)

弥生土器、石器（石鎌・磨石・砥石・黒曜石）がコンテナ1箱出土した。以下は全て弥生土器。

259は壺の口縁部で、図の傾きは不確実である。口唇と頸部に2条の三角突帯を貼付する。突帯頂部が摩滅しており、頸部突帯に刻目が残るが施文原体は不明である。調整痕は残らない。径1~2mmの砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。260も壺で、口縁が内傾する。口縁端部に突帯を貼付して断面三角形にし、頸部にも突帯1条を巡らせる。刻目はない。外面斜刷毛目で、口縁と突帯は横ナデ。内面ナデ調整。橙褐色で、石英粗粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成良好。261は逆「L」字形口縁の壺の小片で、摩滅が著しいが横ナデ調整。橙褐色で、雲母混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。262は壺の底部で、断面台形に下端が張り出す。調整不明で、橙色。径1~2mmの砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。263も断面台形の底部で、ローリングが著しく調整不明。胎土は精良で石英粗粒・雲母粒を僅かに含み、焼成不良。

264は鉢の口縁部か。小片のため図の傾きは不確実である。口縁外面に粘土を貼り付けて段とし、端部は外反する。内外面ともヘラ研磨を施す。褐~暗橙色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好である。

265は壺の口縁部で、器表面が剥落するが、口縁内外面に薄く粘土を貼り付けて段にしており、外面の剥落部分に斜刷毛目がのぞく。口縁直下には指押さえ痕が残る。粗砂粒・暗赤色粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成良好。266も壺で約3/4周が残る。他に胴部片があるが接合しない。口縁は外反して端部でやや垂れる。頸部に三角突帯を貼付し横ナデ調整。外面から口縁内まで丹塗磨研を施す。頸部外

面には縦刷毛目が残る。内面ナデ調整で、指押さえ痕が残る。丹は暗赤褐色で、素地は橙褐色、内面は黒色をなす。雲母など径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。267は壺の底部で、外周を指押さえで整形し、横にヘラ研磨する。内面は器面剥落。暗橙褐色で、石英粗粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成良好。268も壺の底部で、外面ヘラ研磨、内器面剥落。淡灰橙～淡橙色で、石英粗粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成良好。

弥生時代中期前葉の遺構とみられる。前期の土器は貯蔵穴SK-6076に伴うものであろう。

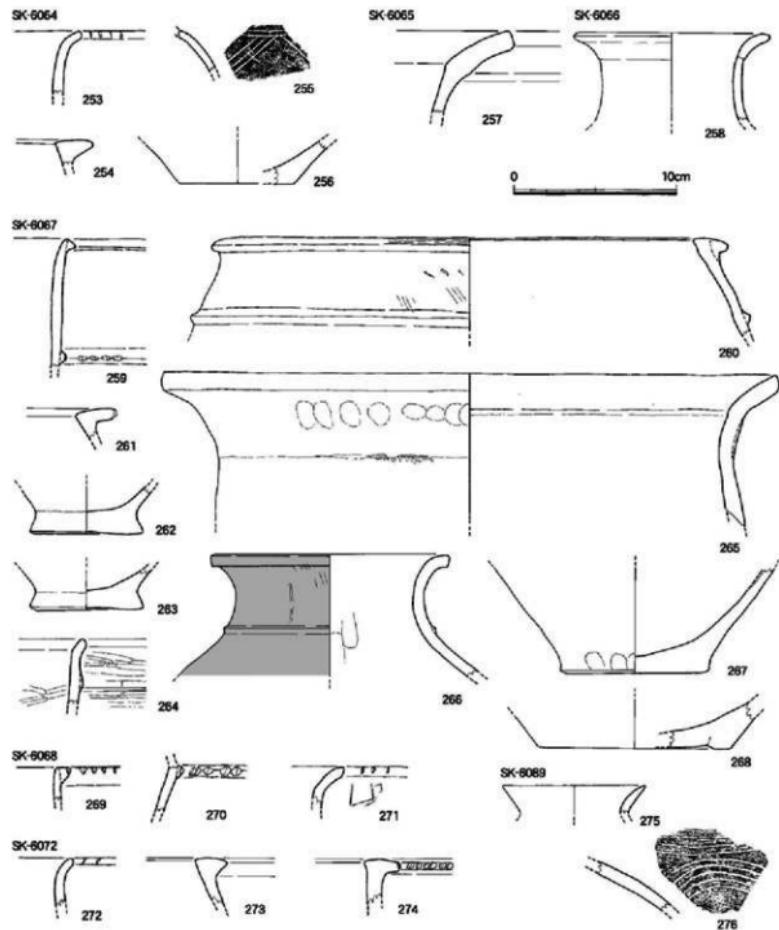


Fig.178 SK-6064～6068・6072・6089出土遺物実測図（1/3）

土坑SK-6068 (Fig.177)

F区南部の東壁際に位置する。中世溝SD-6031の下層に検出した。平面形は東西に長い瓢箪形を呈し、径2.1m×1.6mである。断面逆台形をなし、深さ20cm。底面は平坦で、西端に深さ40cmのピットが一つある。

土坑SK-6068出土遺物 (Fig.178)

弥生土器、石器（石斧・黒曜石）が少量出土。掲載した遺物は弥生土器である。

269は甕の口縁部小片で、図の傾きは不確実である。端部に刻目突帯を貼付しており、ローリングが著しいがヘラ刻みか。砂粒を少量含み、焼成良好。270は屈曲部に刻目突帯を貼り付ける甕で、著しいローリングを受けた小片のため図の天地と傾きは不確実。砂粒を多く含み、焼成良好。271は如意形口縁の甕で、器面剥落する。口唇にヘラで浅く刻目を入れる。外面に複数の沈線があるが、意図的なものであろうか。雲母など細砂粒を多く含み、焼成不良。

弥生時代前期の遺構であろう。

土坑SK-6072 (Fig.177)

F区南部に検出した。竪穴住居SC-6036と土坑SK-6067に切られる。東西に長い不整な隅丸長方形プランで、長径2.0m以上、短径1.3mを測る。断面逆台形で深さ20cm。底面は平坦で、15cmほど浮いて粘土塊が出土した。

土坑SK-6072出土遺物 (Fig.178)

弥生土器、黒曜石が少量ある。図示した遺物は全て弥生土器である。

272は如意形口縁の甕で、口縁部小片のため図の傾きは不確実である。口唇に刻目の痕跡があるが、器面が剥落して不明瞭。調整も不明。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。273は甕の口縁部小片で、傾きは不確実。断面三角形を呈し、器面は剥落する。径3mmまでの砂粒を少量含み、焼成不良。274も甕で、小片のため傾きは不確実である。口縁端部に高めの突帯を貼付し、ヘラで刻目を入れる。横ナデ調整。淡黄褐色で、石英粗粒・細砂・雲母を含み、焼成良好。

弥生時代前中期頃の遺構と思われる。

土坑SK-6075 (Fig.165)

遺構図は貯蔵穴SK-6076の項 (P158) を参照。SK-6076の西に隣接し、これに切られる。隅丸方形プランで、径0.8m。断面逆台形で、深さ60~80cm。底面が東へ傾斜する。

弥生土器、黒曜石などが少量出土した。Fig.194に石器を図示した。弥生時代の遺構であろう。

土坑SK-6089 (Fig.177)

F区南部に検出した。竪穴住居SC-6036・貯蔵穴SK-6073に切られる。隅丸長方形の整ったプランで、長1.5m、幅1.1mを測る。断面逆台形を呈し、深さ45cmで、底面は平坦である。

土坑SK-6089出土遺物 (Fig.178)

弥生土器、石器（黒曜石・安山岩）が少量出土した。図はいずれも弥生土器である。

275は小壺の口縁で、摩滅が著しい。外面に段が付くか。胎土精良で、焼成良好。276は壺の肩部小片で、外面をヘラ研磨して4条の並行線と重弧文を描く。黒褐色で、雲母や粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

弥生時代前期の遺構であろう。

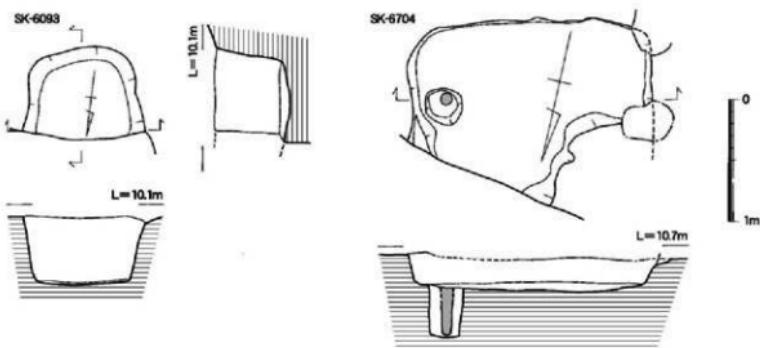


Fig.179 土坑SK-6093・6704実測図 (1/40)

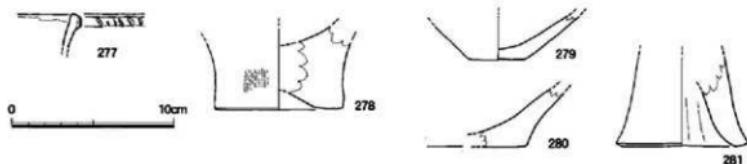


Fig.180 SK-6704出土遺物実測図 (1/3)

土坑SK-6093 (Fig.179)

F区南半部に検出した。調査区北東隅の中世土坑SK-6050の下位に検出し、北半はこれに切られる。隅丸方形プランで、南北0.8m以上、東西1.0mである。断面逆台形をなし、深さ60cmが残るが、検出面からの深さは1mを超える。底面は平坦である。

弥生土器、黒曜石が数点出土したが、図示できるものはない。弥生時代の遺構とみられる。

土坑SK-6704 (Fig.179)

F区東に検出した。北壁際に位置し、調査区外へ伸びる。平面形はいびつな「L」字形を呈する。南北長1.5m以上、東西幅2.0m。断面逆台形で、深さ30cm。底面は平坦で、東端に柱痕跡を持つピットがひとつある。

SK-6704出土遺物 (Fig.180)

弥生土器、黒曜石少量のほか、須恵器1点が混入する。掲載した遺物は全て弥生土器である。

277は甕の口縁部小片で、端部に低い突帯を貼付しつつ浅く密に刻目を入れる。横ナデし、口縁内端に粘土が少し垂れる。赤橙色で、雲母混じりの砂粒が多く含み、焼成不良。278は甕の底脚で、ローリングを受ける。外面縦刷毛目、内面ナデ。淡橙褐色で、多量の細砂粒、石英粗粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成不良。

279は壺の底部で、小さい平底。器面が剥落するが、外面ヘラ研磨か。黒褐色、径4mmまでの粗~細砂粒を多量、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。280も壺の底部で小片。外面ヘラ研磨か。淡橙褐色、径4mmまでの粗~細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。281は器台の底部で、ローリングを受けた。内面に指頭による整形痕が残る。橙色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。

須恵器甕片1点は調査区壁からの混入であろう。弥生時代中期の遺構と考えられる。

(8) その他の遺構

性格不明遺構SX-6041 (Fig.181)

F区南半部に検出した。調査区の中央やや東寄りに位置する。堅穴住居SC-6033（弥生時代中期）を切り、SC-6032（古墳時代前期）に切られる。半環状のプランをなす細長い土坑で、外径4m、内径2.5mの円を描く。幅は0.6~1.2mで、断面逆台形をなすが浅く、底面まで10cm前後である。底面は平坦で、ピットをいくつか検出したが、周辺にもピットが多数分布しており、この遺構に伴うか否か不明である。

SX-6041出土遺物 (Fig.182・193・195)

弥生土器、古式土師器、石器（石窓丁・砥石・黒曜石）が少量出土した。

282~284は弥生土器甌の口縁部で、逆「L」字形をなす。いずれも小片のため図の傾きは不確実である。282は剥落が著しく、調整痕は残らない。暗橙~淡橙褐色で、雲母粒・暗赤色粒などの細砂量を多量に含み、焼成不良。283は外面丹塗りで横ナデ痕が残る。淡橙褐色・細砂粒・カクセン石を少量含み、焼成不良。284は頸部に三角突帯を貼付する。器面が剥落して調整不明。橙褐色で、雲母などの細砂粒を多量に含み、焼成不良。285は弥生土器甌の底部片で、調整痕は残らない。橙褐色をなし、胎土に雲母などの細砂粒を多量に含み、焼成不良。286は弥生土器甌の底部小片で、調整不明。淡橙褐色で、径3mmの粗大石英粒など砂粒が多く胎土に含まれ、焼成良好。

287は古式土師器甌で、口縁が外反し、頸部内面に稜が入る。器表面は一枚剥落し、調整・色調は不明。胎土に径3mm前後の粗砂粒と細砂粒を多く含み、焼成不良である。

古式土師器をSC-6032等からの混入品とみることもできる。弥生時代中期前葉、もしくは古墳時代前期の遺構である。

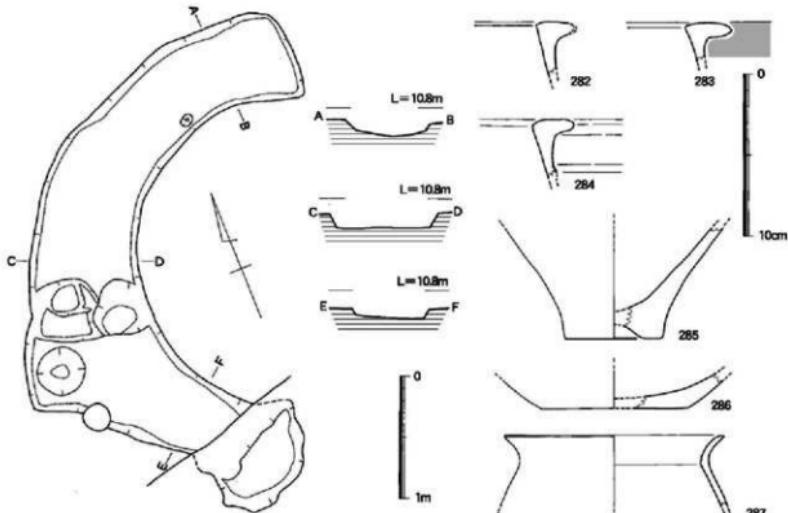


Fig.181 性格不明遺構SX-6041実測図 (1/40)

Fig.182 SX-6041出土遺物実測図 (1/3)

3. 古代の遺構と遺物

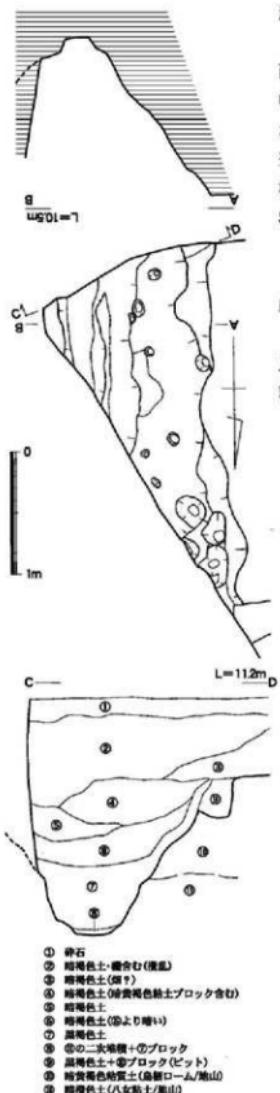


Fig.183 溝SD-6701実測図 (1/40)

溝状遺構SD-6701 (Fig.183, PL.25)

F区東の南東隅に検出した。東に向かって急角度で落ち込み、底面は幅30cmほどの平坦面をなす。対面の立ち上がりを確認しており、幅2.5m前後、深さ1.3mの断面「V」字形溝であろう。暗褐色の覆土から中世溝と予想したが、出土遺物は奈良時代までに限られる。調査範囲が狭いが、主軸はほぼ磁北を指す。南隣のB区でも古代溝を検出しており、これに連続しよう。

SD-6701出土遺物 (Fig.184・193)

弥生土器、須恵器、古代土器器、石器（砥石など）が少量出土。

288は須恵器蓋の小片である。濃灰青色で、砂粒を僅かに含み、焼成やや不良。上面に降灰を被る。289も須恵器蓋の小片で、歪みがあり図の傾きは不確実。赤味のある淡灰青色で、砂粒が多く、焼成不良。290は須恵器蓋で、口縁端部を下方へ折り曲げる。灰青色で、砂粒は僅か、焼成良好。291は須恵器高台付壺の底部片で、高台は細く

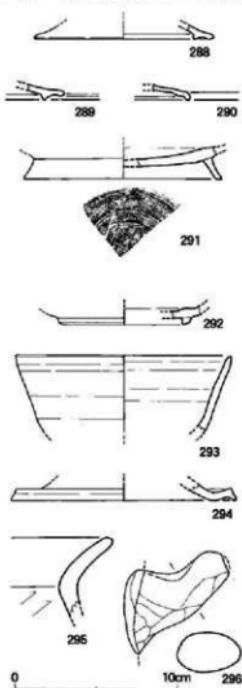


Fig.184 SD-6701出土遺物実測図(1/3)

高い。内底をナテ調整し、外底ヘラ切り。赤味のある暗灰色で、細い白色砂粒を含み精良、焼成不良。292も須恵器高台付壺の底部で、高台は低く内寄りにある。灰青色だが高台のみ淡く、異なる素地土を用いる。胎土精良、焼成良好。293は須恵器壺。灰青色、径2mm粗粒を含む細砂が多く、焼成良好。294は須恵器高壺の脚か。横ナテ。灰黒～淡灰色で、細い白色砂粒を多く含み、焼成良好。

295は土師器甕の口縁部小片で、図の傾きは不確実。胴内面ヘラ削りで、他は器壁が摩滅。淡黄褐色で、径2mm以下の砂粒・雲母微粒を多く含み、焼成不良。296は土師器甕の把手で、接合部から剥落する。調整不明。径2mm砂粒のほか微砂粒・雲母粒を含むが精良、焼成良好。

7世紀後半代の土器が多いが、8世紀代の遺構であろう。

4. 中世の遺構と遺物 (Fig.185)

中世の遺構覆土は灰褐色で締まりがなく、弥生・古墳時代の遺構とは容易に区別し得る。台地縁辺に巡らせた環溝、陸橋を有する堀、その陸橋の中へと入っていく道路跡と考えられる2条の溝など、館を思わせる様相を呈する。しかしながら、溝以外には掘立柱建物1棟、柱列1条、浅い溝2条、土坑2基を確認したのみで、散漫に分布しており、遺構から出土する遺物は質量ともに貧相である。

(1)柱列・掘立柱建物

柱列SA-6096 (Fig.186)

F区南半部のはば中央に検出した。堅穴住居SC-6034・6035に切り込む柱穴列である。覆土の近似する柱穴5本が直線上に並び、うち4本がほぼ等間隔を取る。柱間は北から順に、282cm、269cm、286cmを測る。柱穴の平面形は円～楕円形で、径40～60cm、深さ35～65cmで、柱痕跡は認められない。主軸方位は磁北から9°西偏し、後述の掘立柱建物SB-6095とほぼ同方位であり、関連する遺構であろう。

各柱穴からは、弥生土器、中世土師器（环などの小片）が少量出土したが、実測可能な遺物はない。中世遺構だが、詳細時期の決め手はない。

掘立柱建物SB-6095 (Fig.186)

F区南半部の中央に検出した2間×3間の掘立柱建物である。梁行全長は391cmで、妻柱筋が通らず柱間は不等間隔。桁行の柱間は北から224cm、200cm、199cmで、全長623cmを測る。主軸方位は磁北から7°西偏する。柱穴掘方の平面形は円～楕円形で、径27～53cm、深さ27～63cmである。柱痕跡は認められない。

弥生土器、中世土師器（小皿・环などの小片）が少量出土したが、図化できる遺物はない。中世の建物であることは確実であるが、詳細な時期は決めがたい。

(2)溝状遺構 (Fig.185)

7条を確認した。うち、SD-6010は北側のC区SD-3001及びE区SD-5003へと連続し、更に北へ伸びていく長大な環溝と考えられ、南側は東へ折れてSD-6056及びG区SD-7004へと続き、更に東へ伸びていく。SD-6040はその南に設けられ

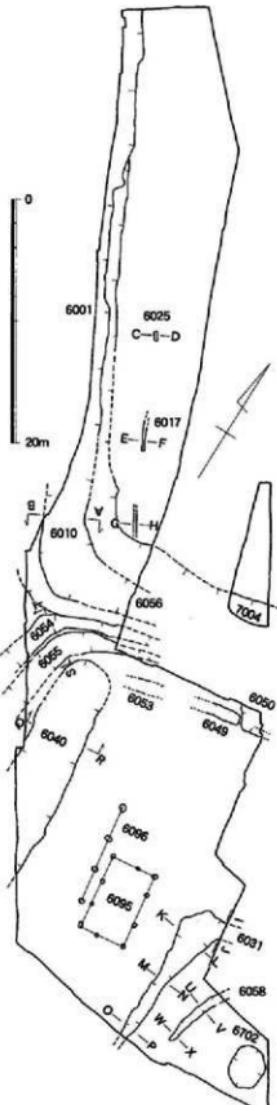


Fig.185 中世の遺構配置図 (1/400)

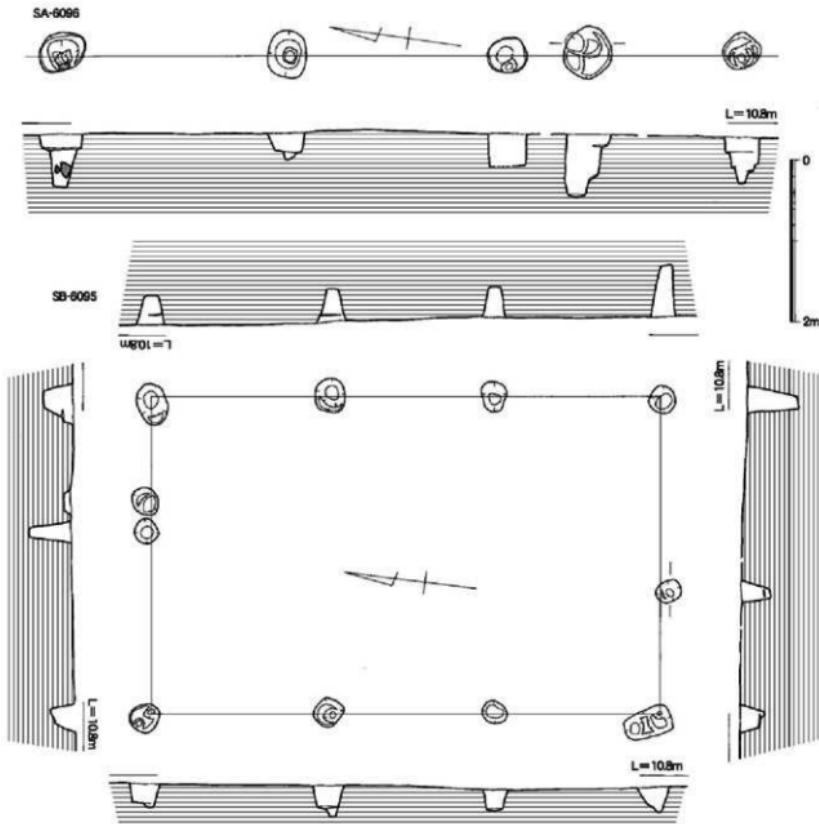


Fig.186 柱列SA-6096・掘立柱建物SB-6095実測図 (1/60)

た堀状の大形溝で、SD-6010の屈曲部との間に4.7m前後の陸橋を形成する。この陸橋に向かって、溝SD-5054・5055が南から東へ折れながら入っており、出入り口の道の痕跡と考えられる。

溝SD-6001 (Fig.185、PL.16)

F区北半部の西側は一段低い段丘面となっており、東側と2m前後の比高差があり、現在はブロック塀が築かれて段差となっている。土地の古の話によると、この段差の直下にはかつて細い道があり、その崖面には甕棺が露出していたという。この段差は、調査区内では西側へ向かって落ちる傾斜面SD-6001として現れ、西壁沿いに伸びている。下部を調査することはできなかったが、後述のSD-6010はこのSD-6001に沿って巡っている可能性が高いものと考えられる。

溝SD-6010 (6056) (Fig.185・187, PL.16・25)

F区北半部から南半部にかけて検出した。調査区内で「L」字形に屈曲して北、及び東へ伸びていく。北側は調査区西壁に入していくが、SD-6001からC区SD-3001及びE区SD-5003へ続くと考えられ、南北77m以上の規模となる。南側は東へ曲がり、擾乱坑を挟んでSD-6056に続き、更にG区で落ち際を確認した溝SD-7004へ続く。溝幅は2.1mであるが、実際は3mほど内側から傾斜が始まる。よって、土層図に見る深さは1.1mであるが、台地高所と溝底の比高差は2m弱に達する。横断面は「U」字形をなし、底面には2ヶ所ほど深い部分がある。覆土は暗褐色土が主体で、締まりがない。

SD-6010出土遺物 (Fig.188・193・194)

弥生土器、須恵器、中世土師器小皿・壺、東播系須恵器、中国産陶磁器（白磁、同安・竜泉窯系青磁、陶器）、高麗・朝鮮王朝陶磁器、瓦、石器（砥石など）、土製品、鉄滓などコンテナ3箱がある。

297～309は弥生土器である。297は甕の口縁部で、断面三角形に肥厚する。器面剥落。298・299は小兒甕棺の口縁部で、よく似るが別個体。頸部に突帯が巡る。調整不明。300は成人甕棺の口縁部で、上面に粘土帯を厚く貼付する。小片のため図の傾きは不確実。調整不明。細砂粒多量。301も成人甕棺で、図の傾きは不確実。口縁が「T」字形をなし、外端に刻目を入れるが、剥落して施文原体は不明。内面ナデ、他は調整不明。未図化分を含めて、甕棺は計5個体以上が出土している。302～304は甕底部で、断面台形に下端が張り出す。ローリングを受け調整不明。305も甕底部で外底が少し窪む。調整不明。306は甕の底脚で、分厚い。調整不明。307は甕の底部で、器面が剥落するが、外面ヘラ研磨であろう。308も甕底部で、外底が窪む。器表面が剥落する。309は大形鉢の口縁部小片で、傾きは不確実。外反する口縁外面に粘土帯を貼付して段をつくる。内外面ともヘラ研磨。以上の弥生土器は、周辺の弥生時代遺構から流入した遺物で、前期末から中期前葉頃までを含む。

310は須恵器蓋壺。外面回転ヘラ削りで、拓本の下端にヘラ記号もしくは文字？が見える。311は須恵器壺の小片で傾き不確実。以上の須恵器は古墳時代後期。

312は土師器壺で、底部糸切り離し。胎土精良で雲母粒を多量に含み、焼成良好。口径12.4cm、器高2.8cm。313は東播系須恵器鉢で、口縁部小片のため傾きは不確実。胎土精良、焼成良好。314は竜泉窯系青磁碗で、胎土は淡灰褐色の磁質で精良、淡青灰色の透明釉をかける。口径13.6cm。315は竜泉窯系青磁碗の底部片。淡灰褐色で、磁質・精良。淡オリーブ色白濁釉で外底は無釉。福建産。317は朝鮮灰青釉陶器の皿で、見込に砂目が残る。胎土は淡褐色で細く、白色と黒色の粒を多く含み、硬陶質。淡灰白色の不透明釉を全釉する。16世紀代。以上の中世土器は、12～13世紀代を中心とするものが多い。

318は平瓦小片で、側面を面取する。凸面は正格子叩き目。須恵質で焼成良好。319は土鍾である。

弥生時代前期から中世前半の土器が多く出土するが、16世紀代の溝と考えられる。

溝SD-6017・6025 (Fig.185・187, PL.16)

F区北半部の南半に検出した。幅20cm、深さ5cmほどの狭く浅い溝で、擾乱坑に寸断され、溝自体も途切れる部分があるが、長さ17mに伸びる。SD-6001と並行する。北からSD-6025、SD-6017とし、南端の溝は遺物を含まないため番号をふっていない。

SD-6017は土器片・黒曜石が数点、SD-6025は土器片2点が出土した。中世遺構であろう。

溝SD-6031 (Fig.185・187, PL.17)

F区南半部の南東隅で確認した浅い溝状の遺構である。周囲の遺構を全て切っている。南北に伸び

て北端で東に曲がる。両端とも調査区外へ伸びる。幅は南壁際で狭く1.0m、屈曲部で広くなり2.6m、東壁際で狭くなり1.4mである。深さ15~30cmで、屈曲部が最も深い。横断面は浅い「U」字形をなし、区画の内側（東側）の傾斜が強い。区画溝であろう。

SD-6031出土遺物 (Fig.188・193・195)

弥生土器、須恵器、中世土器小皿・壺（底部糸切り）、東播系須恵器、中国産陶磁器（白磁、竈

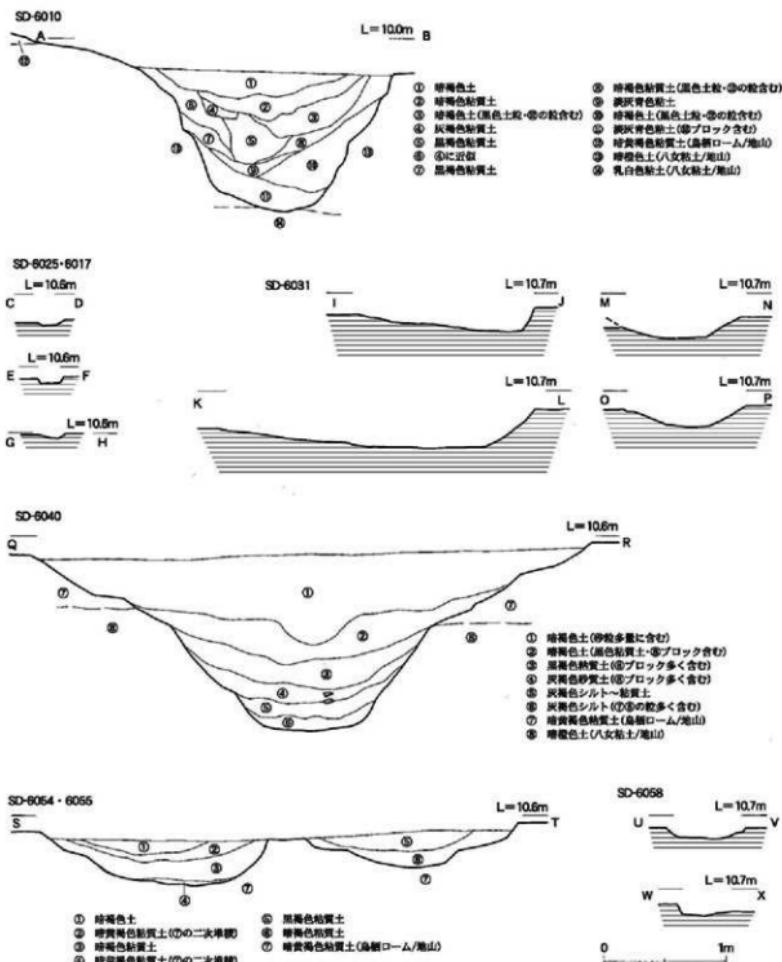


Fig.187 溝SD-6010・6017・6025・6031・6040・6054・6055・6058実測図 (1/40)

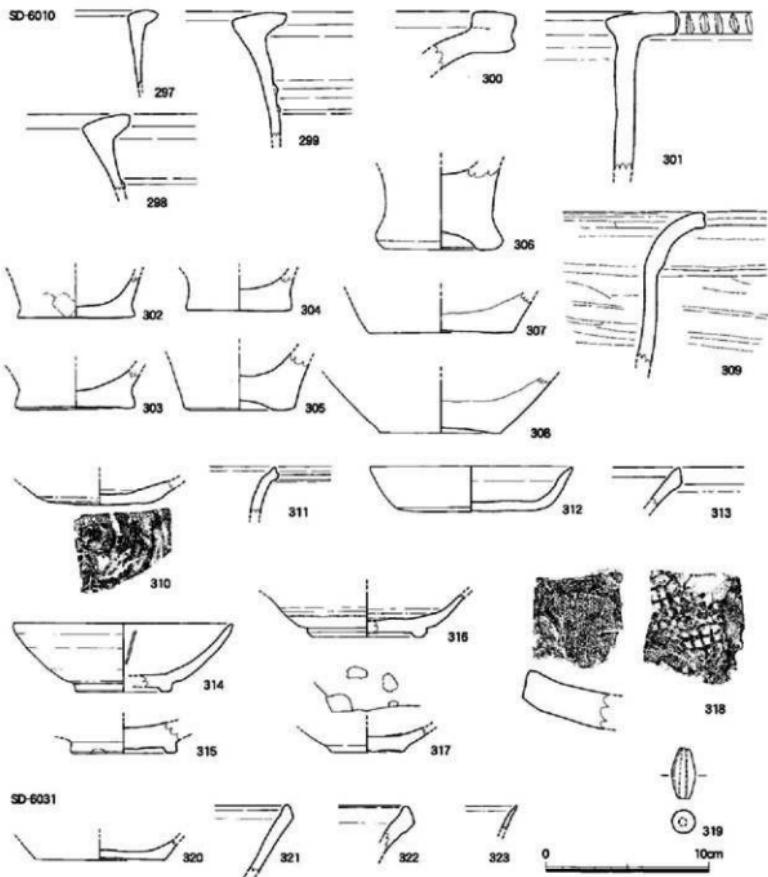


Fig.188 SD-6010・6031出土遺物実測図 (1/3)

泉窯系青磁、天目、陶器)、石器(砥石など)が少量出土した。

320は土師器坏の底部で、底部糸切りか。淡橙色を呈し、胎土精良、焼成良好。321・322はいずれも東播系須恵器鉢の口縁部で、横ナデ調整。灰青色、胎土に微細な白色砂粒を少量含み粗く、焼成良好。323は口禿白磁の碗又は皿で、白色で磁質・精良な胎土に、僅かに青味のある半透明釉をかける。以上の遺物は13~14世紀頃に位置付けられよう。

溝SD-6040 (Fig.185・187, PL.17・25)

F区南半部の西端に位置する堀状の溝である。南北方向に直線的に伸びる。北端は立ち上がり、SD

-6010のコーナーとの間に幅4.6m前後の陸橋を形成する。17mの長さを確認し、南側は調査区外へ伸びる。溝幅4.6mで、横断面は逆台形を呈し、壁の傾斜は比較的緩い。底面は平坦で、僅かに北へ傾斜する。覆土は暗褐色土が主で、下層にはシルト質の土が堆積している。

SD-6040出土遺物 (Fig.189・194~196)

弥生土器、須恵器、中世土師器小皿・壺(底部糸切り)、東播系須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器(白磁、越州窯・同安窯・竜泉窯系青磁、明代青花、天目、陶器)、瓦、土製品、石製品(砥石など)、鉄製品(鋸のため器種不明)、鐵滓がコンテナ5箱出土した。

324~326は土師器小皿で、底部糸切り。順に暗橙色、淡黄褐色、淡灰褐色を呈し、胎土精良で326を除き雲母粒を含み、焼成良好。順に口径6.4cm、7.2cm、7.4cm。327は土師器壺で底部糸切り。淡橙色で、砂粒を多く含み、焼成良好。口径11.4cm。328も土師器壺で、底部糸切りで板圧痕がある。淡橙褐色、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。口径12.4cm。329は土師器壺の把手である。多量の細砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。330は瓦質土器擂鉢で、外面指押さえ後刷毛目、内面刷毛目後6本一組のスリ目を入れる。淡乳白色で、径1~2mmの砂粒を多く含み、焼成不良。

331~333は口禿白磁碗である。331は口縁部で、白色で磁質・精良な胎土に、僅かに青味のある不透明釉をかける。332も口縁部で、白色の磁質精良な胎土に、乳白色不透明釉をかける。333は底部で、白色で磁質精良、水色を帯びた乳白色を全釉する。334は口禿白磁皿の底部。淡灰白色で磁質精良な胎土に、水色を帯びた半透明を全釉する。いずれも南宋末~元代の13~14世紀の製品である。

335~338は竜泉窯系青磁である。335は碗の底部で、淡褐色で磁質精良な胎土に、オリーブ色透明釉をかける。336も碗の底部で、淡灰白色で磁質・精良、淡青灰色不透明釉で、高台内は無釉。337は碗の口縁部。胎土は白色で磁質精良、淡青緑色透明釉を厚く施す。338は壺の口縁部で、淡灰白色で

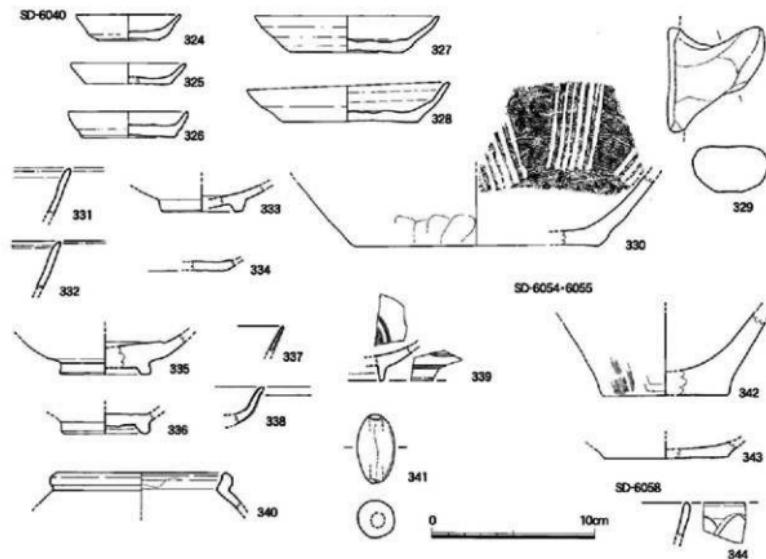


Fig.189 SD-6040・6054・6055・6058出土遺物実測図 (1/3)

磁質・精良、淡青灰色の半透明釉で、釉層が厚い。竜泉窯系青磁は335～337が南宋、338は明代とみられる。339は青花碗の底部で、明代の蓮子碗である。白色で磁質な胎土に白濁釉をかける。340は施釉陶器壺で、灰褐色を呈し、白色砂粒を僅かに含むが精良で硬陶質。釉は剥落する。341は土鍾である。13～14世紀頃の土器を多く含むが、16世紀代の堀と考えられる。

溝SD-6049・6053 (Fig.185)

F区南半部の北壁際に位置する。東西に伸びる溝状の遺構である。擾乱坑に寸断されており、西からSD-6053、SD-6049とした。SD-6049は東端で立ち上がるが、間を置いた土坑SK-6050内に溝様の窪みがあり、断続的に続くと考えられる。溝の幅は1.1m、横断面形は「U」字形を呈する。覆土は他の中世遺構とは異なり灰褐色を呈する。

SD-6049・6053とも土器小片、須恵器、石器（砥石など）が少量出土したが、図化できない。

溝SD-6054・6055 (Fig.185・187、PL.17・25)

溝SD-6010のコーナーと堀SD-6040との間の陸橋に向かって、南から東へ折れながら入る溝である。2条の溝が並行するが切り合いではなく、上層ではひとつに合わさる。北東端で10～20cmと浅く、南に向かって深くなり30～50cm。この南側の調査区外では台地が落ちており、溝は低位部分へと更に続くと考えられる。崖下から陸橋を通って館の内部へと入っていく進入路であろう。

SD-6054・6055出土遺物 (Fig.189)

弥生土器、須恵器、中世土器器坏・他（底部糸切り）、中国産陶磁器（白磁、竜泉窯系青磁、陶器）、石器（砥石など）が出土した。合わせてコンテナ1箱弱である。

342は弥生土器甕の底部片で、ローリングを受ける。343は土器器坏で、底部糸切り。淡黄褐色なし、胎土に暗赤色粒・雲母粒を含むが精良、焼成不良。

溝SD-6058 (Fig.185・187、PL.18)

F区南半部の東端からF区東に検出した。SD-6031の東に3m前後の間を置いて、ほぼ並行する深い溝である。南端は浅くなっている立ち上がり、北端は調査区外へと伸びる。長さ5.5mを確認した。幅40～70cmで、横断面形は西壁（SD-6031のある側）が急傾斜の逆台形をなし、最深部で10cmを測る。

SD-6058出土遺物 (Fig.189)

弥生土器、中国産陶磁器（竜泉窯系青磁）、黒曜石が少量出土した。344は竜泉窯系青磁甕の口縁部で、体外面に鎬蓮弁文を施す。胎土は淡灰色で磁質精良、オリーブ色の透明釉を施す。

竜泉窯系青磁の出土から13世紀後半以降の溝と考えられ、おそらくSD-6031と同時期であろう。

(3)土坑

土坑SK-6050 (Fig.190、PL.25)

F区南半部の北東隅に位置する。一部を調査したに留まる。溝や土坑等の遺構と切り合う。現状で隅丸方形プランをなし、東西2.5m以上、南北2.4m以上。床面は段をなして北へ下がり、この深い部分の覆土には電線のアースと見られる鉄片が打ち込まれており、擾乱の可能性もある。

SK-6050出土遺物 (Fig.191・196)

弥生土器、須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁、竜泉窯系・同安窯系青磁、陶器）、瓦、石器

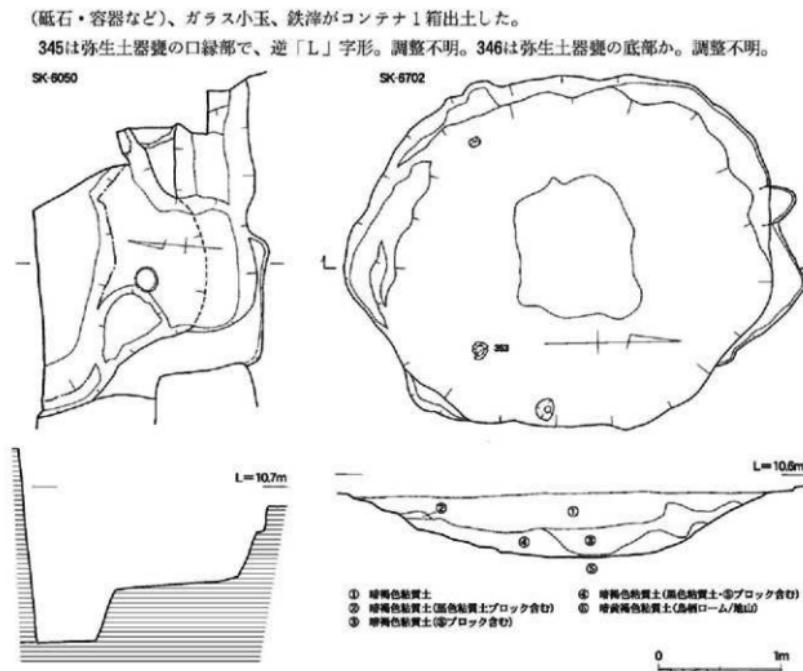


Fig.190 土坑SK-6050・6702実測図 (1/40)

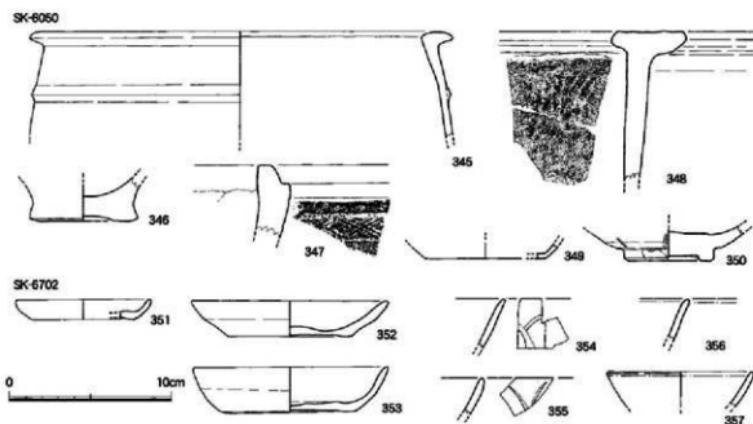


Fig.191 SK-6050・6702出土遺物実測図 (1/3)

347は瓦質土器火鉢の口縁部で、端部外面が受け部をなす。摩滅するが、外面には印花文が残る。内面にスカが付着する。淡灰白色を呈し、胎土に白色の細砂粒を多く含み、焼成不良。

348は施釉陶器甕の口縁部で、内面には當て具痕が残る。暗いあざき色で、細白色砂粒を多く含み、釉薬が発色不良である。内面は無釉。349は口禿白磁皿の底部である。胎土は白色で磁質、全釉で、釉は水色を帯びた乳白色不透明釉。焼成良好。350は竜泉窯系青磁碗で、体外面に蓮弁文を入れる。胎土は淡灰白色で磁質・精良、オリーブ色の透明釉をかける。焼成良好。

土坑SK-6702 (Fig.190, PL.18)

F区東に検出した大形土坑である。南北に長い楕円形プランで、長径3.5m、短径2.9mを測る。皿状に中央が窪む断面形をなし、深さ60cm。自然に埋没した土層堆積を示す。

SK-6702出土遺物 (Fig.191・194)

弥生土器、須恵器、土師器小皿・坏（底部糸切り）、東播系須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁、竜泉窯系青磁）、石器（砥石など）が少量出土した。

351は土師器小皿で、底部糸切りか。橙褐色で、細砂粒・雲母粒を多く含み、焼成良好。口径8.4cm。

352は土師器坏。底部糸切りで板圧痕がある。橙褐色、砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。口径12.2cm。

353も土師器坏で底部糸切り。淡橙褐色で、微細砂粒・雲母粒を多く含み、焼成良好。口径12.0cm。

354は竜泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に輪莲弁文を施す。淡灰色で磁質・精良の胎土に、淡いオリーブ色の透明釉をかける。355も竜泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に輪莲弁文を施す。胎土は淡灰褐色で精良、釉は淡い黄灰色の半透明釉で、焼成不良である。356は口禿白磁碗の口縁部片である。胎土は淡灰白色で磁質・精良、釉は青味のある乳白色不透明釉で、厚く施釉する。357は口禿白磁碗の口縁部片である。淡灰白色で磁質・精良な胎土に、乳白色不透明釉を施す。

小皿・坏の法量や白磁・青磁から13世紀中頃～14世紀前半頃の土坑とみられる。

5. その他の遺物

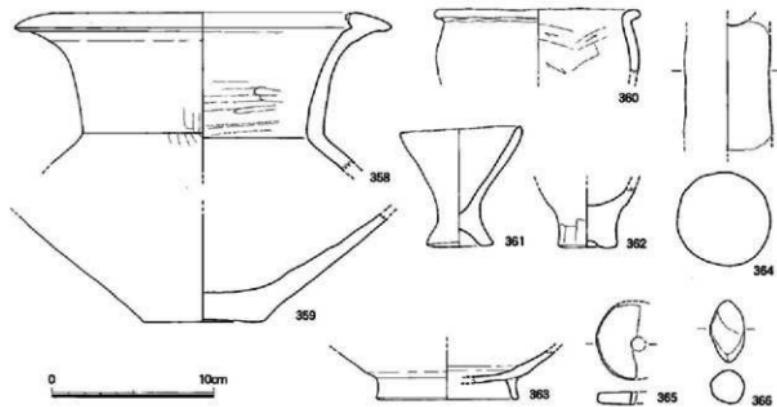


Fig.192 その他の土器・土製品実測図 (1/3)

土器・土製品 (Fig.192, PL.27)

358と359は弥生土器壺で、同一個体か。口縁は短い勧先形をなす。器面が摩滅するが外面縦刷毛目後ヘラ研磨、内面ヘラ研磨調整である。SP-6260出土。360は壺で、口縁は丸く外反し、短く伸びるが波打っており、一部で下方へ垂れ下がる。外面ナデ、内面ヘラなどの工具によるナデ調整で、口縁横ナデ。外面暗橙～黒色、内面暗橙～暗褐色を呈し、胎土に径1mm前後の砂粒・雲母粒を少量含むが精良と言え、焼成不良。搬入土器か。口径12.8cm。SP-6142出土。361は古式土師器の製塙土器で、ほぼ完存する。器表面は全て剥落する。石英・雲母など径2mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好。SP-6298出土。362はミニチュア土器で、弥生土器甕の底脚を模したか。器表面は剥落する。石英・雲母など径3mmまでの砂粒を多く含み、焼成不良。SK-6061出土。363は中世土師器の椀である。器面は剥落。乳白色で、多量の細砂粒・カクセン石を含み、焼成良好。SP-6146出土。

364は土製品で、支脚であろう。中実。365は土製の鋸鍤車で半欠。表面は著しく剥落する。雲母混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。SP-6470出土。366は土製の投弾。表面剥落。胎土精良で、焼成不良。SP-6451出土。

石器・石製品 (Fig.193～196)

石器・石製品は合わせてコンテナ15箱出土した。うち、11箱は黒曜石で、大半はチップであるが、打製石鎌、石錐、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片、寸詰まりの不整形剝片とこれらを剥ぎ出した石核などが、あわせてコンテナ1箱分ある。また、黒曜石以外の打製石器としては、安山岩製の分厚い剝片が数点ある。これら黒曜石製等の打製石器については今回の報告では紙数の都合で掲載することが不可能であるため、次年度の第13・14次調査報告で補うこととする。これ以外の石器としては、磨製石鎌2、磨製石剣3、今山産の太型蛤刃石斧9、柱状片刃石斧4、扁平片刃石斧3、磨製石斧6、石庖丁(未製品含む)17、石鎌4、砥石61、玉砥石2、鋸鍤車1、磨石5、石錐2、叩石2、その他4が出土している。うち、磨製石鎌から石錐までが弥生時代の所産とみられ、他は古墳時代前期から中世までのものを含む。これらの磨製石器については、中世砥石を除き極力図化するよう努めたが、小片については図化できなかったものもある。なお、実測図の遺物番号の脇に出土遺構を(数字)で示した。

367は磨製石鎌である。半島系石鎌の先端欠損後、研ぎ直して用いたとみられ、鍋が少し湾曲する。粘板岩製。古墳時代前期の住居から出土しており、本来の遺構から離れて出土する。368も磨製石鎌か。先端を研ぎ直しており、鍋が湾曲する。ビット出土。369～371は磨製石剣であろう。後二者には縫が入る。いずれも古墳時代以降の遺構から離れて出土している。372～382は石庖丁で、他に石庖丁の可能性のある板状の石片が4点ある。380は両刃に近く、他は偏両刃である。372・378・380は弥生時代前期の遺構から出土した。他は後世遺構から出土しており詳細時期不明。373は立岩産の輝緑凝灰岩で、他は硬質砂岩や頁岩質砂岩等の石材を用いる。383は石庖丁の未製品であろう。表裏両面に浅い溝があり、孔を穿つ途中で欠損したのか。硬質砂岩製。中世遺構出土。384は板状の石片の縁辺を打ち欠いており、石庖丁または石錐の未製品か。弥生時代住居出土。385～388は石錐とみられる。いずれも縁辺打ち欠きにより刃部を作るが、さほど鋭利ではなく、388はこすり付けたように刃部が摩滅する。387は安山岩、388は玄武岩か。他は砂岩系石材。386は弥生時代住居、387は同土坑、他はビット出土。

389は蛇紋岩製の小形磨製石斧である。打ち欠きと研磨により整形し、使用により刃部は欠損する。ビットから出土したが、縄文時代の遺物であろう。390は楕円形転石の小口に刃部を研ぎ出したノミ状

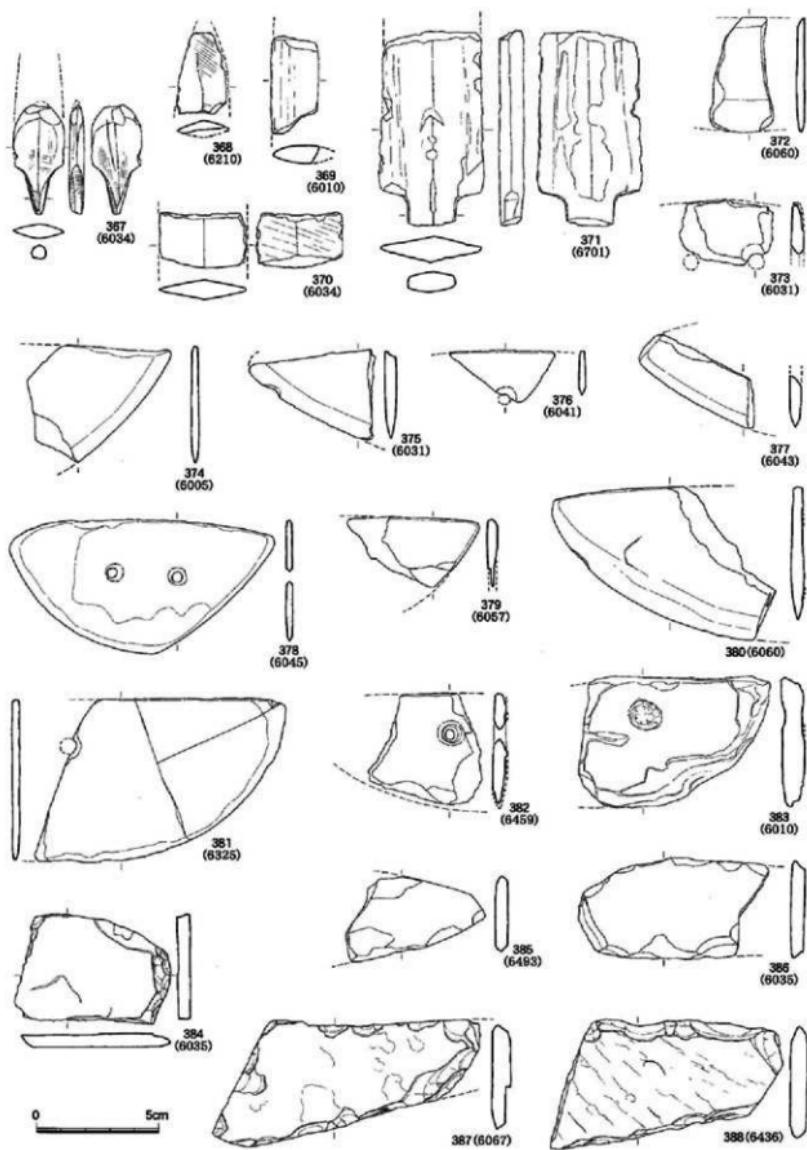


Fig.193 F区出土の石器実測図 I (1/2)

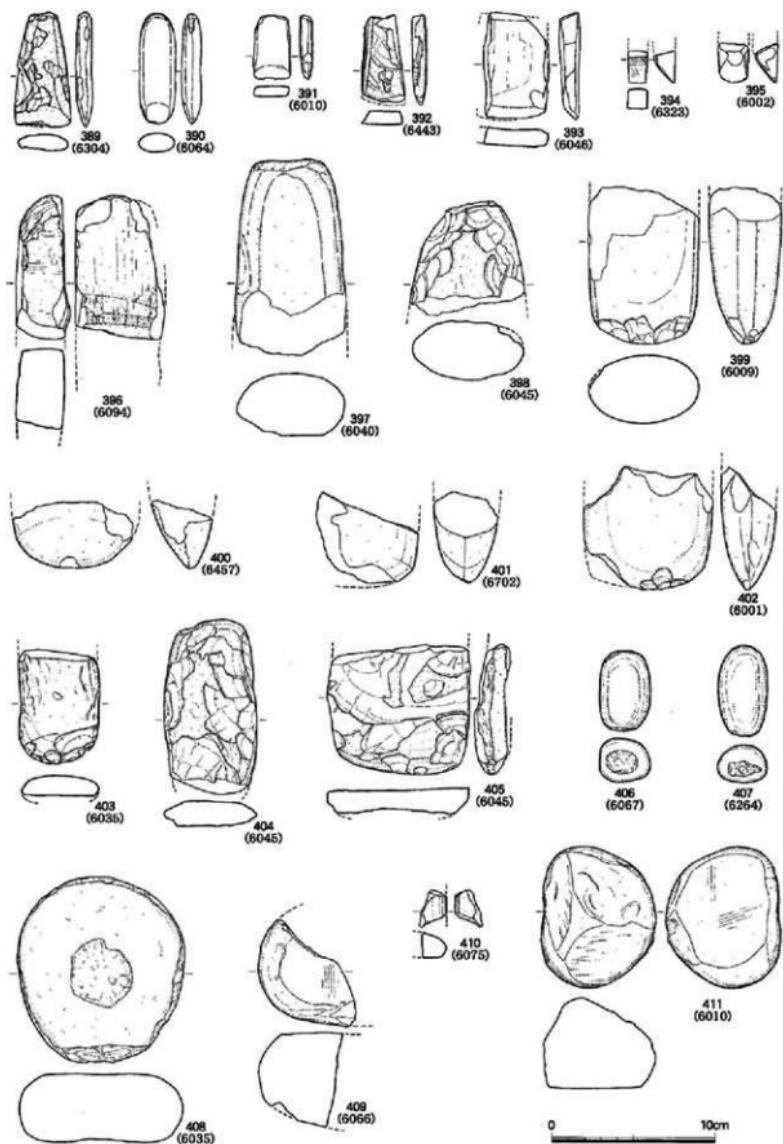


Fig.194 F区出土の石器実測図II (1/3)

の小形石斧である。基部と刃部左側に敲打痕がある。弥生時代土坑出土。391～393は扁平片刃石斧である。391は石材不明、392は硬質砂岩、393は珪化木を使用か。393は弥生時代土坑、392はピット、391は中世遺構出土。394・395は小形の柱状片刃石斧で、ともに刃部の残欠である。394はピット出土で頁岩製、395は弥生時代貯蔵穴出土で粘板岩を用いる。396は大形の抉入柱状片刃石斧か。右面には突起状の隆起を削り出す。頁岩製。弥生時代貯蔵穴出土。他に柱状片刃石斧の可能性がある小片が1点ある。397～402は今山産の玄武岩質安山岩製の大型始刃石斧で、他に未図化資料が3点ある。397・398は基部の破片で、ともに欠損後に手を加えたか。他は刃部の破片で、399は二次的な使用により刃部が潰れている。398は弥生時代前期の土坑、399は同中期の土坑から、他はピットや中世遺構から出土した。403は磨製石斧片で、刃部に近い部位が剥離し、これに手を加えている。今山産の玄武岩質

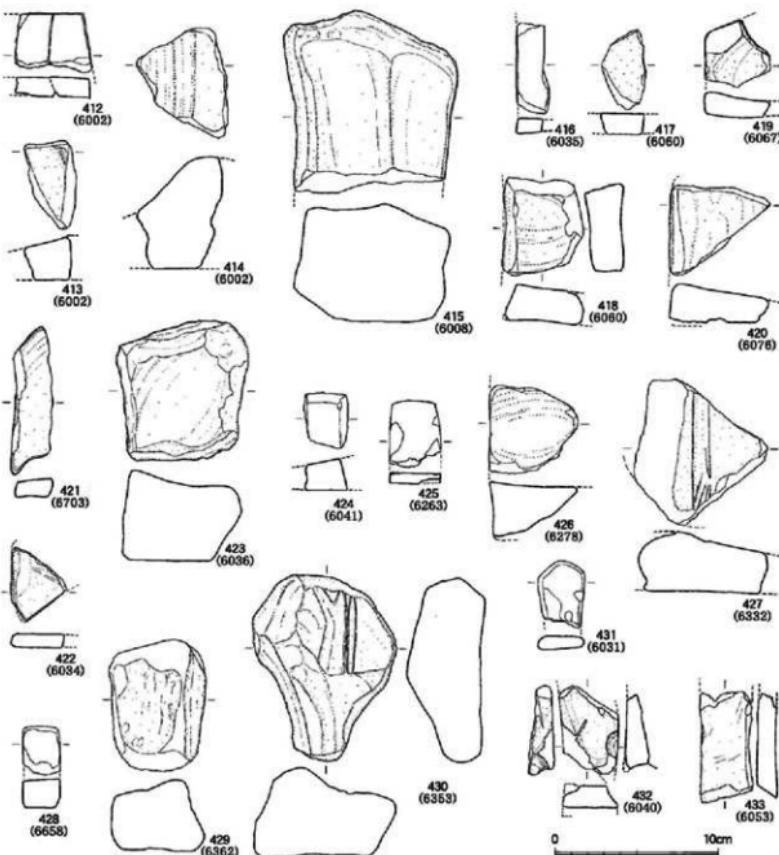


Fig.195 F区出土の石器実測図III (1/3)

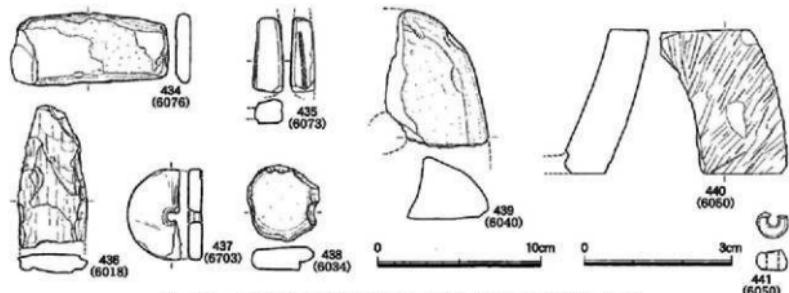


Fig.196 F区出土の石器実測図IV (1/3)・ガラス玉実測図 (1/1)

安山岩製。弥生時代住居出土。404は結晶片岩製の磨製石斧で、刃部を欠く。405も磨製石斧の刃部片で、敲打具に転用し刃部は潰されている。404・405は弥生時代前期土坑出土。他に磨製石斧小片1点が未図化である。406は叩石で、上下の小口に敲打痕がある。花崗岩製で弥生時代土坑出土。407も叩石で、下面にのみ敲打痕がある。ピット出土。玄武岩か。他に叩石1点がある。408は磨石で、表裏平坦面に浅い窪みがある。全円周を磨り具に用いるが、特に下端の使用が顕著である。花崗岩製。弥生時代住居出土。409は磨石で、一面のみが使用により平坦面をなす。今山産の石材を用いる。弥生時代土坑出土。410は小片であるが磨石か。全体に研磨がなされるが、特に裏面が平坦面をなす。頁岩製で、弥生時代土坑出土。411も磨石。今山産の拳大の転石で、一面のみが磨れて平坦となる。中世溝出土。

412～433は砥石である。他にも中世遺構から出土した砥石を中心に、41点の未図化の砥石片がある。412～421は弥生時代中期前葉以前の遺構から、422～430は弥生時代～古墳時代前期の住居・ピットから、431～433は中世遺構から出土した。板状のもの（412・416～419・421・422・425・431・433）が最も多く、方柱状のものがこれに次ぐ。414は中央部に向かって大きく窪んでおり、石皿か。413はその同一個体である可能性が高い。430は表面に2～3条の溝状の窪みがあり玉砥石か。432は右側面と左下側面に杯状の窪みがあり、やはり玉砥石か。416・433は頁岩、421は今山産の玄武岩質安山岩、425は粘板岩、429は花崗岩系の石材を用いており、その他の砥石は硬質砂岩ないし砂岩系の石材を使用する。

434は短冊状の板石の上下二長辺が研磨により摩滅しており、磨り切り具であろうか。石材は結晶片岩か。弥生時代前期後葉の貯蔵穴出土。435は方柱状をなし、左側面が表裏より溝状に磨られて折り取られた破面をなす。上下は欠損するが他の面は研磨を受けており、右側面にはやや斜めに浅い溝が彫られている。粘板岩製で、貯蔵穴より出土しており弥生時代前期の遺物である。436は滑石で、石斧様に加工する。下端は折れている。弥生時代～古墳時代前期だが詳細時期不明。437は鋸鍤車である。半欠。表裏より穿孔するが、孔は円の中心をズレた位置にある。結晶片岩製。弥生時代貯蔵穴出土。438は石鎌か。扁平盤の主に上半縁辺を打ち欠き、左右に浅い抉れをつくる。古墳時代前期住居出土。439も石鎌か。下面を研磨して扁平な半球形につくり、やや斜め方向に一孔を穿つ。砂岩製。中世溝出土。440は石製の容器であろうか。底部がなく筒状となる可能性もある。内外面のカーブが一致しておらず、梢円ないし隅丸方形をなそう。石材は粘板岩か。中世土坑出土。

ガラス製品 (Fig.196)

441はガラス小玉である。半欠。薄いコバルトブルーで気泡を含む。中世土坑出土。

6. 小結

F区で検出した遺構について時期別に簡単にまとめる。

弥生時代の遺構は、竪穴住居4、溝3、木棺墓3、土壤墓2、甕棺墓9（成人棺4・小児棺5）、貯蔵穴20、土坑17である。竪穴住居は中期初頭～前葉に属し、3棟は円形プラン、他の1棟はプラン不明である。うち円形住居SC-6707は前期に上る可能性がある。ちなみにG区の円形住居SC-7003では板付II b式（前期後葉）の土器が出土している。溝は中期初頭に属する。木棺墓SK-6015・土壤墓SK-6071から出土した土器は板付II b式の範疇に納まるものと考えられ、その他の木棺墓・土壤墓についても中期初頭までは下らないと考えられる。甕棺墓はSK-6082にやや古い様相が残るが、成人棺については城ノ越式（中期初頭）を中心とする時期に営まれたと考えられる。小児甕棺墓はSK-6084が城ノ越式段階にあるが、他は汲田式（中期前葉）に下るものとみられ、成人棺から一段階遅れて盛行したようである。よって弥生時代墓群については、まず木棺墓・土壤墓が弥生時代前期後葉の時期に造営され、次いで前期末頃から中期初頭に成人甕棺墓が造営され、これを取り巻くようにして小児甕棺墓が中期前葉まで営まれたと推定されよう。貯蔵穴はSK-6044に板付I式新段階までさかのぼる土器が含まれるが、本格的な造営の開始時期は次の板付II a式段階と考えられ、板付II b式期に盛行している。SK-6062・6063には中期前葉の土器が含まれるがともに数点の出土であり、柱穴などの遺構が密に切り合う状況から混入品とみると妥当で、貯蔵穴は前期末後までにその造営が終了したものと考えられる。土坑は出土遺物が少ないと、前期板付II a式期から中期前葉まで継続している。うち土坑SK-6045・6048は貯蔵穴の可能性がある。以上の弥生時代遺構についてまとめると、前期前葉（板付I式新段階）から中葉（板付II a式）にかけて貯蔵穴・土坑などの遺構が出現し、次いで後葉（板付II b式）をピークとして貯蔵穴が環状に多数造られるとともに、竪穴住居・土坑からなる集落と木棺墓・土壤墓からなる墓地が営まれ、前期末・中期初頭から中期前葉には竪穴住居・小溝・土坑からなる集落と甕棺墓が近接して営まれた、という推移をたどることができよう。

F区をはじめ第11次調査では弥生時代中期中葉から後期の遺構はなく、土器も出土していない。

古墳時代前期の遺構には、竪穴住居4、土坑4以下がある。竪穴住居はF区の南半部に集中しており、いずれも方形プランの住居である。C・E区では当該期の3基の方形周溝墓を確認しているが、この集落とはやや離れて位置しており、見晴らしの良い設丘端部を利用して墓地を営んだのであろう。古墳時代後期の遺構はF区では確認できなかったが、E区で土坑を数基検出している。

古代の遺構には溝1がある。一部を確認したに留まるが、ほぼ磁北を指し、8世紀前半までの土器が出土した。B区でも同時期の溝を確認しており、これに連続しよう。隣接する井尻B遺跡群では、正方位を示す古代の直線的な溝が多数確認されており、これらとの関連が考えられる。

中世の遺構には、柱列1、掘立柱建物1、溝7、土坑2がある。うち注目すべきは溝群で、SD-6010は北側のC区SD-3001・E区SD-5003から連続し、F区中央で東へ折れてG区SD-7004へと続き、環濠状を呈する。この折れる部分に向かって堀状の大溝SD-6040が南北に伸びて幅4.7m前後の陸橋を形成する。この陸橋部分には浅い溝SD-5054・5055が東西に通り、その西端はSD-6040に沿って南へ折れており、おそらく陸橋内外を結ぶ道路と考えられる。Fig.3の古地図からこの道路の痕跡が昭和初期まで残っていたことが判る。これらの溝群は16世紀代の遺構とみられ、この内郭部分に検出した柱列・掘立柱建物は出土遺物が少なく明確ではないが溝群と同時期の可能性がある。その他の小溝や土坑からは13～14世紀頃の遺物が出土しており同時期ではない。ただし16世紀代の遺物は質・量ともに極めて貧弱なので、これらの小溝や土坑のなかに16世紀に下る遺構が含まれている可能性も考えられる。



1. F区北半部全景（北西から）



2. F区北半部全景（南東から）

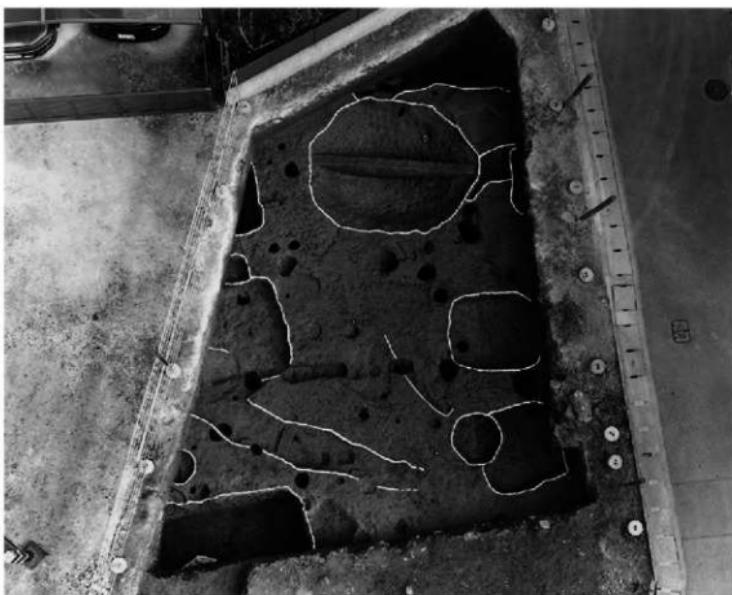


1. F区南半部全景（北から）



2. F区南半部全景（南から）

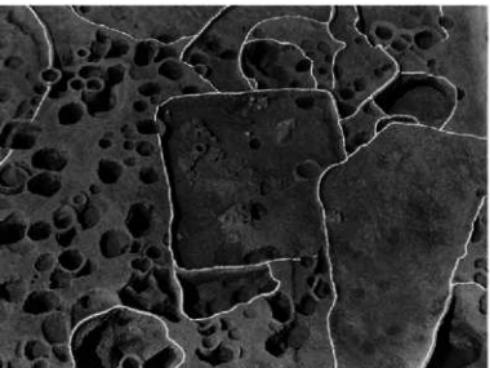
PL.18



1. F区東全景（西から）



2. F区北半部調査風景（北西から）



1. 竪穴住居SC-6032（南から）



2. SC-6032遺物出土状況（南から）



3. 竪穴住居SC-6034・6035（南東から）



4. SC-6034遺物出土状況（西から）



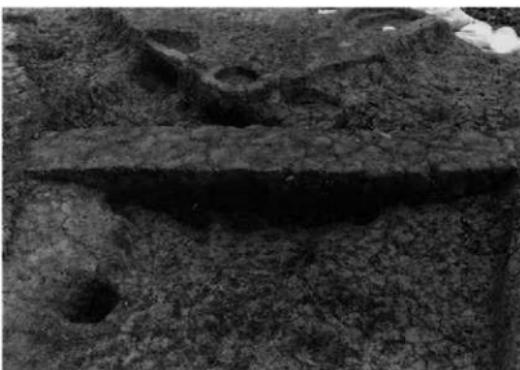
5. 竪穴住居SC-6033・6036（北西から）



6. SC-6036遺物出土状況（南から）



1. 弥生時代溝SD-6006・6008（南東から）



2. SD-6006 E - F 土層断面（南から）



3. 木棺墓SK-6015（東から）



4. 木棺墓SK-6079（東から）



5. 木棺墓SK-6080棺材圧痕（北西から）



6. 木棺墓SK-6080完掘後（北西から）



1. 土壙墓SK-6071（東から）



2. F区南半部の斐棺墓群（南西から）



3. 斐棺墓SK-6011（南東から）



4. 斐棺墓SK-6012（北西から）



5. 斐棺墓SK-6077・6078（南西から）



6. 斐棺墓SK-6078（南西から）



1. 壺棺墓SK-6081（北東から）



2. 壺棺墓SK-6082（南東から）



3. 壺棺墓SK-6084（東から）



4. 壺棺墓SK-6086（南から）



5. 貯藏穴SK-6002（北東から）



6. 貯藏穴SK-6004（西から）



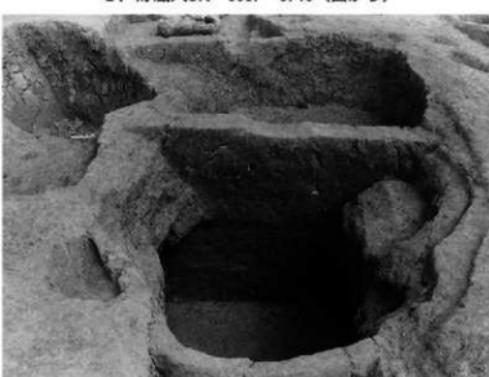
1. 貯蔵穴SK-6013・6014（北から）



2. 貯蔵穴SK-6057・6710（西から）



3. 貯蔵穴SK-6073（北から）



4. 貯蔵穴SK-6076土層断面（西から）



5. 貯蔵穴SK-6076完掘後（西から）



6. 貯蔵穴SK-6083（西から）



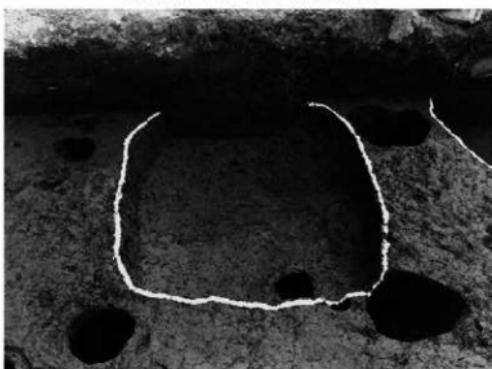
1. 貯蔵穴SK-6088土層断面（西から）



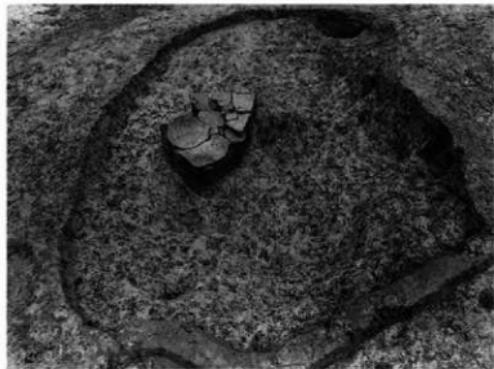
2. 貯蔵穴SK-6091（北西から）



3. 貯蔵穴SK-6094（西から）



4. 貯蔵穴SK-6708（北から）



5. 貯蔵穴SK-6009（東から）



6. 貯蔵穴SK-6045（北から）



1. 土坑SK-6048・6050（南から）



2. 古代溝SD-6701（南から）



3. 中世溝SD-6010-6040-6054-6055（北から）



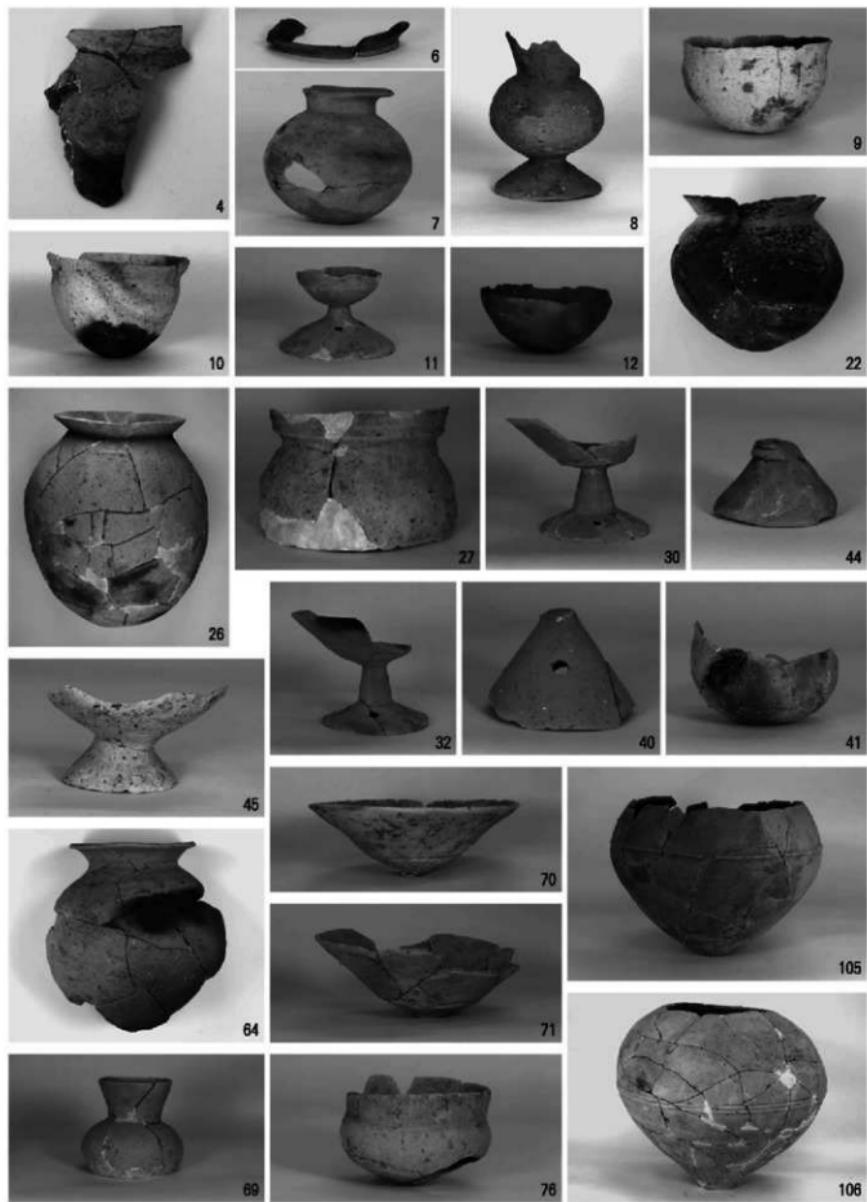
4. 溝SD-6010土層断面（北西から）



5. 溝SD-6040（北から）



6. 中世溝SD-6040土層断面（南から）



F区出土遺物 I (縮尺不同)



F区出土遺物 II (縮尺不同)

第九章 G区の調査

1. 調査の概要 (Fig.197~199, PL.28)

F区の東に、道路を挟んで位置する調査区である。調査はF区北半部と並行して行い、6月11日の表土剥ぎから開始し、7月10日からE・F区に統いて埋め戻した。

西側と南側は現在も使用されている生活道路と接し、東側は道路境界である。調査区は南に開いた三角形を呈し、南北長12m、東西の最大幅4mで、調査面積は上端で32m²となる。地表面の標高は11.2~11.3m、遺構面までの深さは0.6mで、厚さ0.3mの造成土①の下に旧耕作土とみられる灰褐色土②、床土の可能性のある暗褐色土③があり、その下層は地山土である鳥栖ローム層⑤となる。④層は黒色粘質土で遺構覆土である。遺構面の標高は北側で10.6m強、南へ緩やかに下っており、南端では中世溝に向かって落ちていく。

調査区が狭いうえ、中央に大きな擾乱坑があって、断片的な遺構がいくつか確認できたのみである。検出遺構は、弥生時代前期後葉～中期初頭の円形竪穴住居1棟・性格不明遺構2基・溝1条、中世の溝1条、時期不詳の溝1条である。

遺構実測図の基準線と標高はF区と共通である。

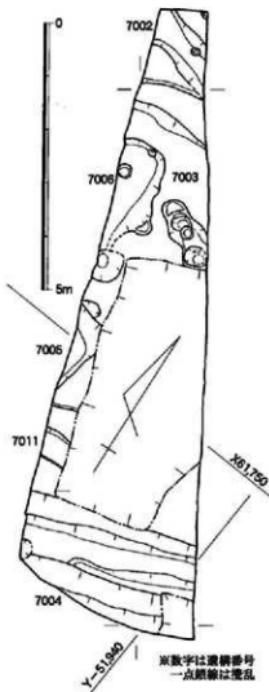


Fig.197 G区遺構配置図 (1/100)

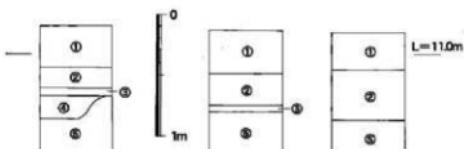


Fig.198 土層略測図 (1/40)



Fig.199 G区位置図 (1/1,500)

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 穹穴住居

整穴住居SC-7003 (Fig.200、PL.28)

調査区中央に検出し、擾乱坑により大部分を失う。円形住居と考えられる遺構で、北辺に長1.5mの、南辺に長0.5mの壁の立ち上がりがあり、径6.0mの円形住居が復元できる。壁の高さは北辺で20cm、南辺で10cm。住居の中心に径0.7m、深さ0.4mの円形プランの土坑SK-7007があり、これと1.7m離れたSP-7008・7010が円形に巡る主柱穴の一部であろう。SK-7007とSP-7010周辺の2ヶ所で土器がまとまって出土した。

SC-7003出土遺物 (Fig.201)

弥生土器、石器（石斧・砥石・黒曜石）が出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

1～4は如意形口縁の甕である。1は器表面が完全に一枚剥落する。粗砂粒混じりの細砂を多量に含み、焼成良好。2は剥落が著しいが、外面刷毛目の後ナデ調整か。内面ナデ調整。黒褐色で、粗砂粒・雲母粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成良好。3は胴がかなり膨らむ。口唇は剥落する。外面と口縁内面に刷毛目、胴内面はナデ調整。外面淡黄褐色～褐色、内面淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を多量に含むほかカクセン石が混じる。焼成良好で、胴外面に黒斑がある。4は頸部に突帯を貼付するが、突帯頂部と口唇は剥落して刻目の有無は不明。口縁と突帯は横ナデ調整で、その間に横研磨を施す。内面ナデ調整。淡黄

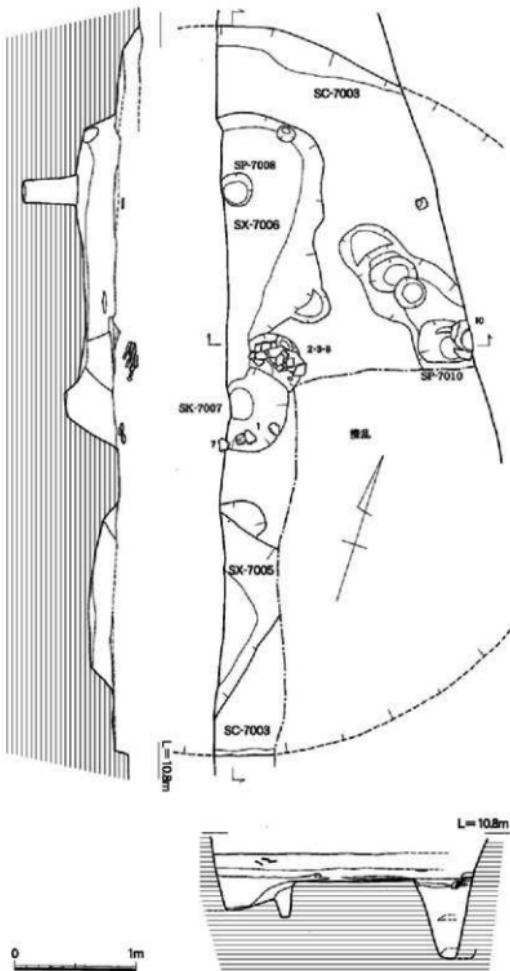


Fig.200 整穴住居SC-7003・SX-7005・7006実測図 (1/40)

褐色を呈し、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。5～8は甌の底部である。5は調整不良。細砂粒を多量に含み、焼成不良。6も剥落して調整不良。粗大砂粒を多量に含み、焼成不良。7も摩滅して調整不良。底部の穿孔についても焼成後か否か不明。細砂粒を多量に含むほか、石英粗粒、雲母粒を含む。焼成不良。8は外面刷毛目、内面ナデ調整。外面淡褐～暗橙褐色、内面淡黄褐～淡褐色で、胎土に細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。

9は甌の底部。外面ヘラ研磨で、外底には木葉压痕が残る。淡橙色で、雲母微粒を多量に含むが胎土精良、焼成良好。10は大型甌の底部で平底。内外ナデ調整で、外面は丁寧な印象を受ける。内底に指頭痕が残る。外面橙褐～淡褐色、内面淡褐～黒色を呈し、細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。11は鉢か。小片のため図の傾きは不確実。口縁が僅かに屈曲して開く。内外ヘラ研磨で、外面は特に丁寧に施す。淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。

性格不明遺構SX-7005・7006 (Fig.200, PL.29)

ともに、竪穴住居SC-7003の掘削後に確認した方形の掘り込みである。住居の可能性も考えられるがあまりにも断片的である。SX-7005は深さ20cm、SX-7006は深さ30cmである。

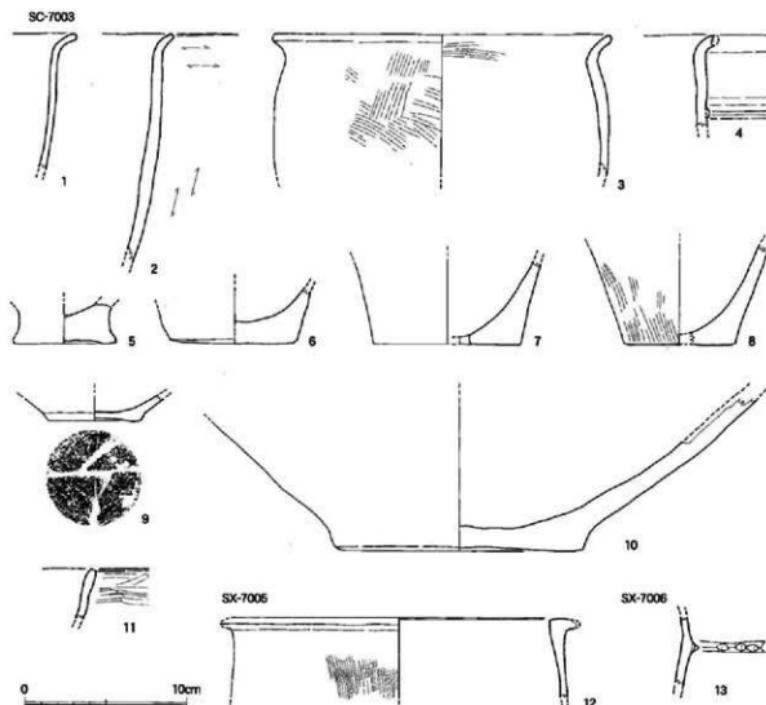


Fig.201 SC-7003・SX-7005・7006出土遺物実測図 (1/3)

SX-7005・7006出土遺物 (Fig.201)

弥生土器、黒曜石が少量出土した。

12は弥生土器甕で、口縁端部は剥落して刻目の有無は不明。外面刷毛目、口縁横ナデ調整で、内面は調整不明。橙褐色を呈し、細砂粒を多く含むほか、雲母粒を含む。焼成不良。SX-7005出土。SC-7003出土土器より時期的に新しく、あるいは切り合ひが逆か。13は弥生土器甕の小片で、頸部外面に細く高い突帯を巡らせ、棒状工具で刻目を施す。器表面が一枚剥げ落ちる。細砂粒を多量、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。SX-7006出土。

(2)溝状遺構

溝SD-7002 (Fig.202、PL.28)

調査区北端に一部を確認した。幅0.7m。断面逆台形で、深さ10cm。F区で検出したSD-6006・6008・6026などの弧状に巡る溝に連続する可能性も考えられる。

土器片と黒曜石が少量出土したが、図示できるものはない。

溝SD-7004 (Fig.202、PL.28)

調査区の南端に検出した。溝の落ち際とみられる。調査区南壁から1.8mの位置で落ち始め、深さ50cmまで緩やかに段をなして落ち込む。F区検出の溝SD-6010・6056から連続する溝であろう。

土器小片、陶磁器片、黒曜石が少量出土したが、図化し得ない。

溝SD-7011 (Fig.202)

SD-7004の北に1m弱離れて位置する。調査区壁と攪乱坑の間にごく一部を検出した。断面逆台形で、深さ15cm程度だがやや掘り過ぎた。出土遺物はない。

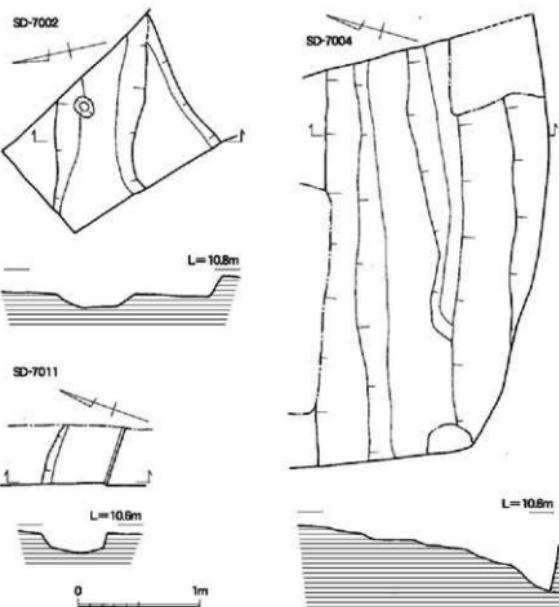


Fig.202 溝SD-7002・7004・7011実測図 (1/40)

PL.28



1. G区全景（南から）



2. 穹穴住居SC-7003遺物出土状況（北東から）



3. 穹穴住居SC-7003遺物出土状況（南西から）



1. 性格不明遺構SX-7005（東から）



2. 性格不明遺構SX-7006（東から）

付. 五十川遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 炭化種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、第10次調査で出土したB区SP-2140小ピット（時期不明）、C区SG-3030貯蔵穴（弥生時代前期・板付I式期）、第11次調査で出土したE区SK-5007貯蔵穴（弥生時代前中期頃）、F区SK-6002貯蔵穴（弥生時代前期・板付II式期）の計4造構で検出された炭化種実である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

草本1分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に、イネの計測値を表2、粒形とその大きさを表3に示す。また、任意に抽出した16点を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

イネ *Oryza sativa L.* 炭化果実（完形・破片） イネ科

炭化しているため黒色である。長橢円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

表1 五十川遺跡における炭化種実同定結果

分類群	学名	部 位	第10次調査		第11次調査	
			B区SP-2140	C区SG-3030	E区SK-5007	F区SK-6002
Herb	草本					
	<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実(完形)	126	1463	203
			(破片)	60	1314	72
	Total	合計		186	2777	275
						89

1) 第10次調査

B区SP-2140小ピットでは、イネ完形126、破片60が同定された。C区SG-3030貯蔵穴では、イネ完形1463、破片1314が同定された。

表2 六十项指标分类统计评价

序号	指标	CSG-2014		CSG-2020		CSG-2030		年份	年份比	年均比	年均比
		平均值	标准差	平均值	标准差	平均值	标准差				
1	人口	4.5	2.9	10.6	6.1	16.0	1.1	2.1	2.1	1.63	1.63
2	人口	4.1	1.67	13.1	8.2	4.6	2.45	11.5	4.2	2.1	2.09
3	人口	4.1	3.0	13.2	5.9	4.6	3.47	13.4	4.9	2.14	2.14
4	人口	4.7	2.6	13.8	11.8	4.6	2.16	11.5	4	4.6	4.6
5	人口	4.4	2.7	11.9	5.5	4.5	2.16	13.1	5	3.3	3.3
6	人口	4.8	2.6	14.4	9.6	5.2	2.8	14.6	8	4.5	4.5
7	人口	4.0	2.6	13.4	10.5	5.7	2.3	2.00	7	4.1	4.1
8	人口	4.7	2.6	13.2	9.6	4.5	2.11	9.8	8	4.8	4.8
9	人口	4.5	2.4	14.0	9.9	5.0	2.27	10.8	9	5.0	5.0
10	人口	4.0	2.6	12.5	8.9	4.7	2.25	10.8	10	4.4	4.4
11	人口	4.5	2.4	14.5	9.9	5.2	2.25	11.1	10	4.7	4.7
12	人口	4.5	2.5	15.0	10.2	4.6	2.25	11.1	10	4.7	4.7
13	人口	4.5	2.5	15.0	10.2	4.6	2.27	11.2	10	4.7	4.7
14	人口	4.5	2.6	15.5	10.5	4.6	2.27	11.2	10	4.7	4.7
15	人口	4.5	2.4	15.5	10.5	4.6	2.27	11.2	10	4.7	4.7
16	人口	4.5	2.1	14.0	6.5	4.7	2.25	11.5	16	4.3	4.3
17	人口	4.1	3.1	13.6	6.7	4.5	2.16	11.7	17	4.1	4.1
18	人口	4.5	3.0	13.5	6.8	4.2	2.25	11.7	18	4.3	4.3
19	人口	4.0	2.8	12.8	7.0	4.1	2.06	10.6	9.7	3.9	3.9
20	人口	4.7	2.7	12.7	7.4	4.7	2.4	10.6	10.5	4.0	4.0
21	人口	4.6	2.6	12.0	7.1	4.5	2.29	11.0	21	4.5	4.5
22	人口	4.0	2.1	11.9	6.5	4.2	2.26	11.2	12	4.2	4.2
23	人口	4.5	2.5	12.0	6.8	4.5	2.26	11.2	12	4.5	4.5
24	人口	4.5	2.7	12.5	7.0	4.5	2.27	11.2	12	4.5	4.5
25	人口	4.1	2.5	12.5	7.0	4.0	2.25	11.2	12	4.1	4.1
26	人口	3.5	2.7	12.8	7.0	4.0	2.25	11.2	12	4.0	4.0
27	人口	5.0	3.1	10.5	7.7	5.1	2.25	10.5	27	4.9	4.9
28	人口	5.0	2.3	11.5	7.8	5.8	2.38	11.5	26	5.0	5.0
29	人口	4.0	2.5	12.7	7.9	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
30	人口	4.5	2.5	12.0	7.9	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
31	人口	4.1	2.8	11.5	7.9	4.5	2.26	11.5	26	4.1	4.1
32	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
33	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
34	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
35	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
36	人口	5.0	3.1	12.8	8.0	5.0	2.25	11.5	26	5.0	5.0
37	人口	5.0	3.1	12.7	8.0	5.0	2.25	11.5	26	5.0	5.0
38	人口	4.5	2.8	12.7	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
39	人口	5.0	3.1	12.7	8.0	5.0	2.25	11.5	26	5.0	5.0
40	人口	4.0	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
41	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
42	人口	4.5	2.5	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
43	人口	4.5	2.5	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
44	人口	4.5	3.0	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
45	人口	4.5	2.5	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
46	人口	4.5	2.5	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
47	人口	4.5	2.5	12.5	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
48	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
49	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
50	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
51	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
52	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
53	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
54	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
55	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
56	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
57	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
58	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
59	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
60	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
61	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
62	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
63	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
64	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
65	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
66	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
67	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
68	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
69	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
70	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
71	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
72	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
73	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
74	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
75	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
76	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
77	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
78	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
79	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
80	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
81	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
82	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
83	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
84	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
85	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
86	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
87	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
88	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
89	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
90	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
91	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
92	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
93	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
94	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
95	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
96	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
97	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
98	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
99	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
100	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
101	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
102	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
103	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
104	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
105	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
106	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
107	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
108	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
109	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
110	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
111	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
112	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
113	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
114	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
115	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
116	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
117	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	11.5	26	4.5	4.5
118	人口	4.5	2.5	12.0	8.0	4.5	2.26	1			

• ESR-6007										• ESR-6008									
EEL	E.S.(m)	高さ(m)	底面比	底面	EEL	E.S.(m)	高さ(m)	底面比	底面	EEL	E.S.(m)	高さ(m)	底面比	底面					
1	4.2	2.5	1.69	10.5	51	4.5	2.2	0.65	9.9	1	4.3	2.7	1.56	11.3					
2	4.7	2.9	1.62	13.6	52	4.1	2.5	1.88	16.7	2	4.0	2.6	1.54	10.4					
3	4.7	2.6	1.84	12.2	53	4.1	2.9	1.41	11.9	3	4.1	2.2	1.86	9.0					
4	4.1	2.7	1.82	11.1	54	4.0	2.8	1.63	11.2	4	4.3	2.7	1.69	11.6					
5	4.7	3.2	1.47	15.0	55	4.2	2.4	1.75	16.1	5	4.0	3.1	1.29	12.4					
6	4.0	3.5	1.14	14.0	56	4.1	2.6	1.62	14.9	6	4.4	2.8	1.67	12.3					
7	4.6	2.3	2.00	10.6	57	2.5	1.84	14.3	15.3	7	4.0	2.8	1.34	10.4					
8	4.0	3.3	1.31	13.2	58	3.9	4.3	3.1	12.9	8	4.0	2.9	1.34	10.4					
9	4.5	2.8	1.25	12.6	59	2.6	2.4	1.20	13.0	9	4.0	2.8	1.24	10.4					
10	4.0	2.5	1.73	11.7	60	4.2	2.5	1.62	15.9	10	3.7	2.8	1.46	10.3					
11	4.6	2.5	1.77	12.0	61	4.1	2.6	1.44	12.5	11	4.2	2.2	1.52	10.9					
12	4.3	2.3	1.89	9.4	62	4.6	2.0	1.83	12.2	12	4.2	2.3	1.87	12.7					
13	4.3	2.3	1.73	11.7	63	4.4	2.4	1.68	16.5	14	4.4	2.2	1.65	9.0					
14	4.5	2.5	1.73	11.7	64	4.1	2.7	1.62	11.1	15	4.1	2.5	1.61	10.3					
15	4.1	2.3	1.78	9.4	65	2.9	2.8	1.26	16.9	16	4.0	2.3	1.74	9.2					
16	2.7	2.9	1.28	10.7	66	2.5	2.6	1.62	15.9	17	3.5	1.7	2.08	6.0					
17	4.4	2.5	1.76	11.0	67	4.0	2.6	1.54	18.4	18	3.9	1.36	11.3						
18	4.1	2.5	1.64	10.3	68	2.6	3.0	1.80	7.2	19	4.0	3.1	1.29	12.4					
19	4.0	2.5	1.60	10.0	69	4.1	2.5	1.64	10.3	20	4.0	2.5	1.69	10.9					
20	3.0	2.6	1.46	9.9	70	4.0	2.6	1.60	10.0	21	4.0	2.3	1.82	8.6					
21	4.4	2.6	1.69	11.4	71	4.1	2.6	1.88	16.7	22	3.9	1.29	10.9						
22	4.5	2.5	1.80	11.3	72	4.3	2.6	1.54	16.4	23	2.9	2.4	1.63	9.4					
23	4.3	3.2	1.34	13.8	73	4.3	2.6	1.65	11.2	24	4.4	2.7	1.63	11.9					
24	3.0	2.7	1.44	10.5	74	4.4	2.6	1.69	11.4	25	4.0	2.4	1.67	10.3					
25	4.4	2.8	1.37	12.3	75	4.0	2.5	1.60	10.0	26	4.1	2.5	1.61	10.3					
26	2.7	2.7	2.5	1.42	9.6	4.0	2.6	1.84	16.4	27	4.4	2.5	1.76	11.9					
27	3.0	2.6	1.46	9.9	77	4.1	2.7	1.82	11.1	28	4.2	2.5	1.68	10.5					
28	4.5	2.2	2.05	9.9	78	4.3	2.1	1.84	9.0	29	4.1	2.8	1.64	10.3					
29	4.0	2.4	1.84	10.4	79	4.1	2.5	1.84	16.3	30	4.2	2.5	1.88	10.5					
30	4.5	2.4	1.88	10.8	80	4.2	2.5	1.72	17.2	31	4.0	2.5	1.88	10.5					
31	4.3	2.5	1.72	10.8	81	4.0	2.3	1.74	9.2	32	4.0	2.5	1.88	10.5					
32	4.4	1.47	13.2	63	82	4.6	2.5	1.68	10.5	33	4.0	2.5	1.88	10.5					
33	3.0	2.7	2.17	7.0	83	2.6	2.4	1.80	8.6	34	3.4	2.0	1.77	12.0					
34	3.4	2.6	1.79	10.1	84	3.4	2.0	1.70	6.8	35	4.0	2.5	1.88	10.5					
35	4.1	2.5	1.58	10.7	85	4.2	2.4	1.75	10.1	36	4.0	2.5	1.88	10.5					
36	4.0	2.6	1.60	10.0	86	4.3	2.5	1.72	10.8	37	4.1	2.5	1.88	10.5					
37	4.1	2.4	1.71	9.8	87	4.4	2.5	1.84	16.0	38	4.1	2.5	1.88	10.5					
38	3.5	2.3	1.82	11.4	88	4.2	2.0	1.80	7.6	39	4.1	2.5	1.88	10.5					
39	4.4	2.5	1.69	11.4	89	4.7	2.5	1.88	12.2	40	4.2	2.5	1.88	10.5					
40	4.2	2.7	1.56	11.3	90	4.5	2.0	1.80	15.5	41	4.0	2.5	1.88	10.5					
41	4.0	2.5	1.54	10.3	91	4.2	2.0	1.80	13.5	42	4.0	2.5	1.88	10.5					
42	4.5	2.5	1.73	11.7	92	4.2	2.5	1.85	14.3	43	4.0	2.5	1.88	10.5					
43	4.5	2.4	1.88	10.8	93	4.4	2.5	1.88	12.0	44	4.2	2.5	1.88	10.5					
44	2.8	2.5	1.82	9.5	94	4.7	2.1	1.82	10.8	45	4.0	2.5	1.88	10.5					
45	4.2	2.5	1.68	10.5	95	5.0	2.5	1.84	16.5	46	4.0	2.5	1.88	10.5					
46	4.0	2.3	1.74	9.2	96	4.8	2.3	2.13	11.3	47	4.8	2.0	1.82	10.5					
47	4.8	2.3	2.09	11.0	97	4.1	2.0	1.82	8.3	48	4.5	2.0	1.88	10.5					
48	4.5	2.9	1.55	13.4	98	4.5	2.6	1.73	11.7	49	4.2	2.5	1.88	10.5					
49	2.7	2.6	1.82	9.6	99	5.6	2.5	2.24	14.0	50	4.1	2.5	1.88	10.5					
50	4.1	2.5	1.64	10.3	100	5.5	3.0	1.83	16.5										

表3 五十川遺跡イネの粒形とその大きさ

・B区SP-2140小ピット(時期不明)

粒形	粒大	極々小 ~8	極小~ ~12	小 ~16	中 ~	合計 (個)
長粒	2.6-3.0 <i>Ll</i>					0
	2.3-2.6 <i>Lm</i>		1			1
	2.0-2.3 <i>Ls</i>		8	6		14
短粒	1.8-2.0 <i>Sl</i>		15	15	1	31
	1.6-1.8 <i>Sm</i>		21	6		27
	1.4-1.6 <i>Ss</i>		10	15		25
円粒	1.2-1.4 <i>Rl</i>	1	1			2
	1.0-1.2 <i>Rm</i>					0
合計 (個)		1	56	42	1	100

・C区SG-3030貯蔵穴(弥生時代前期・板付I式期)

粒形	粒大	極々小 ~8	極小~ ~12	小 ~16	中 ~	合計 (個)
長粒	2.6-3.0 <i>Ll</i>				1	1
	2.3-2.6 <i>Lm</i>			1		1
	2.0-2.3 <i>Ls</i>			1	1	2
短粒	1.8-2.0 <i>Sl</i>			5		5
	1.6-1.8 <i>Sm</i>			13	9	22
	1.4-1.6 <i>Ss</i>			25	24	49
円粒	1.2-1.4 <i>Rl</i>	1	2		15	18
	1.0-1.2 <i>Rm</i>			1	1	2
合計 (個)		1	48	51	0	100

・E区SK-5007貯蔵穴(弥生時代前中期)

粒形	粒大	極々小 ~8	極小~ ~12	小 ~16	中 ~	合計 (個)
長粒	2.6-3.0 <i>Ll</i>					0
	2.3-2.6 <i>Lm</i>					0
	2.0-2.3 <i>Ls</i>	1	6	1		8
短粒	1.8-2.0 <i>Sl</i>	1	4	1	1	7
	1.6-1.8 <i>Sm</i>	2	33	6		41
	1.4-1.6 <i>Ss</i>		27	8		35
円粒	1.2-1.4 <i>Rl</i>		4	4		8
	1.0-1.2 <i>Rm</i>			1		1
合計 (個)		4	74	21	1	100

・F区SK-6002貯蔵穴(弥生時代前期・板付II式期)

粒形	粒大	極々小 ~8	極小~ ~12	小 ~16	中 ~	合計 (個)
長粒	2.6-3.0 <i>Ll</i>					0
	2.3-2.6 <i>Lm</i>					0
	2.0-2.3 <i>Ls</i>	1				1
短粒	1.8-2.0 <i>Sl</i>			4		4
	1.6-1.8 <i>Sm</i>			11		11
	1.4-1.6 <i>Ss</i>			8	1	9
円粒	1.2-1.4 <i>Rl</i>		3	2		5
	1.0-1.2 <i>Rm</i>					0
合計 (個)		1	26	3	0	30

*計測は表2にそって行う。粒長/粒幅で粒形を表し、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。

2) 第11次調査

E区SK-5007貯蔵穴では、イネ完形203、破片72が同定された。F区SK-6002貯蔵穴では、イネ完形32、破片57が同定された。

表2に示すように各遺構における粒大（長さ×幅）の最大値、最小値、平均値は、B区SP-2140小ビット（任意に抽出した完形100粒）では、 $5.7\text{mm} \times 3.2\text{mm}$ 、 $3.8 \times 2.1\text{mm}$ 、 $4.6 \times 2.6\text{mm}$ 、C区SG-3030貯蔵穴（任意に抽出した完形100粒）では $5.1 \times 3.6\text{mm}$ 、 $3.3 \times 2.1\text{mm}$ 、 $4.2 \times 2.8\text{mm}$ 、E区SK-5007貯蔵穴（任意に抽出した完形100粒）では $5.6 \times 3.5\text{mm}$ 、 $3.6 \times 1.8\text{mm}$ 、 $4.2 \times 2.6\text{mm}$ 、F区SK-6002貯蔵穴（任意に抽出した完形30粒）では $4.4 \times 3.1\text{mm}$ 、 $3.5 \times 1.7\text{mm}$ 、 $4.0 \times 2.5\text{mm}$ であった。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

五十川遺跡における炭化種実同定の結果、イネの炭化果実が大量に同定された。イネ炭化果実（炭化米）は弥生時代以降比較的よく検出され出土例が多い。

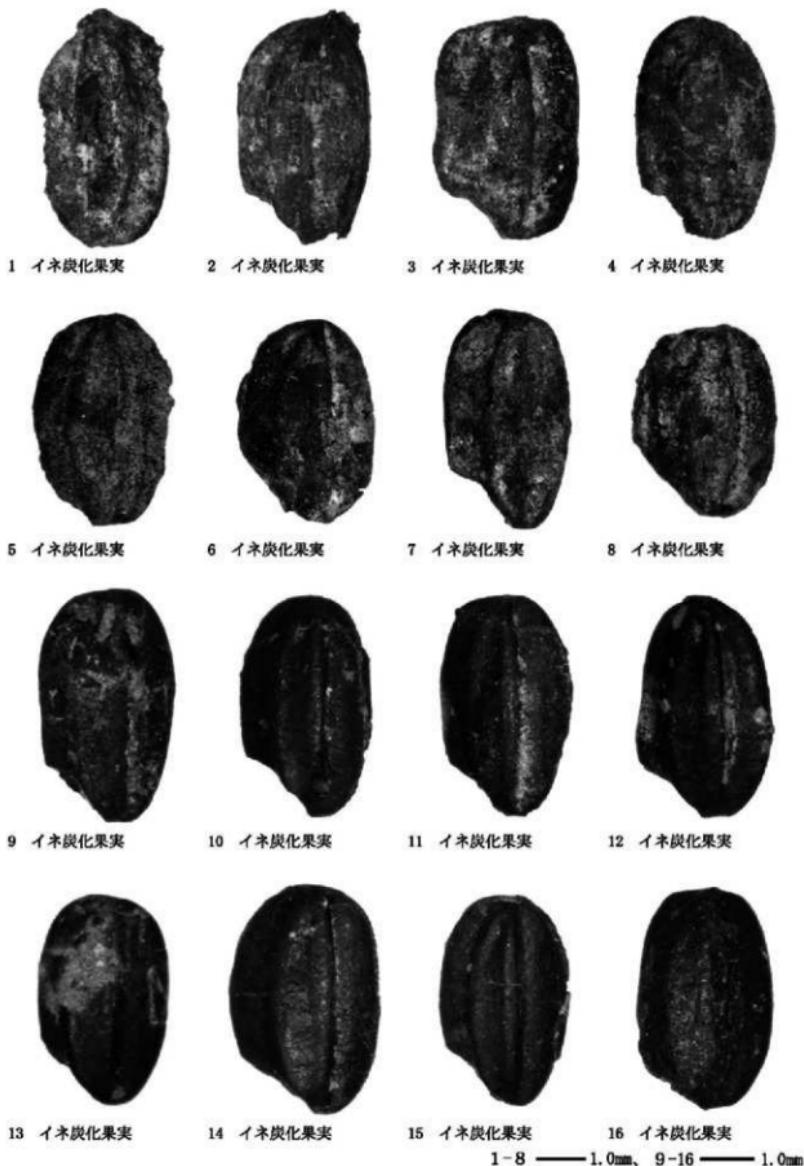
計測した100ないし30個の大きさ（表2）から形状の分布を表3に示した（佐藤、1988に基づく）。

B区SP-2140小ビット（時期不明）は短粒で極小粒と小粒が多い。C区SG-3030貯蔵穴（弥生時代前期・板付I式期）は短粒で極小粒から円粒で小粒が多い。E区SK-5007貯蔵穴（弥生時代前期末頃）は短粒で極小粒が多い。F区貯蔵穴（弥生時代前期・板付II式期）は短粒で極小粒が多い。C区SG-3030貯蔵穴（弥生時代前期・板付I式期）では、他と比べて円粒に近い短粒ないし円粒で小粒のものが多い傾向にあり、特徴的である。

参考文献

- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276
-283。
佐藤敏也（1988）弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版株式会社、p.97-111

図1 五十川遺跡の炭化穀実



II. DNA分析

1. はじめに

五十川遺跡の第10・11次発掘調査によりC区SG-3030(弥生時代前期・板付1式)とF区SK-6002(弥生時代前期・板付II式期)の貯蔵穴より多数の炭化したコメが出土した。同一遺跡から異なった時期の遺物が多数出土したことから、ここでは形態調査およびDNA分析によって時代の変遷に関する推定を試みた。

2. 材料と方法

サンプルは表4のとおりC区より50点、F区より30点の計80点を供試し、超音波洗浄後、顕微鏡観察し、デジタル画像を撮影・保存した(図3)。

各々のサンプルを70%エタノールで洗浄後、滅菌済みのステンレスのビーズ(分銅)とともに滅菌チューブに入れ、液体窒素でフリーズドライした。これをマルチビーズショッカー(安井器械製)により粉碎した。全DNAの抽出にはNaOHを用いたアルカリ抽出法(青木ら、1999)を一部改変した改変アルカリ抽出法を用いた。これは従来、出土遺物のDNAを抽出する際、用いている方法である。ここでは核・葉緑体の全DNAを抽出した。DNA抽出後ペレットに着色があるものはさらにカラムによる精製をおこなった。なお、コンタミネーションの確認のため、ネガティブ・コントロールとしてD.W.を用いた。

抽出されたDNAは以下の3つの領域について、Takara EX Taqを用いてPCR法によりDNAを増幅させた。

①温帯ジャボニカ・熱帯ジャボニカを判定するために用いているランダムプライマーによる増幅領域。

②葉緑体DNAのPS-ID領域。これはNakamura et al. (1997)によって開発された主に品種あるいは品種群を同定できる葉緑体DNA領域の一部分。*rpl16*遺伝子の下流域に存在する塩基配列。

③核DNAにあり、アミロース合成にかかる遺伝子座(Wx遺伝子座)の第2エクソン部分。

領域①では、表5の3つのランダムプライマーを用い、抽出産物をテンプレートとしてPCR増幅をおこなった。各プライマーで1回目のPCR増幅をおこなった後、このPCR産物をテンプレートとして2回目のPCR増幅をおこなう、2段階PCRを用いた。

領域②ではプライマー PSID-AとBのセットを用いて1回目のPCRを行い、2回目をプライマー PSID-Aの内側、遺物用に設計されたPSID-AとBのセットでおこなった。この領域は品種間の塩基配列の相違が顕著であり、イネでは温帯ジャボニカと熱帯ジャボニカとの判別に用いられている。いずれもPCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。増幅されたプロダクトを1.5%アガロースゲルの電気泳動によりDNA断片を確認後、ABI PRISM 337 Genetic Analyzer(Applied Biosystems, USA)により塩基配列の特定をおこなった。また、このPS-ID領域は葉緑体に存在するため母系の祖先を調べる上で有効である。

領域③はモチ、ウルチを判別するため、プライマー Wx-A1とWx-B1を用いて核DNAのモチ性の遺伝子領域を増幅し、判定するものである。この配列の有無によってイネのモチ性(胚乳のでんぶんのうちアミロースを欠き粘りが強くなった性質)かウルチ性かの判定が可能である。モチ性胚乳をもつ系統では、このモチ遺伝子座第2エクソンに23塩基分の重複がみられ、これがモチ性の原因と考えられる。これまでに、この重複以外の変異によるモチ栽培品種は見つかっていない。

表4 サンプルリストと長幅比

試料	長さ(m)	幅(m)	長幅比	粒大	試料	長さ(m)	幅(m)	長幅比	粒大	試料	長さ(m)	幅(m)	長幅比	粒大
C-1	4.3	2.8	1.55	12.2	C-31	3.9	2.7	1.42	10.6	F-11	4.1	2.7	1.55	11.1
C-2	4.6	2.7	1.72	12.4	C-32	4.3	2.7	1.61	11.4	F-12	4.0	2.8	1.43	11.1
C-3	4.0	3.0	1.33	12.2	C-33	4.9	2.5	1.92	12.3	F-13	4.0	2.9	1.40	11.6
C-4	4.7	3.1	1.51	14.6	C-34	3.9	2.8	1.41	11.0	F-14	4.0	2.9	1.40	11.6
C-5	4.4	3.1	1.42	13.4	C-35	4.6	2.8	1.62	13.0	F-15	4.1	2.7	1.52	11.3
C-6	4.3	2.8	1.55	12.0	C-36	4.2	2.7	1.56	11.5	F-16	4.3	2.4	1.74	10.4
C-7	4.7	2.7	1.71	12.9	C-37	4.0	2.8	1.42	11.5	F-17	4.0	2.3	1.72	9.2
C-8	3.6	2.7	1.30	9.8	C-38	4.4	3.1	1.42	13.9	F-18	4.1	2.3	1.77	9.5
C-9	4.2	2.6	1.66	10.8	C-39	4.6	2.8	1.66	12.7	F-19	4.5	2.7	1.66	12.1
C-10	4.2	2.6	1.60	11.1	C-40	3.3	2.4	1.61	9.1	F-20	4.2	2.5	1.65	10.6
C-11	4.3	2.7	1.56	11.8	C-41	4.4	2.7	1.64	12.1	F-21	4.3	2.7	1.59	11.8
C-12	4.5	2.5	1.78	11.6	C-42	4.1	2.8	1.45	11.6	F-22	4.1	2.5	1.60	10.2
C-13	4.0	2.8	1.45	11.2	C-43	4.1	2.3	1.79	9.2	F-23	3.9	2.8	1.43	10.8
C-14	4.4	2.6	1.70	11.7	C-44	4.7	2.8	1.68	12.9	F-24	4.1	2.4	1.75	9.8
C-15	5.2	2.9	1.78	15.4	C-45	4.5	2.5	1.80	11.4	F-25	4.2	2.3	1.80	9.8
C-16	4.2	3.1	1.37	13.1	C-46	4.3	2.8	1.50	12.0	F-26	3.8	2.5	1.54	9.5
C-17	4.2	2.5	1.63	10.6	C-47	4.5	2.9	1.65	13.2	F-27	3.6	2.6	1.40	9.2
C-18	4.3	2.6	1.63	11.1	C-48	4.2	2.6	1.64	10.7	F-28	4.0	3.1	1.30	12.2
C-19	4.6	2.7	1.69	12.6	C-49	3.8	2.5	1.44	9.8	F-29	3.6	1.9	1.90	6.9
C-20	4.1	2.5	1.64	10.2	C-50	4.1	2.7	1.52	11.2	F-30	4.2	2.6	1.58	11.0
C-21	4.0	2.9	1.39	11.4	F-1	4.0	2.4	1.69	9.7					
C-22	3.9	2.6	1.52	10.2	F-2	4.2	2.5	1.71	10.8					
C-23	4.0	2.4	1.64	9.8	F-3	4.0	3.3	1.22	12.9					
C-24	5.0	2.4	2.05	12.1	F-4	4.2	2.5	1.63	10.7					
C-25	4.2	2.7	1.54	11.4	F-5	4.1	2.5	1.60	10.4					
C-26	4.8	3.3	1.48	15.7	F-6	4.0	2.5	1.58	10.1					
C-27	4.4	2.7	1.60	12.1	F-7	4.3	2.8	1.52	12.0					
C-28	4.5	2.6	1.71	11.8	F-8	4.1	2.5	1.67	10.2					
C-29	4.6	2.7	1.73	12.3	F-9	4.3	2.8	1.55	12.2					
C-30	4.5	2.9	1.57	12.8	F-10	4.3	2.6	1.64	11.5					

今回の分析で使用したプライマーの配列を表5に示す。

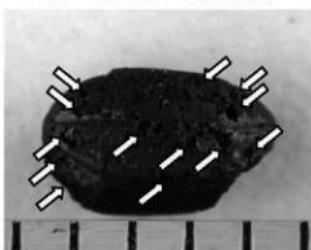
表5 PCR増幅に使用したプライマー

プライマー名	配 列	判 定
A-10	GCC TGC CTC ACG	Tr
B-20	GTC GCC TTA CCA	Tm
B-22	TCT GCT GAC CGG	Tr/Tm
PSID-A	AAA GAT CTA GAT TTC GTA AAC AAC ATA GAG GAA GAA	Tr/Tm
PSID-A2	CGT CGT GGT GGA AAA ATC TGG GTA CGT ATA TT	
PSID-B	ATC TGC TAC ATT TAA AAG GGT CTG AGG TTG AAT CAT	
Wx-A1	CAC CAT GTC GGC TCT CAC CA	
Wx-B1	CGA CGA CGG AGG GGA ACC	

3. 結果と考察

サンプルはかなり脆く、超音波洗浄中に破損するものが多かった。形状を保っているものでも図2の矢印部分のように熱を受けたとみられる穴が観察された。DNA抽出後、ほとんどのサンプルに着色がみられたため、半量をカラムにより精製した。念のため、カラム精製前と精製後の両方のサンプルをサーマルサイクターにかけてDNA増幅を試みた。また、領域②においては新しく田中らが開発したO2プライマーセットも試みた（プライマー Os2セットの配列は未発表）。両方のサンプルで増幅が確認できなかったため、2段階および3段階PCRをおこなったが、目的のバンドが得られなかった。さらに、断片化されたDNA増幅のために開発されたTOPOTAQ DNA Polymerase (Fidelity Systems, Inc.) を用いて温度条件や反応サイクルを検討したが、いずれもDNAの増幅はみられなかった。また、DNAが極めて少量と推定されたため、5粒ずつまとめて、同一実験を繰り返したが、バンドは確認されなかった。デジタル画像の観察によって、図2のとおりほとんどのサンプルが熱を受けた可能性が高かったためと考えられる。

図2 热を受けた炭化米写真

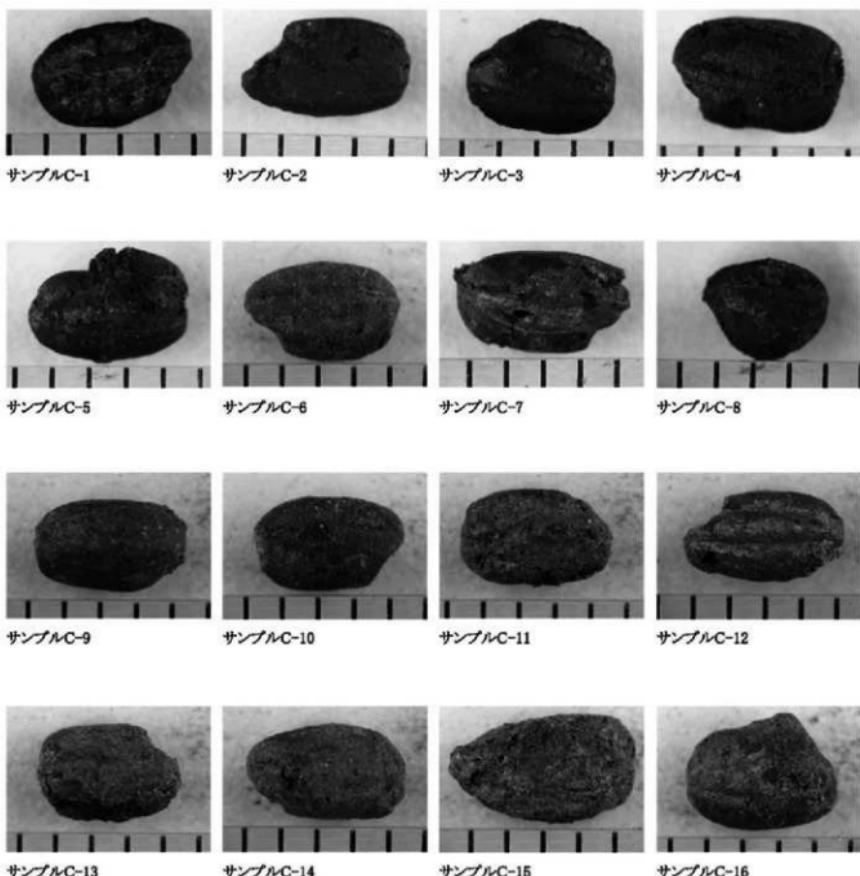


参考文献

- 青木千佳、西村隆雄、安井修二他 (1999) マルチビーズショッカによるイネ生葉からのDNAおよびRNA抽出法の改良、育種学研究第1巻別冊2号:18
- 中村郁郎 (1995) DNAフィンガープリント法「植物遺伝育種学実験法」、朝倉書店 : p113-117
- 佐藤洋一郎 (1999) DNA考古学、東洋書店、pp201
- 花森功仁子、大角信介、望月峰子、岡村涉、佐藤洋一郎 (2006) 登呂遺跡の再発掘調査に伴う炭化したコメの分析、日本文化財科学会第23回大会 : 288-289
- 花森功仁子、大角信介、望月峰子、向井謙、佐藤洋一郎 (2007) 全国のお跡から出土したイネ種子の遺伝的傾向、日本文化財科学会第24回大会:162-163

- Nakamura, I. (1990) New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association (ALPHA). Annu. Rep. Natl. Inst. Genet. 41:105 – 106
- Nakamura, I. and Y. I. Sato (1991) Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice (AD800) by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci. 5:175 – 179
- Nakamura, I., N. kameya, Y. Kato, S. Yamanaka, H. Jomori and Y. I. Sato (1997) A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed.Sci. 47:385 – 388

図3 サンプル画像



報告書抄録

ふりがな 書名	ごじゅっかわいせき ご一ごじゅっかわいせきだい10ジ・11ジちょうさのはうこく一 五十川遺跡 5 一五十川遺跡第10次・11次調査の報告		
副書名	市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書		
巻次	5		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1019		
編著者名	横山邦雄（3・5・6）上角智希（4）吉武学（その他・編集）※数字は章を表す		
編集機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667		
発行年月日	西暦2008年3月31日		
遺跡名 ふりがな	ごじゅっかわいせきだいじゅうじ	ごじゅっかわいせきだいじゅういちじ	
遺跡名	五十川遺跡第10次	五十川遺跡第11次	
所在地 ふりがな	ふくおかしみなみくごじゅっかわにちょうめちない		
遺跡所在地	福岡市南区五十川2丁目地内		
市町村コード	40130		
遺跡番号	0088		
北緯	33° 33' 30"		
東経	130° 26' 19"		
調査期間	2002.08.19～2003.03.28	2003.05.15～2004.01.31	
調査面積 (m ²)	1,100m ²	1,368m ²	
調査原因	道路建設		

遺跡概要

調査地点		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
10 次	A区	集落・墓地	古墳時代	堅穴住居2+溝8等	須恵器+土師器
	B区		弥生時代	貯蔵穴3+溝1	弥生土器+黒曜石石器+網片
	C区	集落	古代	溝1	土師器+須恵器
	D区		中世	溝2	貿易陶磁器
11 次	E区	集落・墓地	弥生時代	堅穴住居3+貯蔵穴4	弥生土器+炭化米
	F区		古墳時代	方形周溝墓2+石棺墓1	古式土師器
	G区		中世	土塗墓1+溝2	土師器
		集落	弥生時代	溝1	弥生土器
			中世	溝7+土坑1	土師器+輸入銘器
			弥生時代	貯蔵穴3	弥生土器+石器
			古墳時代	方形周溝墓2+土坑3	古式土師器+須恵器+管玉
			中世	溝2	土師器+陶磁器+石器+鐵洋
			弥生時代	堅穴住居4+溝3+木棺墓3+土壙墓2+須恵器9+貯蔵穴20+土坑17	弥生土器+石器+炭化米
			古墳時代	堅穴住居1+土坑4以下	古式土師器+土製品+石器
			古代	溝1	土師器+須恵器
			中世	柱列1+掘立柱建物1+溝7+土坑2	土師器+陶磁器+石器+鐵洋
			弥生時代	堅穴住居1+溝1	弥生土器
			中世	溝1	土器小片+陶磁器

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 V

五十川遺跡 5

一五十川遺跡第10次・11次調査の報告一

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1019集

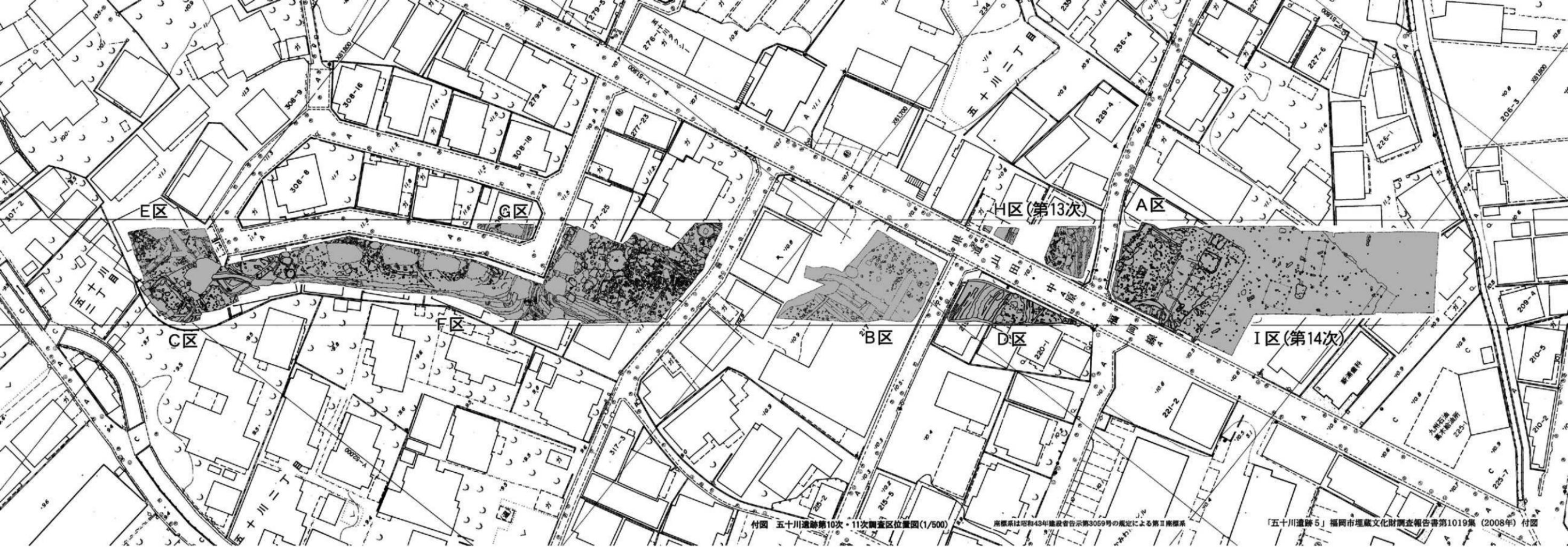
2008年(平成20年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 森田印刷所

福岡市中央区大手門2丁目1-21



付圖 五十川遺跡第19次・11次調査区位置図(1/500)

座標系は昭和43年建設省告示第30

「五十川遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1019集（2008年）付図